（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第297集

寺尾町下遺跡

住宅宅地関連公共施設整備促進事業（主要地方道
高崎万場秩父線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

群　馬　県　土　木　部
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県埋文事業団調査報告書第297集「寺尾町下遺跡」正誤表

頁	訂正箇所	誤	正
9	左１５行	調査は始め	調査は初め
30	40	大状型	大型
31	58	口径（12.0）	口径（11.0）
34	4	出？	出.
45,46	観察表すべて	酸火焔	酸化焔
48	遺物番号		１５と１６を入れ替え
52	3	口縁径14.2	口縁径13.2
52	遺物番号		７と８を入れ替え
53	34		計測値に口径（14.7）を追加
53	35	底径（7.0）	底径（9.0）
54	65	口縁～底部	胴下位～底部
54	65		口径（5.0）をとる
56	4	口径（11.0）	口径（12.2）
ＰＬ６	遺物番号	左の「１溝－９」	１溝－８
ＰＬ12	遺物番号	下の「上面－26」	上面－27
ＰＬ12	遺物番号		上面－27をとる

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第297集

寺尾町下遺跡

住宅宅地関連公共施設整備促進事業（主要地方道高崎万場秩父線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

群　馬　県　土　木　部

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

主要地方道高崎万場秩父線は高崎市と藤岡市を結ぶ幹線道路ですが、近年は交通量の増加に伴い、交通渋滞が目立つようになりました。この渋滞緩和を目的として群馬県土木部が道路改良工事を計画したところ、工事予定地には戦国時代の山城である寺尾茶臼山城の一部があり、記録保存が必要となったため当事業団によって事前の発掘調査が実施されました。短期間の調査であり、しかも尾根筋にもあたるために調査は困難をきたしましたが、関係機関、地元の方々の協力を得て無事に予定の期間内で所期の目的を達成することができました。

調査の結果、寺尾茶臼山城に関わる堀と、群馬県内でも類例の少ないといわれている畿内地方と関係の深い古墳時代初頭の土器などが発見されました。本年になって、発掘調査の成果を報告する作業を進めてまいりましたが、ようやくそれがまとまり、ここに「寺尾町下遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで群馬県土木部高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元関係者等には大変お世話になりました。

本報告書が地域の歴史解明に、また本県の城郭研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成14年３月26日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長　　小 野　宇三郎

例　言

1　本書は、住宅宅地関連公共施設整備促進事業（主要地方道高崎万場秩父線）に伴う事前調査として、平成12年度に実施された「寺尾町下遺跡」の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、群馬県高崎市寺尾町大字下である。

3　本発掘調査および整理事業は、群馬県土木部道路建設課の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　発掘調査期間は、平成12年６月15日～平成12年９月15日である。

5　発掘調査組織は下記の通りである。

(1)　事務担当者

理事長　小野宇三郎

常務理事兼事務局長　赤山容造

管理部長　住谷　進

調査研究第２部長　能登　健

総務課長　坂本敏夫

調査研究第４課長　飯島義雄

事務担当　笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、柳岡良宏、
片岡徳雄、大沢友治、吉田恵子、並木綾子、内山佳子、若田　誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

(2)　発掘調査担当者

主幹兼専門員　飯塚卓二　　主任調査研究員　池田政志

6　整理期間は、平成14年１月４日～平成14年３月31日である。

7　整理組織は下記の通りである。

(1)　事務担当者

理事長　小野宇三郎

常務理事　吉田　豊、赤山容造

管理部長　住谷　進

総務課長　大島信夫

資料整理課長　西田健彦

事務担当　笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、片岡徳雄、吉田恵子、
内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

(2)　整理担当者

主任調査研究員　池田政志

補助員　岸　弘子、新谷さか江、高橋順子、原島弘子、吉澤照恵

8　本報告書作成の担当

編集　池田政志

本文執筆　大江正行（中世遺物観察表）、神谷佳明（須恵器観察表）、石守　晃（第４章第３節）、
関　晴彦（第１章第１節）、深澤敦仁（土師器観察表の一部）、池田政志（前記以外）

遺構写真撮影　各調査担当者

航空写真撮影　㈱測研

遺物写真撮影　佐藤元彦

遺物保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、高橋初美

遺物機械実測　佐藤美代子、田中富子、富沢スミ江、矢島三枝子

9　出土遺物および記録図、写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　発掘調査・本書の作成に当たっては次の機関、諸氏から貴重な御教示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

高崎市教育委員会、飯森康広、神戸聖吾、原　眞、茂木　渉

凡　　例

・挿図中に用いた方位は座標北を表す。

・遺構図の縮尺については、溝１／100、全体図１／200、土層断面図１／80、１／120である。
これ以外の縮尺を用いている場合は各々のスケールを参照していただきたい。

・本報告書で用いたテフラの略号は「Ａｓ－Ａ」浅間Ａテフラ（1783年降下）である。

・本文中に表記した主軸方位は、各遺構の中心線を主軸と見なして計測した。

・遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また●は今回報告した遺物の出土位置を表している。図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図面中に番号のない遺物は出土位置を記録せずに取り上げた遺物である。

・遺物実測図の縮尺は１／３を原則とした。これ以外の縮尺を用いる場合は各遺物実測図に明記したので、参照していただきたい。

・写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。

・遺物観察表の記載方法は次の通りである。

(1)　（　）内の計測値は推定値を表す。

(3)　石器類の重量はすべて残存値を表す。

(4)　色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。

(5)　計測値の単位は、cm、ｇである。

・本報告書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院　地形図　1／50,000　「富岡」「高崎」

高崎市都市計画図　1／2,500　No.43

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
写真図版目次

第１章　発掘調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 8
　第２節　発掘調査の経過 …… 8
　第３節　調査方法 …… 9
　第４節　基本土層 …… 9

第２章　周辺の環境
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　発見された遺構と遺物
　第１節　遺跡の概要 …… 14
　第２節　平坦部の調査
　　1　１号溝 …… 17
　　2　２号溝 …… 17
　第３節　尾根部の調査
　　1　１号道 …… 38
　　2　２号道 …… 38
　　3　平坦面 …… 38
　　4　頂部平坦面 …… 38
　　5　遺物集中点 …… 38
第４章　調査の成果とまとめ
　第１節　１号溝出土遺物について …… 57
　第２節　遺物集中点について …… 60
　第３節　寺尾茶臼山城と寺尾町下遺跡の中世遺構 …… 61

報告書抄録

写真図版

挿図目次

第１図　基本土層図 …… 9
第２図　北東上空から遺跡周辺を望む …… 10
第３図　周辺遺跡分布図 …… 12
第４図　確認調査のトレンチ配置概念図 …… 14
第５図　１号溝・２号溝平面図 …… 15
第６図　１号溝土層断面図 …… 17
第７図　２号溝土層断面図 …… 17
第８図　１号溝出土遺物（１） …… 18
第９図　１号溝出土遺物（２） …… 19
第10図　１号溝出土遺物（３） …… 20
第11図　１号溝出土遺物（４） …… 21
第12図　１号溝出土遺物（５） …… 22
第13図　１号溝出土遺物（６） …… 23
第14図　１号溝出土遺物（７） …… 24
第15図　１号溝出土遺物（８） …… 25
第16図　１号溝出土遺物（９） …… 26
第17図　１号溝出土遺物（10） …… 27
第18図　２号溝出土遺物（１） …… 32
第19図　２号溝出土遺物（２） …… 33
第20図　尾根部全体図 …… 35
第21図　調査前の尾根部地形実測図 …… 36
第22図　尾根部トレンチ土層断面図 …… 37
第23図　遺物集中点上面出土遺物（１） …… 39
第24図　遺物集中点上面出土遺物（２） …… 40
第25図　遺物集中点上面出土遺物（３） …… 41
第26図　遺物集中点上面出土遺物（４） …… 42
第27図　遺物集中点上面出土遺物（５） …… 43
第28図　遺物集中点上面出土遺物（６） …… 44
第29図　遺物集中点下面出土遺物（１） …… 47
第30図　遺物集中点下面出土遺物（２） …… 48
第31図　遺物集中点下面出土遺物（３） …… 49
第32図　遺物集中点下面出土遺物（４） …… 50
第33図　遺物集中点下面出土遺物（５） …… 51
第34図　遺構外出土遺物 …… 55
第35図　土師質土器皿器形比率グラフ …… 58
第36図　軟質陶器鉢器形比率グラフ …… 58
第37図　遺跡周辺地形図 …… 59
第38図　寺尾茶臼山城縄張図 …… 61
第39図　斜面部平面図 …… 62

図版目次

ＰＬ１　寺尾町下遺跡周辺

寺尾町下遺跡周辺

遺跡全景

ＰＬ２　１号溝全景

１号溝遺物出土状況

１号溝全景

１号溝土層断面Ａ－Ａ′

ＰＬ３　２号溝全景

２号溝遺物出土状況

平坦部全景

調査前尾根部全景

１号道近撮

２号道全景

尾根部全景

尾根部全景

ＰＬ４　尾根上の平坦面全景

尾根部全景

尾根部全景

尾根部全景

遺物集中点上面出土状況

遺物集中点下面出土状況

遺物集中点下面出土状況

ＰＬ５　遺物集中点下面出土状況

尾根北端の石垣

尾根北西側の石垣

頂部平坦面から南東に延びる溝

頂部平坦面から北東方向を望む

頂部平坦面から北方向を望む

ＰＬ６　１号溝出土遺物（１）

ＰＬ７　１号溝出土遺物（２）

ＰＬ８　１号溝出土遺物（３）

ＰＬ９　１号溝出土遺物（４）

ＰＬ10　２号溝出土遺物

遺物集中点上面出土遺物（１）

ＰＬ11　遺物集中点上面出土遺物（２）

ＰＬ12　遺物集中点上面出土遺物（３）

ＰＬ13　遺物集中点上面出土遺物（４）

ＰＬ14　遺物集中点下面出土遺物（１）

ＰＬ15　遺物集中点下面出土遺物（２）

ＰＬ16　遺物集中点下面出土遺物（３）

ＰＬ17　遺物集中点下面出土遺物（４）

ＰＬ18　遺構外出土遺物

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

本路線の試掘調査は、平成６年度・８年度に実施されており、それらの調査では発掘調査を実施すべき遺構・遺物は発見されていなかった。平成10年８月の段階でも、人家が建ち並び、試掘調査に入ることはできなかった。平成11年２月はじめに、用地の買収にからんで土木部道路建設課から照会があり、同年２月25日に協議し、２月中に工事立会調査を行なうこととなった。

２月29日急きょ工事立会調査を実施したところ、現寺尾藤岡線を挟む北側では遺構・遺物は発見されなかった。南側では茶臼山城（周知の遺跡）に隣接する平坦な範囲で土坑状の掘り込みと石臼を発見したこと、路線の範囲は茶臼山城北裾部の推定「木戸口」（山崎一氏による）にかかること、路線にかかる頂上部からの眺望が良好であり斜面またはその下の平坦地に何らかの城の施設の存在が想定されること等から、本調査が必要と判断し、３月28日に道路建設課・高崎土木事務所と本調査実施へ向けて協議を開始した。

平成11年度末のことであり、群馬県埋蔵文化財調査事業団の平成12年度事業計画は固まっていたが、緊急に計画変更を埋文事業団に打診して内諾を得たことから、平成12年６月着手・調査期間３カ月で発掘調査を実施することとなった。

第２節　発掘調査の経過

６月15日　調査準備開始
７月10日　調査区伐採作業
７月11日　伐採後の現況の航空写真測量を行う
７月17日　平地部分の遺構確認のためトレンチ調査を行う
７月24日　表土掘削作業開始
７月25日　土工による遺構確認作業開始
７月27日　１号溝調査開始
７月31日　２号溝調査開始
８月３日　２号溝調査終了　尾根部表土掘削開始
８月10日　遺物集中地点確認
８月21日　１号溝調査終了
８月22日　航空写真測量を行う
８月23日　調査区埋め戻し作業開始
８月25日　遺物集中地点下面からさらに遺物の出土が確認できたため、埋め戻し作業を中断して遺物集中地点下面の調査を行う
８月28日　遺物集中地点の調査終了
調査区埋め戻し作業終了
９月15日　撤収完了

第３節　調査方法

本遺跡は、高崎市寺尾町大字下に所在する。遺跡名称は、群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと、寺尾下遺跡となるべきであるが、高崎市教育委員会との協議により、寺尾町下遺跡の名称を採用した。

遺跡内の測量用座標及び基本杭は国家座標により設定した。この国家座標は2002年４月の測地系改正以前の日本測地系によるものである。

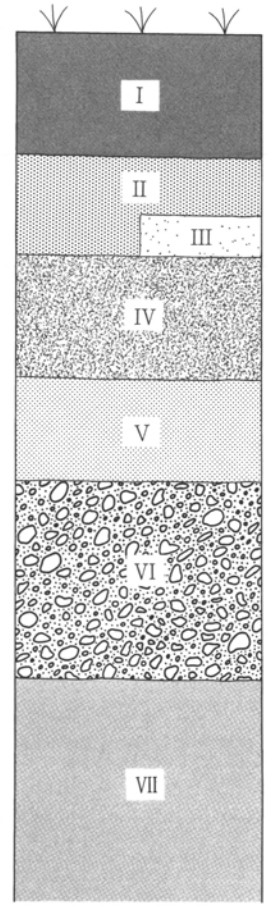
本遺跡の調査範囲は遺跡の南方の茶臼山から延びる細い尾根とそこから続く平坦地からなっているため、それぞれを尾根部、平坦部と呼称して調査を行った。本書の編集においてもこの呼称を用いている。

遺跡地の現況は、山林と宅地、公民館跡地であった。特に公民館跡地部分は攪乱が深くまで及んでいた。調査は始め尾根部分の伐採を行い、現況の地形測量を航空写真測量によって行った。その後、平坦部はバックフォーによる表土掘削を行い、順次遺構確認、遺構調査へと進んでいった。尾根部は急傾斜であったため、作業員の安全を考え、表土掘削には極力重機を用い、人力による作業が必要な場合は安全帯を使用した。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては番号を付し、標高を測り取り上げた。遺構測量は調査担当者によるものと、測量会社に委託して測量したものがある。遺構測量については地上測量を行い、全体の地形測量は航空写真測量を行った。縮尺については1／20を原則としたが、全体図、地形図は1／100、1／200で作成した。なお、出土した遺物や記録した図、写真の基礎的な整理は発掘調査と並行して現場で実施したが、調査期間が短かったため終了せず、その後は調査担当者が行った。整理作業は、平成１３年度に行い、遺物接合、復元、遺物写真撮影、遺物実測、遺構図修正、遺構図・遺物実測図トレース、版下作成、印刷の手順で実施した。

第４節　基本土層

本遺跡の平坦部は直前建物による破壊が著しく、基本土層中のＡｓ－Ａは部分的な確認にとどまっている。また、表土からおよそ1.5～２ｍ下位の砂礫層は河川の流水によるものと思われ、遺跡の西を流れる中山川、あるいは烏川の影響を受けていると考えられる。さらに下位の青灰色砂質土は粘土化が進んでおり、この層中からは流木と思われる自然木が確認されている。



第１図　基本土層図

Ⅰ層　表土
Ⅱ層　明褐色土
Ⅲ層　Ａｓ－Ａ
Ⅳ層　暗褐色土　砂と小礫を含む。
Ⅴ層　黄褐色砂質土
Ⅵ層　砂礫層
Ⅶ層　青灰色粘質土

第２章　周辺の環境

第１節　地理的環境

本遺跡は観音山丘陵の東端に位置しており、県道高崎吉井線と寺尾藤岡線の間に立地している。幅20～30ｍの狭い尾根とその東側に続く平坦地からなり、平坦地の標高は87ｍほどで、尾根頂部との比高差は13ｍ程を計る。観音山丘陵は東を烏川、北を碓氷川、南を鏑川に囲まれ、標高は200～250ｍほどである。この観音山丘陵からは多くの小河川が前にあげた３つの河川に流入している。本遺跡もその小河川の一つである中山川の右岸に当たる。中山川は高崎市から吉井町へ抜ける県道高崎吉井線の中山峠付近に源を発し、北東流して烏川に注いでいる。本遺跡の東には、烏川に沿って発達した低地が広がっている。この低地は多くは水田に利用されてきていたが、現在では碓氷川との合流点付近を中心に市街化が進んできている。本遺跡はこの低地と観音山丘陵の変換点付近に位置し、南側には寺尾茶臼山城が立地する茶臼山がある。この茶臼山から北に延びる細い尾根が本遺跡の西端にあたる。この茶臼山は現在では開発が進行し、城山団地、根小屋団地などの住宅団地が頂部を削平して造られている。また、本遺跡の南東にも観音山丘陵の縁辺が延びているが、ここには「根小屋七沢」と呼ばれる小河川が連続した地域がある。これは観音山丘陵から流れ出ている小河川が天井川となり、馬の背を連ねたような景観をなしているのである。この天井川については人為的な所産との指摘もされている地域である。

第２図　北東上空から遺跡周辺を望む

第2節　歴史的環境

寺尾町下遺跡の存在する寺尾町は高崎市の西端に位置している。寺尾の地名は吾妻鏡にも見られるように中世から続く地名である。戦国期には片岡郡寺尾之郷であり、近世江戸期から明治22年までは寺尾村として片岡郡に見られる。明治22年からは片岡村の一大字となり、昭和2年、片岡村は高崎市と合併し、高崎市の大字となる。昭和26年に高崎市寺尾町となり、現在に至っている。「寺尾」の由来は寺の尾、寺院のある丘、寺のほとりの意味であるとの口碑が残っており、この寺は観音山の清水寺をさすと考えられている*[1]。

この地域の歴史的な環境は以下に述べるとおりである。

旧石器時代　寺尾町下遺跡の北西6㎞の少林山台遺跡で槍先形尖頭器が出土しているのが知られている程度である。

縄文時代　7山名柳沢遺跡では前期前半の集落が調査されており、12山名戸矢遺跡では後期の集落が検出されているほか、本遺跡の北西5.5㎞の大平台遺跡では前期から中期にかけての集落が、少林山台遺跡では早期から晩期の遺物が出土している。また15田端遺跡、烏川左岸の56下佐野遺跡でも縄文時代の集落が確認されている。

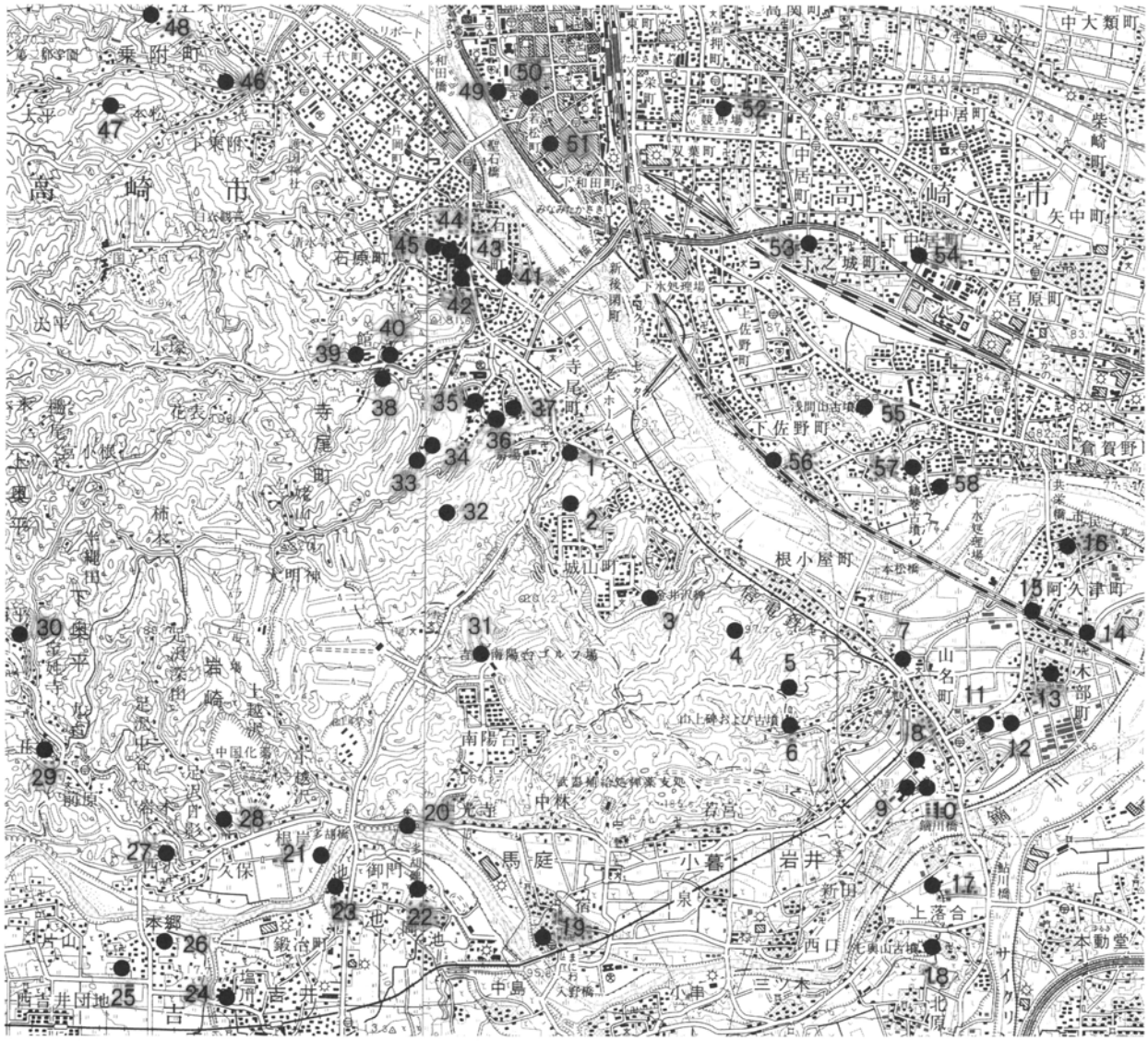
弥生時代　烏川右岸地域では少林山台遺跡で後期樽式期の住居が確認されているにとどまる。烏川の左岸では弥生時代中期後半の土器が51竜見町遺跡、52高崎競馬場遺跡で出土している。

古墳時代　遺跡数は大幅に増加している。烏川左岸では5世紀初頭に築造された県内第2位の規模を持つ55浅間山古墳、5世紀前半の57大鶴巻古墳が知られた存在である。烏川右岸では5世紀前半から中頃に築造された42三島塚古墳（径60mの円墳）をはじめ、6世紀初頭の前方後円墳としては東日本最大の18七輿山古墳、45石原稲荷山古墳（6世紀末）、48鶯塚古墳（7世紀後半）、43ボウズ山古墳（6世紀前半）、6山ノ上古墳（7世紀中頃）、17伊勢塚古墳（6世紀末～7世紀初）などが知られている。古墳時代の集落としては少林山台遺跡及び碓氷川左岸の八幡遺跡、利根川左岸の56下佐野遺跡で古墳時代初頭の住居が確認されているが、観音山丘陵での遺跡は中期以降に限られている。35石原鶴辺団地遺跡で中期の集落が確認されているほか、後期の集落は27東吹上遺跡、21川福遺跡、40寺尾東館遺跡、38寺尾館台遺跡、36鶴辺遺跡、12山名戸矢遺跡などで確認されている。また、本遺跡の南東2.7㎞には上野三碑の一つであり、681年の記銘を持つ6山ノ上碑が存在している。

奈良・平安時代　集落は21富岡遺跡、20川福遺跡、25道六神遺跡、40寺尾東館遺跡、38寺尾館台遺跡、35石原鶴辺団地遺跡、7山名柳沢遺跡、12山名戸矢遺跡、8山名原口Ⅰ遺跡で確認されている。生産遺跡としては本遺跡の南西1.8㎞の地点で、9世紀前半頃に操業していたと思われる31ヌカリ沢A窯址が調査されている。また、46乗附廃寺は9～10世紀の寺院と考えられている。さらにこの地域は上野三碑がすべて存在しており、前にあげた山ノ上碑の他、711年に建立されたとする22多胡碑は本遺跡の南南西3.5㎞に、8世紀前半の建立とされる3金井沢碑は本遺跡の南東1.2㎞に存在している。

中世　この地域の城館址については「寺尾中城遺跡」（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000）に詳しいのでそちらを参照していただくことにして、本稿では名称と推定される時期をあげておくにとどめたい。烏川左岸では53和田下之城（16世紀後半）、58倉賀野城（室町期）があげられる。観音山丘陵には多くの城館址が存在しており、本遺跡の立地する茶臼山に立地する2寺尾茶臼山城（南北朝期）をはじめ、47寺尾上城（戦国期）、44石原屋敷（戦国期）、38左近屋敷（南北朝期か）、32寺尾中城（南北朝期）、4根小屋城（16世紀後半）、5山名城（14～16世紀）、16木部北城（戦国期）、14木部氏館（15世紀）、13木部城（16世紀）、11山名館（12世紀か）、39寺尾館（戦国期）などがあげられる。吉井町地域でも30馬場城（14～15世紀か）、29奥平城（14～15世紀か）、28岩

崎城（15～16世紀）、24塩川の砦（16世紀か）、23上池館（寿永年間？）、19馬庭城（16世紀か）等多くの例をあげることができる。また、40寺尾東館遺跡、35石原鶴辺団地遺跡、７山名柳沢遺跡でも中世の建物、堀、館址などが確認されている。



第３図　周辺遺跡分布図

＊1　角川日本地名大辞典

参考文献　「高崎市遺跡分布地図」　高崎市教委　1998　　「高崎市史」資料編２・３　1996・2000　　「群馬県史」資料編２　1986
「吉井町遺跡地図」　吉井町教委　1995　　「群馬県遺跡大辞典」　上毛新聞社　1999　　「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委 1996

番号	遺　跡　名	所 在 地	主　な　文　献
1	寺尾町下	高崎市寺尾町	本報告書
2	寺尾茶臼山城	高崎市寺尾町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
3	金井沢碑	高崎市山名町	「群馬県史」通史編２　1991・「上野三碑の研究」尾崎喜左雄　1980
4	根小屋城	高崎市山名町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
5	山名城（寺尾下城）	高崎市山名町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
6	山ノ上碑・山ノ上古墳	高崎市山名町	「群馬県史」通史編２　1991・同資料編３　1981・「上野三碑の研究」尾崎喜左雄　1980
7	山名柳沢	高崎市山名町	「山名柳沢遺跡」高崎市遺跡調査会　1998
8	山名原口Ⅰ	高崎市山名町	「山名原口Ⅰ遺跡」高崎市教委　1990
9	山名原口Ⅱ	高崎市山名町	「山名原口Ⅱ遺跡」高崎市教委　1991
10	山名古墳群	高崎市山名町	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
11	山名館	高崎市山名町	「群馬県古城塁址の研究　補遺編」上巻　山崎一　1979・「高崎市史」資料編３　1996
12	山名戸矢	高崎市山名町	「山名戸矢遺跡」高崎市教委　1993
13	木部城	高崎市木部町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
14	木部氏館	高崎市木部町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
15	田端	高崎市阿久津町	「田端遺跡」県事業団　1988
16	木部北城	高崎市阿久津町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
17	伊勢塚古墳	藤岡市上落合	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
18	七輿山古墳	藤岡市上落合	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
19	馬庭城	吉井町馬庭	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
20	川福	吉井町馬庭	「川福遺跡」吉井町教委　1986
21	富岡	吉井町岩崎	「富岡遺跡」吉井町教委　1989
22	多胡碑	吉井町池	「群馬県史」通史編２　1991・「上野三碑の研究」尾崎喜左雄　1980
23	上池館	吉井町池	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
24	塩川の砦	吉井町塩川	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
25	道六神	吉井町本郷	「道六神遺跡」吉井町教委　1986
26	本郷城	吉井町本郷	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
27	東吹上	吉井町岩崎	「県立博物館研究報告」８　県立博物館　1973
28	岩崎城	吉井町岩崎	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
29	奥平城	吉井町下奥平	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
30	馬場城	吉井町上奥平	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978
31	ヌカリ沢Ａ窯址	吉井町馬庭	「ヌカリ沢Ａ窯址発掘調査報告書」吉井町教委　1995
32	寺尾中城	高崎市寺尾町	「寺尾中城遺跡」県事業団　2000・「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971
33	姥山古墳	高崎市寺尾町	「高崎市遺跡分布地図」高崎市教委　1998
34	寺尾中台	高崎市寺尾町	「寺尾中台遺跡」高崎市遺跡調査会　1995
35	石原鶴辺団地	高崎市石原町	「石原鶴辺団地Ⅰ遺跡」高崎市教委　1991・「石原鶴辺団地Ⅱ遺跡」高崎市教委　1993
36	鶴辺	高崎市石原町	「鶴辺遺跡」高崎市教委　1989
37	桜塚古墳	高崎市石原町	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
38	寺尾館台・左近屋敷	高崎市寺尾町	「寺尾館台・左近屋敷遺跡」高崎市遺跡調査会　1999
39	寺尾館	高崎市寺尾町	「高崎市史」資料編３　1996
40	寺尾東館	高崎市寺尾町	「寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」高崎市教委　1996
41	石原葭田	高崎市石原町	「石原葭田遺跡」高崎市教委　1992
42	三島塚古墳	高崎市石原町	「三島塚古墳遺跡」高崎市教委　1996・「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
43	坊主山古墳	高崎市石原町	「中石原記載もれ１号墳」高崎市教委　1990
44	石原屋敷	高崎市石原町	「群馬県古城塁址の研究」下巻　山崎一　1978・「高崎市史」資料編３　1996
45	石原稲荷山古墳	高崎市石原町	「石原稲荷山古墳遺跡」高崎市教委　1981
46	乗附廃寺	高崎市乗附町	「研究紀要」10　県事業団　1992
47	寺尾上城	高崎市乗附町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
48	鶯塚古墳	高崎市乗附町	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
49	頼政神社古墳	高崎市宮元町	「国道17号線拡幅に伴う頼政神社古墳の調査」高崎市教委　1996
50	高崎市218号古墳	高崎市若松町	「高崎市遺跡分布地図」高崎市教委　1998
51	竜見町	高崎市竜見町	「群馬県史」資料編２　1986
52	高崎競馬場	高崎市上中居町	「群馬県史」資料編２　1986
53	和田下ノ城	高崎市下ノ城町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996
54	下中居条里	高崎市下中居町	「下中居条里遺跡」高崎市教委　1996
55	浅間山古墳	高崎市倉賀野町	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
56	下佐野	高崎市下佐野町	「下佐野遺跡Ⅱ地区」県事業団　1986・「下佐野遺跡」県事業団　1989
57	大鶴巻古墳	高崎市倉賀野町	「群馬県の史跡」古墳編　群馬県教委　1995
58	倉賀野城	高崎市倉賀野町	「群馬県古城塁址の研究」上巻　山崎一　1971・「高崎市史」資料編３　1996

表１　周辺遺跡一覧表

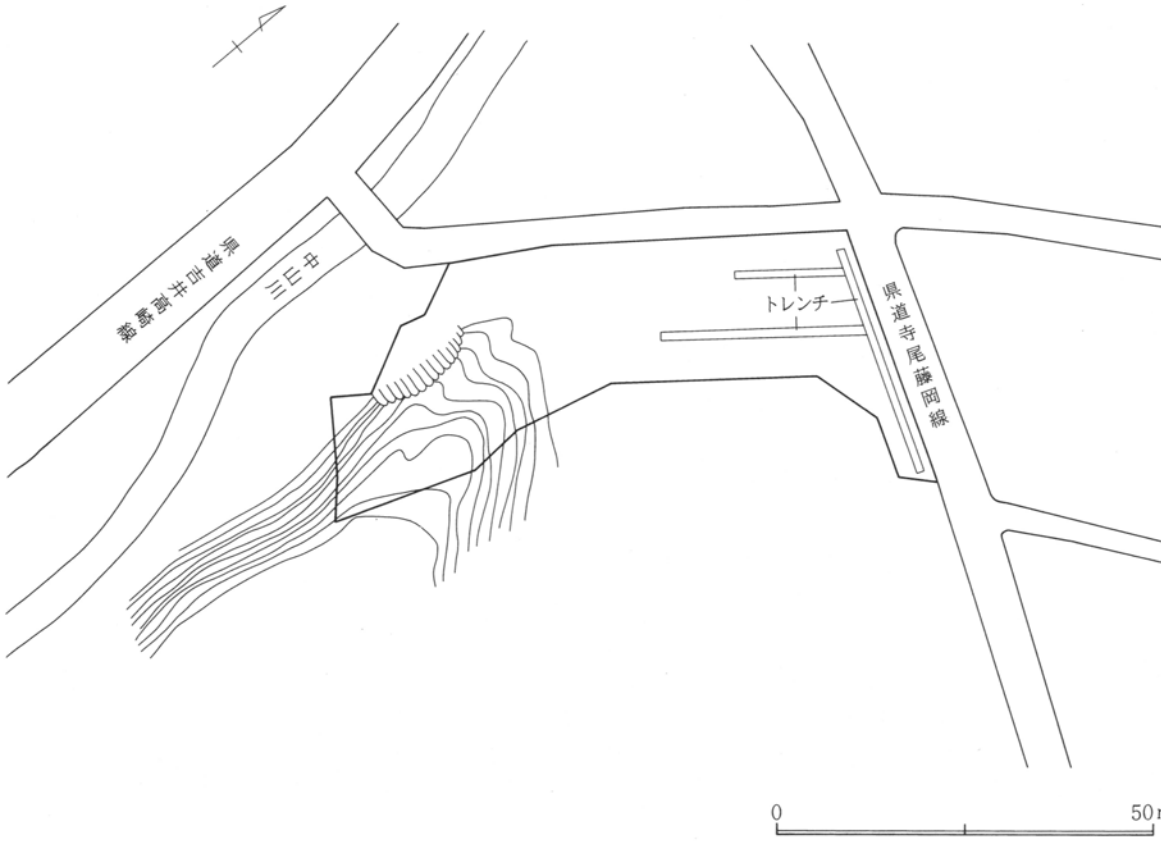
第３章　発見された遺構と遺物

第１節　調査の概要

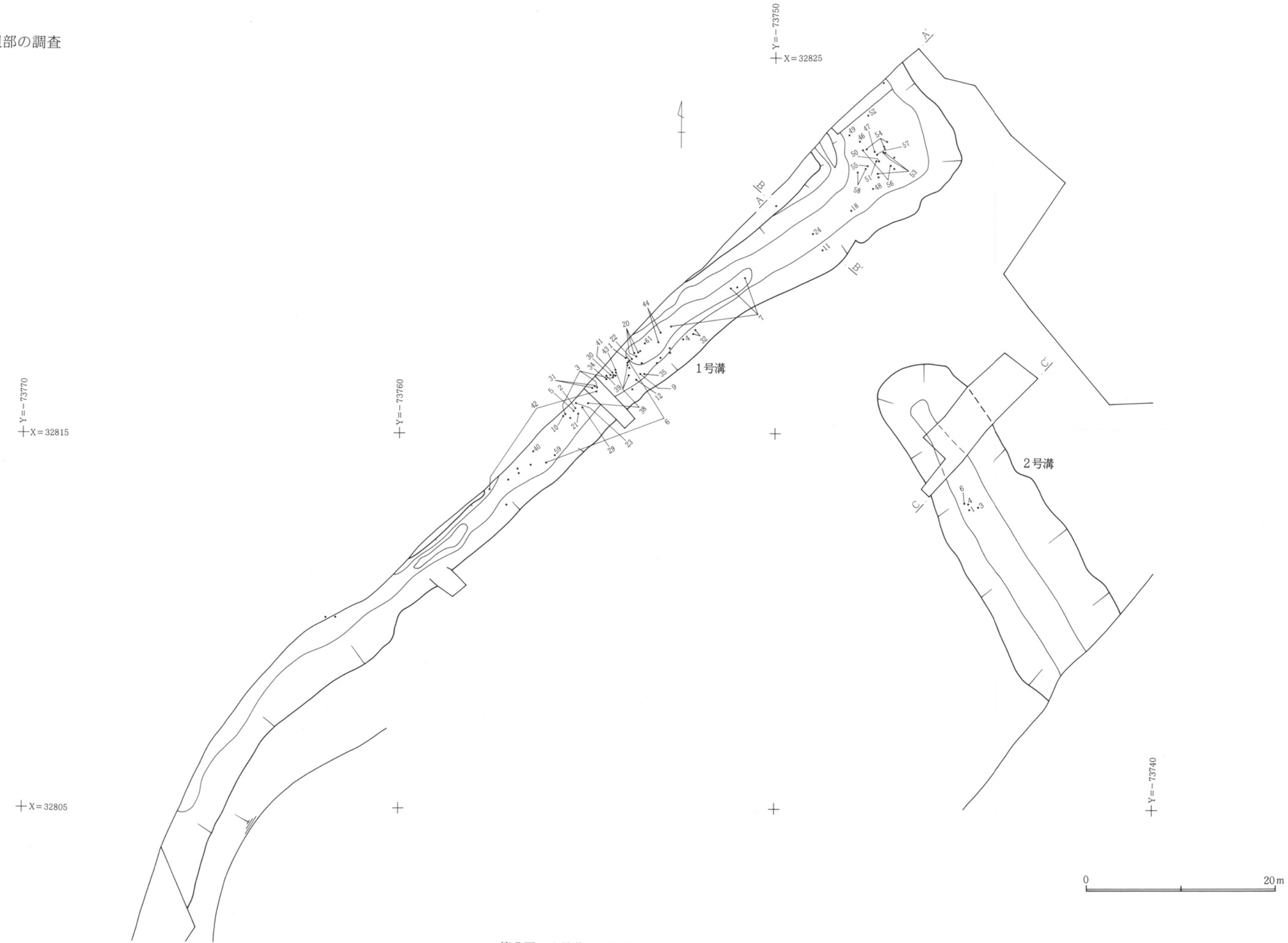
調査区北東側の平坦部では、茶臼山城関連の遺構を念頭に置いての調査となった。県道寺尾藤岡線は鎌倉街道に推定されているため、この県道際からトレンチを入れて遺構確認を行ったが、鎌倉街道に関連すると思われる遺構は検出できなかった。さらに北東側からトレンチ調査を行ったところ、中央部付近で２号溝が確認できた。これよりも北東側では遺構が確認できなかったため、調査は不要と判断し、懸案であった排土置き場として用いることにした。２号溝が確認できたため、これよりも南西側ではこの面を確認面として遺構確認を行ったところ、調査区北西に沿った現道際に１号溝を確認した。

本遺跡の西端から南端にかけては、茶臼山から細い尾根が延びている。この尾根は山崎一によって寺尾茶臼山城の木戸口に推定されている地点である。この尾根の北端から頂部にむかって１号道が延びている。これを山崎は茶臼山城本廓への道としていたので確認するためのトレンチ調査を行った。１号トレンチ、および４号トレンチの断面から、１号道下面にはＡｓ－Ａの堆積は確認できなかった。２号トレンチおよび１号道の南壁上方ではＡｓ－Ａを確認できているため、現在の１号道はＡｓ－Ａ降下後に開削されたものと判断したい。また、この１号道の脇で狭い平坦面が確認されている。これは人為的に尾根を削りだしたものと思われるが、この面からも柱穴等の施設の痕跡を見いだすことはできなかった。しかし、１号道に接して存在していることからこの平坦面は１号道開削時に削り取られている可能性も考えられる。

この地点では山崎の推定する茶臼山城木戸口を想起させる遺構は僅かな平坦面しか検出できなかった。しかし、茶臼山城の構造から見て、この地点に木戸口があったことは充分に考えられる。従ってこの地点に存在したであろう木戸口関連の施設は、この１号道をＡｓ－Ａ降下後に拡張したことによって破壊されたことが推定される。



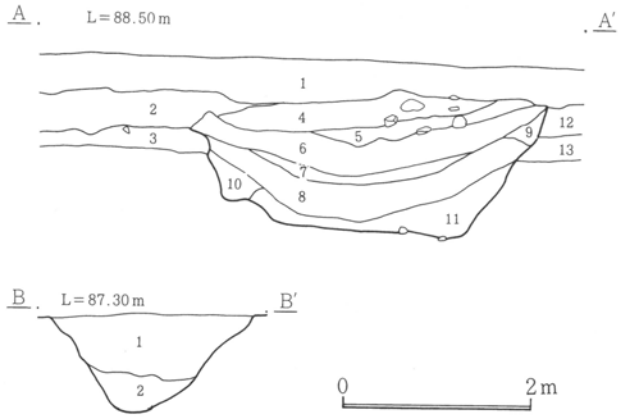
第４図　確認調査のトレンチ配置概念図



第５図　１号溝・２号溝平面図

第２節　平坦部の調査

１　１号溝



A－A′
1：表土
2：浅間Ａ軽石
3：暗褐色土　小礫を含む。
4：暗褐色土　小礫に加え、やや大きい石を含む。
5：暗褐色土　中・小の礫を多量に含む。炭化物、焼土をやや多く含む。
6：暗褐色土　礫をやや多く含む。黄褐色土粒を混入する。
7：黒褐色土と暗褐色土の混土　礫を殆ど含まない。
8：暗褐色土　やや暗い。黄褐色土粒、小礫を少量含む。
9：暗褐色土　黄褐色土粒を多く含み、黄色味がかる。
10：暗褐色土　礫を含まず、やや暗い。
11：暗褐色土　小礫と下層の地山土（シルト質）の粒子を含む。
12：暗黄褐色土　小礫を殆ど含まない。やや明るい。
13：暗褐色土　やや暗い。小礫、砂粒を多く含む。

B－B′
1：暗褐色土　黄褐色土粒、小礫を少量含む。A－A′の８層に近似。
2：暗褐色土　小礫を中央部に含む。A－A′の11層に近似。

第６図　１号溝土層断面図

位置　調査区北西の現道に沿って検出された。

方向　N－50°－E

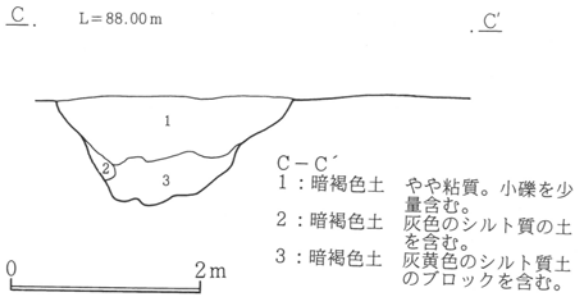
形状　ほぼ直線的であるが、北東でほぼ直角に屈曲し、北西方向の現道下に延びていた。調査終了後、現道下の工事の際、立ち会って確認したところ、この方向には延伸せず、約１ｍほどで端部が確認できた。また、南西側では、南から延びる尾根の端部を巻くように緩やかに湾曲している。南西側端部は攪乱を受けており、立ち上がりは検出されなかった。断面形状は屈曲部では逆台形状を示し、直線部では逆三角形を呈している。

規模　調査された範囲では長さ29ｍを計る。直線部での上幅は1.4ｍ、屈曲した部分では3.6ｍを計る。深さは南西から北東に向けて深くなる傾向を示し、中央付近では45㎝程度、屈曲部では最も深くなり約１ｍを計る。

埋没土　埋没土中に砂質土や小礫を含むところから、流水の影響も受けていると思われるが、常に水が流れていたとは考えられない。屈曲部で本溝をＡｓ－Ａが覆っている状況が確認されている。

遺物　掲載した遺物は軟質陶器を中心に、土師質土器、青磁片を含む64点であるが、この他に軟質陶器片107点が出土している。出土状況は直線部の中央付近から軟質陶器の鉢、内耳堝の破片がやや集中して出土しているが、全体に溝底からやや浮いた状況での出土が多い。また屈曲部の溝底から中層で土師質土器皿が約13個体まとまって出土している。

２　２号溝



第７図　２号溝土層断面図

位置　平坦部ほぼ中央で検出された。

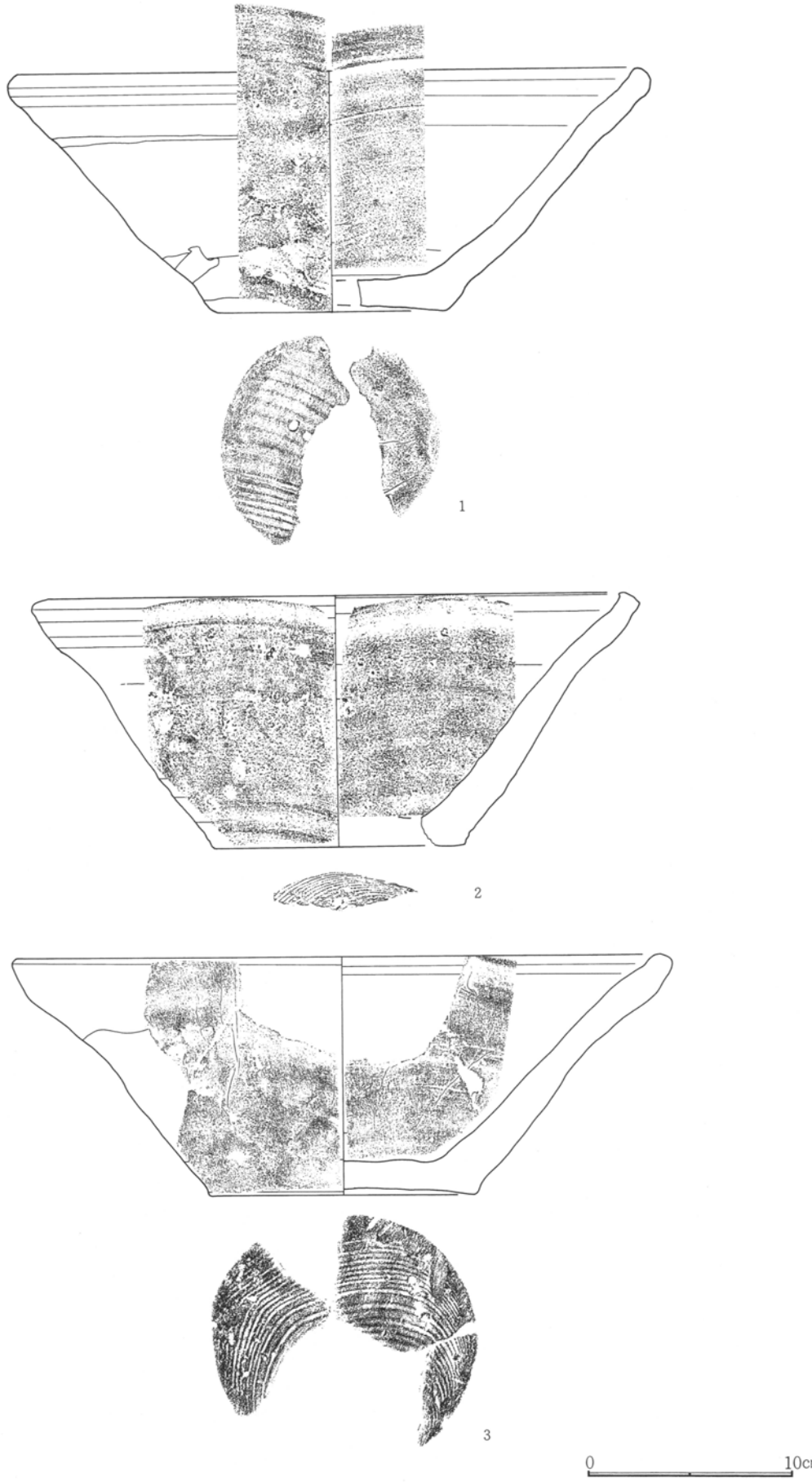
方向　N－32°－W

形状　ほぼ直線である。断面形状は逆台形を呈している。底面はほぼ平坦である。北西側に端部があり、約50度で立ち上がっている。

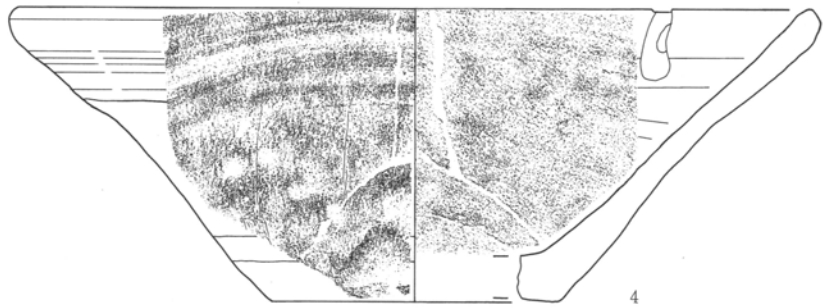
規模　調査された範囲では、長さ９ｍを計る。上幅は最大幅2.9ｍ、下幅は約１ｍ、深さは1.1～1.3ｍを計る。

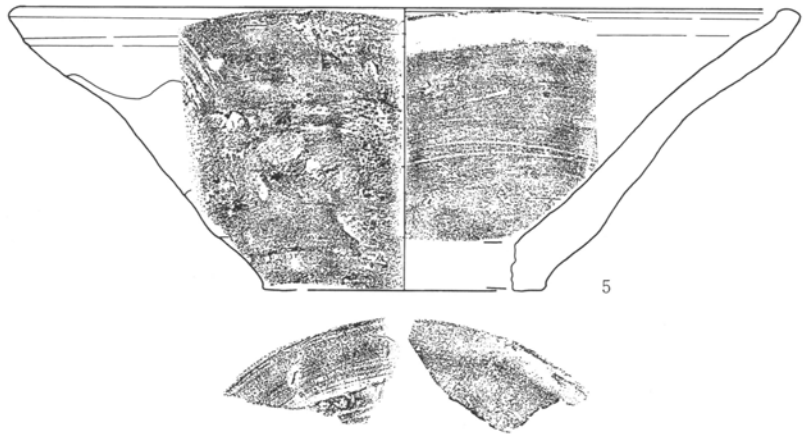
埋没土　やや粘質の褐色土を主体とし、自然埋没と思われる。流水の影響は認められない。

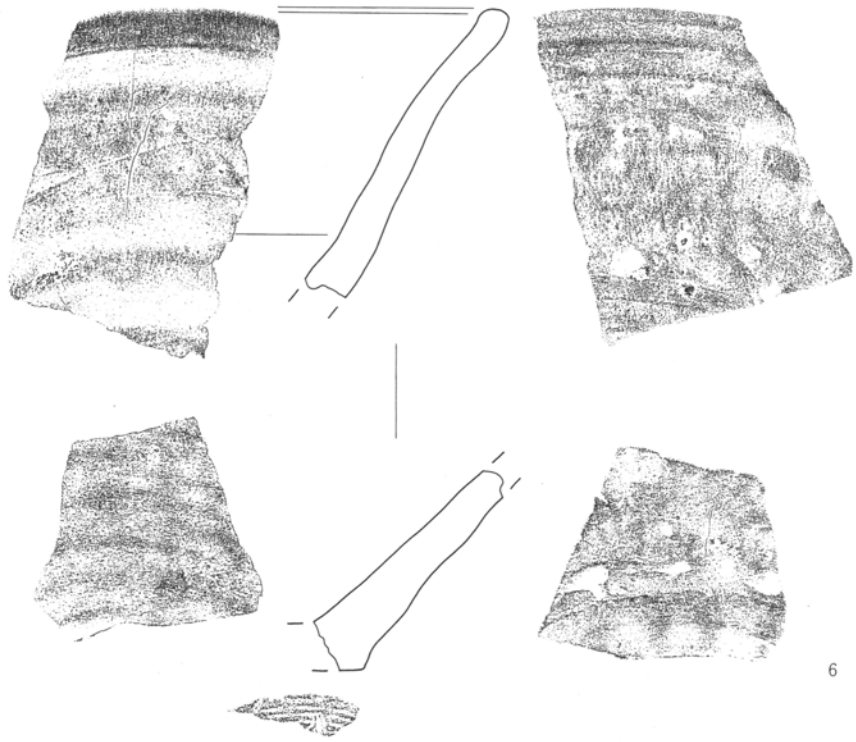
遺物　調査範囲の中央やや北西よりの地点の溝底から、軟質陶器の鉢、内耳堝の破片約５点と拳大の礫がまとまって出土している。掲載した遺物の他は流れ込みと思われる須恵器片２点が出土しているのみである。



第８図　１号溝出土遺物（１）

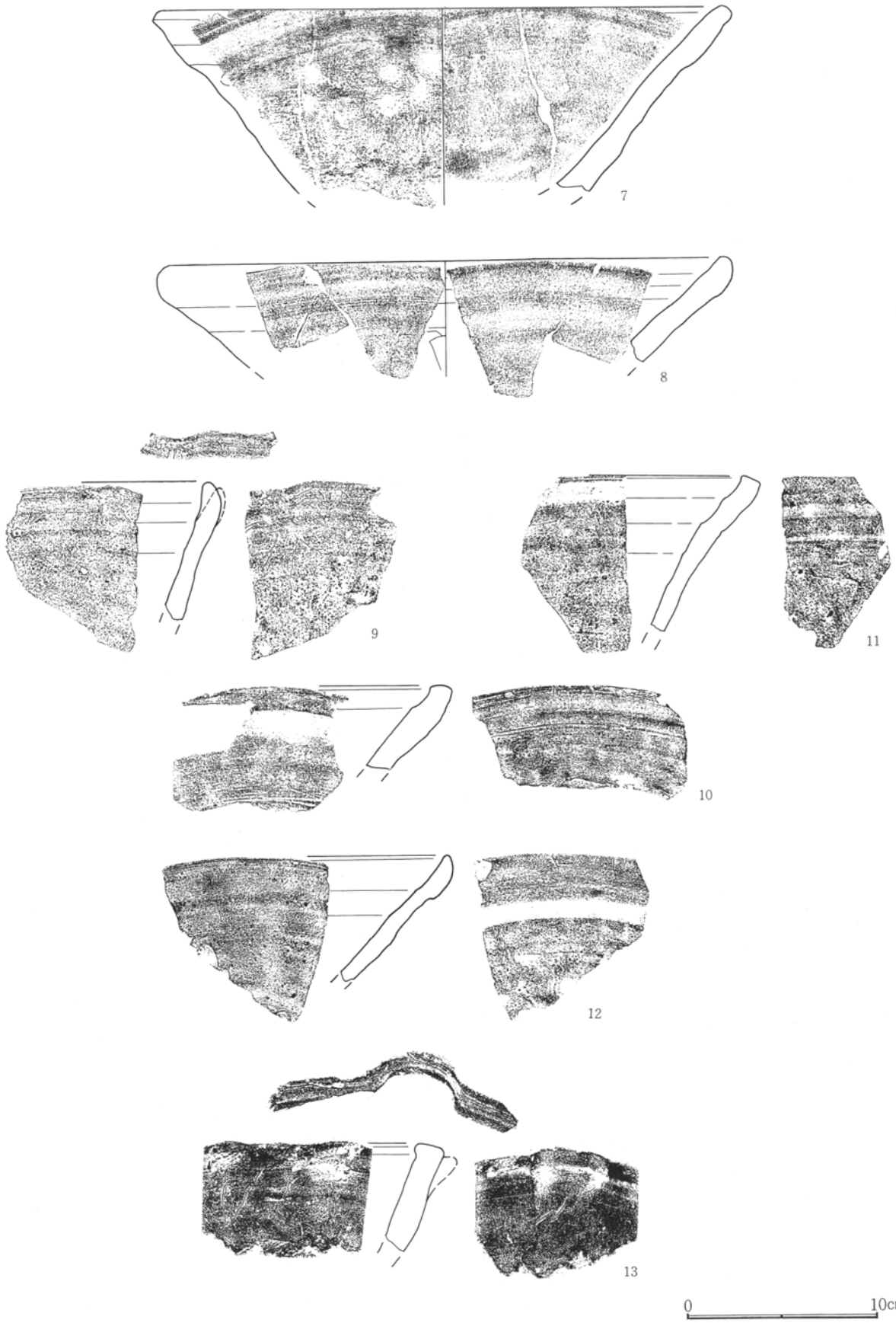




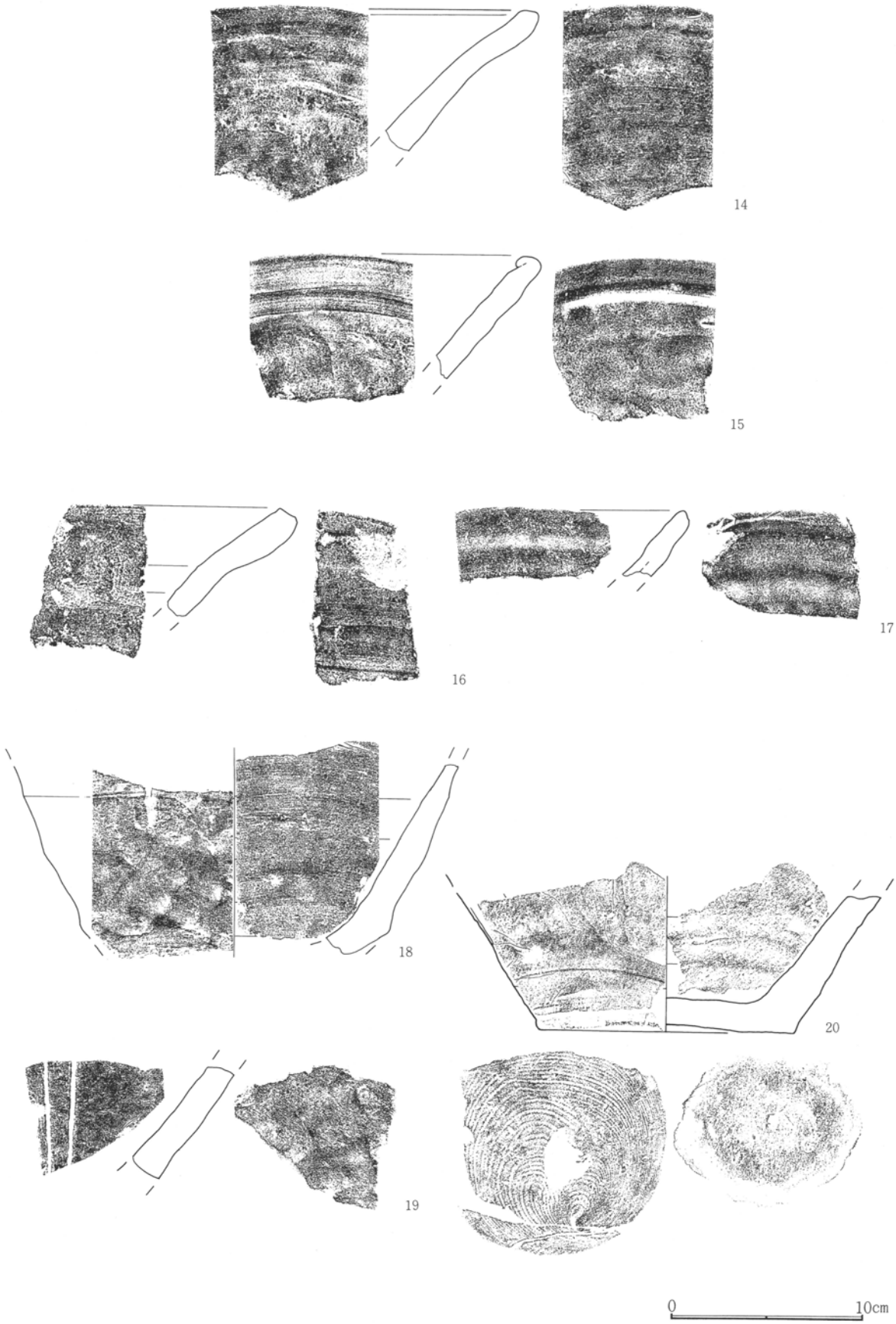


0 10cm

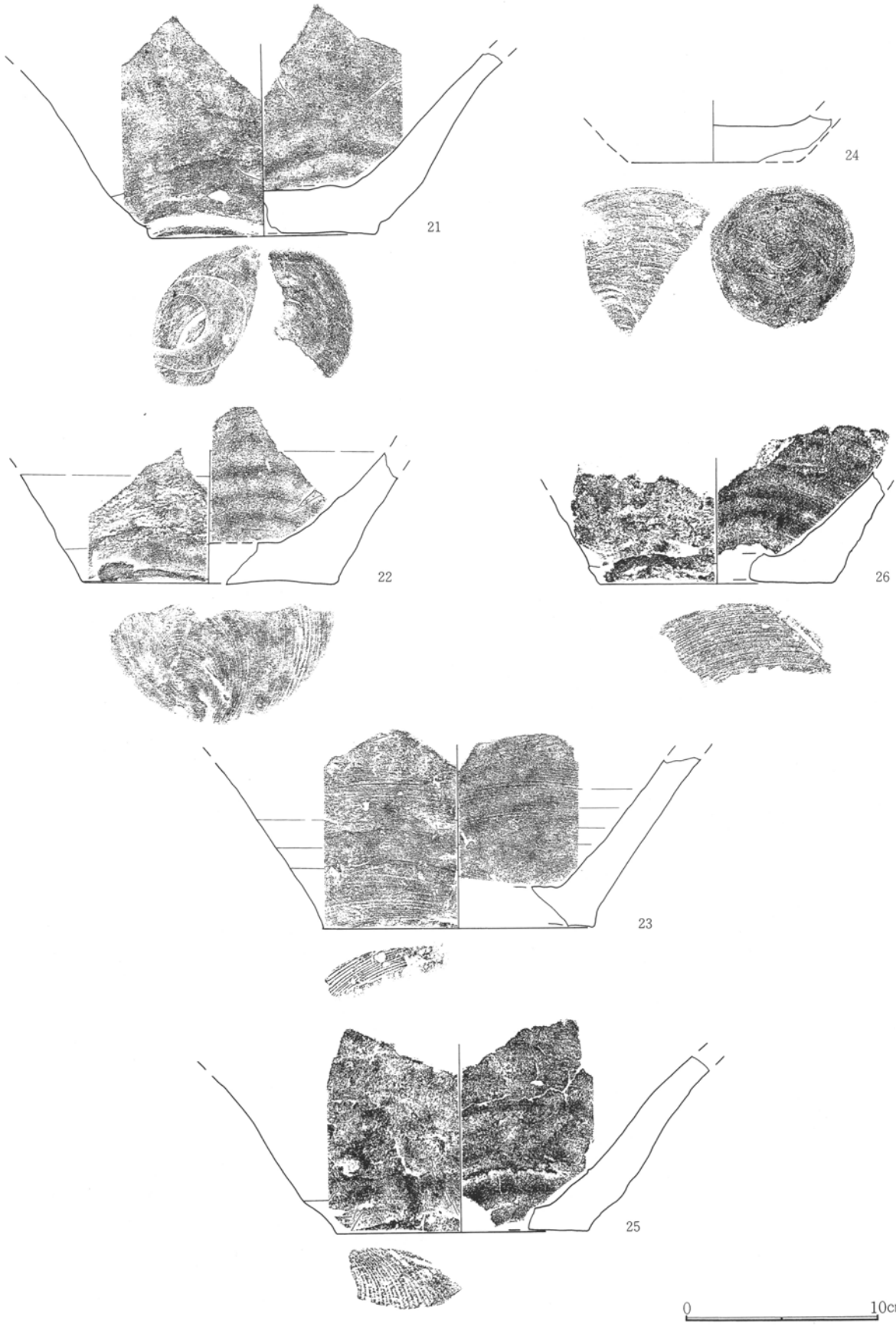
第９図　１号溝出土遺物（２）



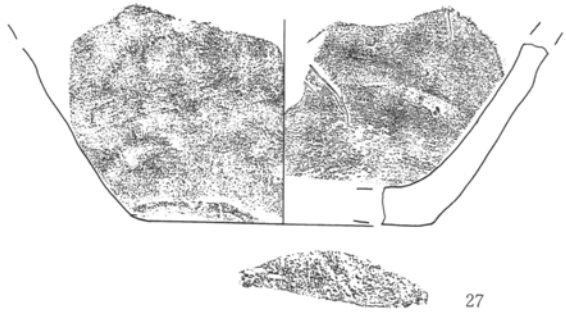
第10図　1号溝出土遺物（3）

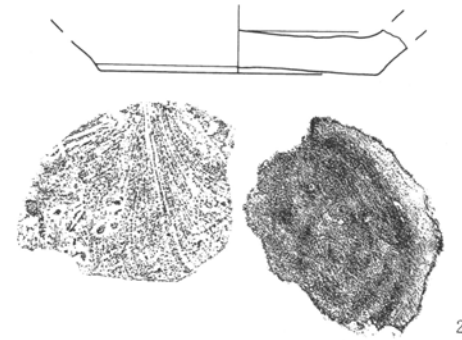


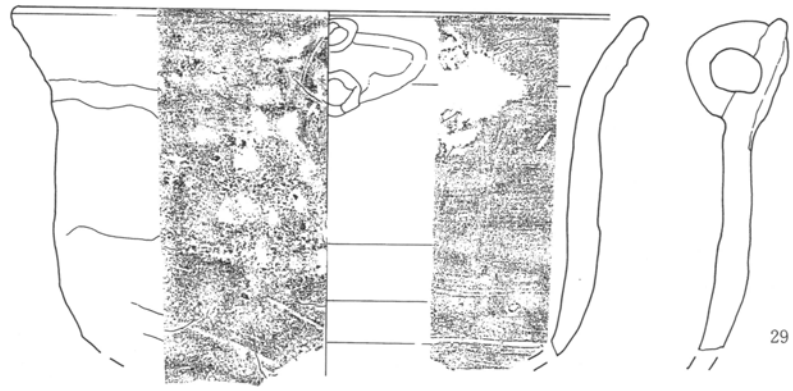
第11図　1号溝出土遺物（4）

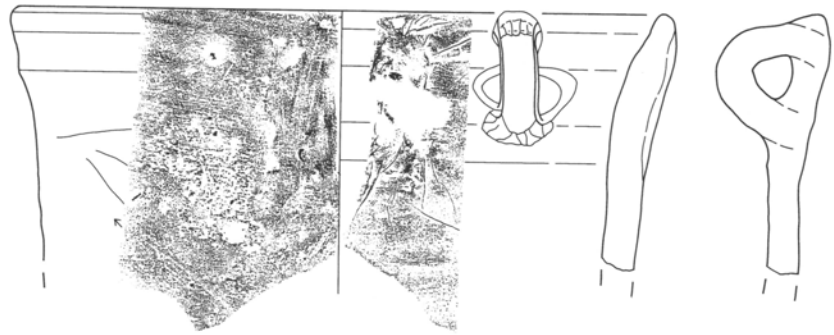


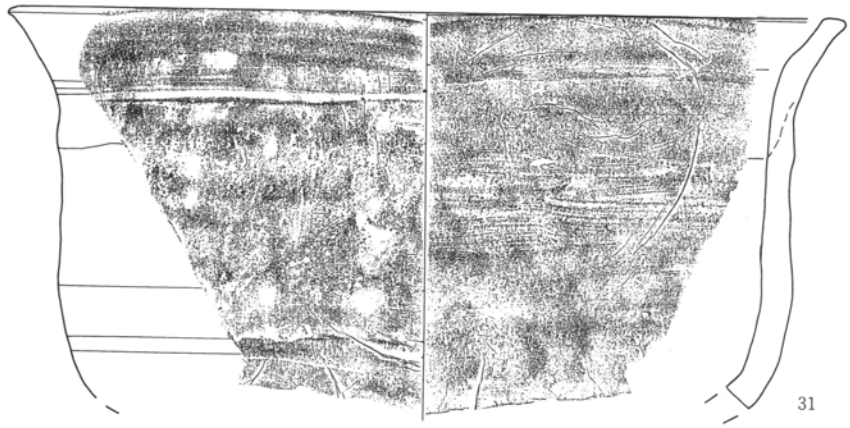
第12図　1号溝出土遺物（5）





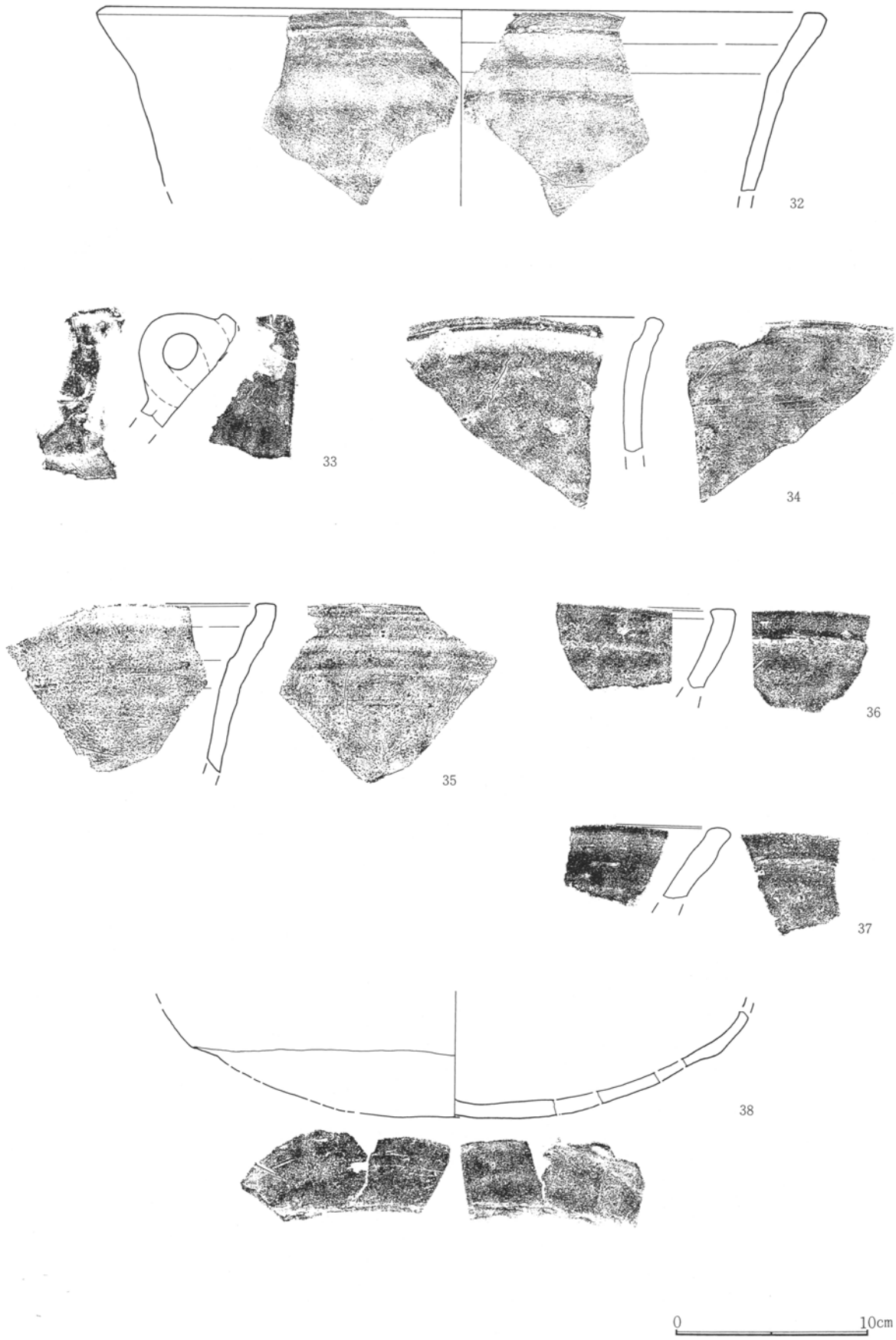






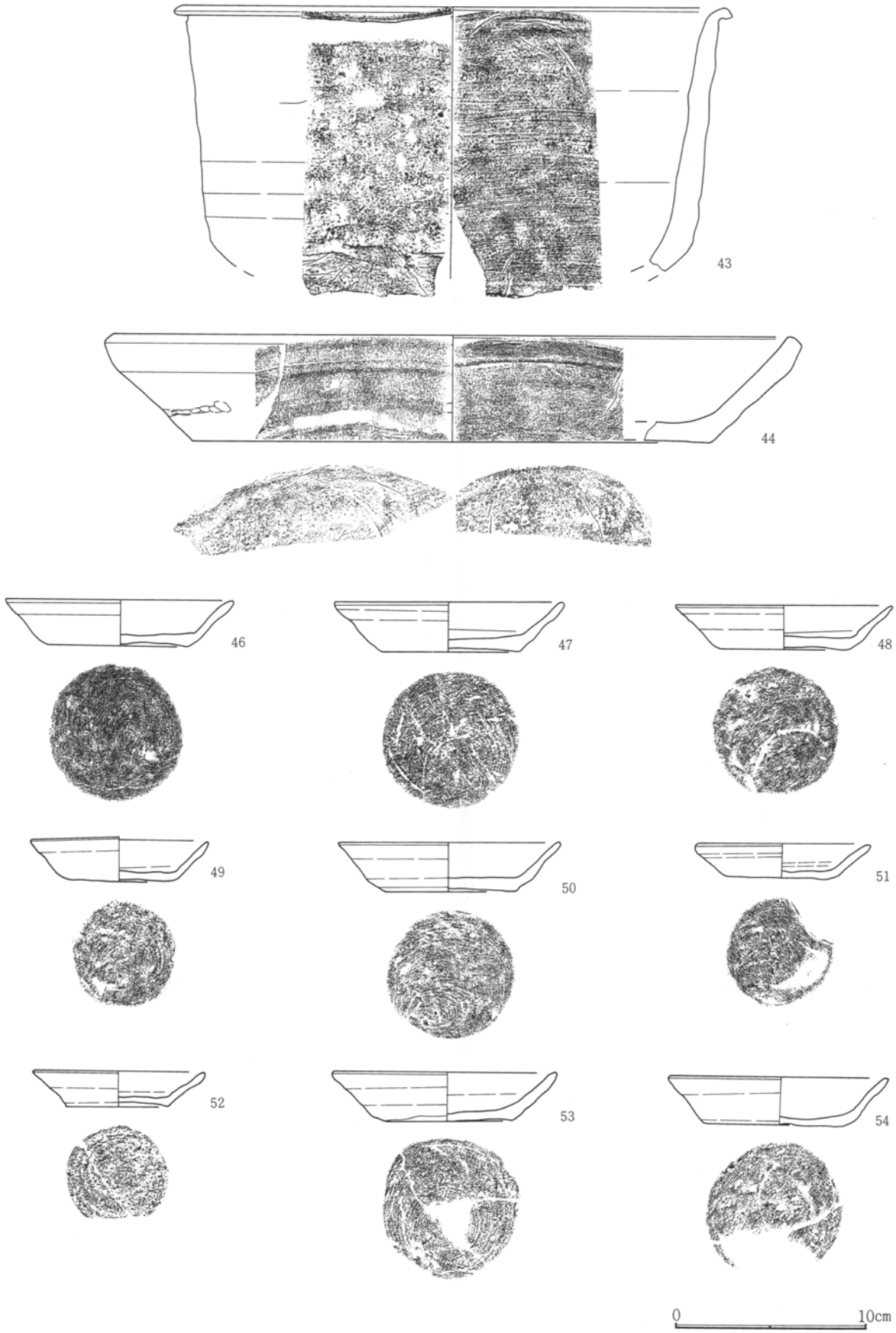
0　10cm

第13図　1号溝出土遺物（6）

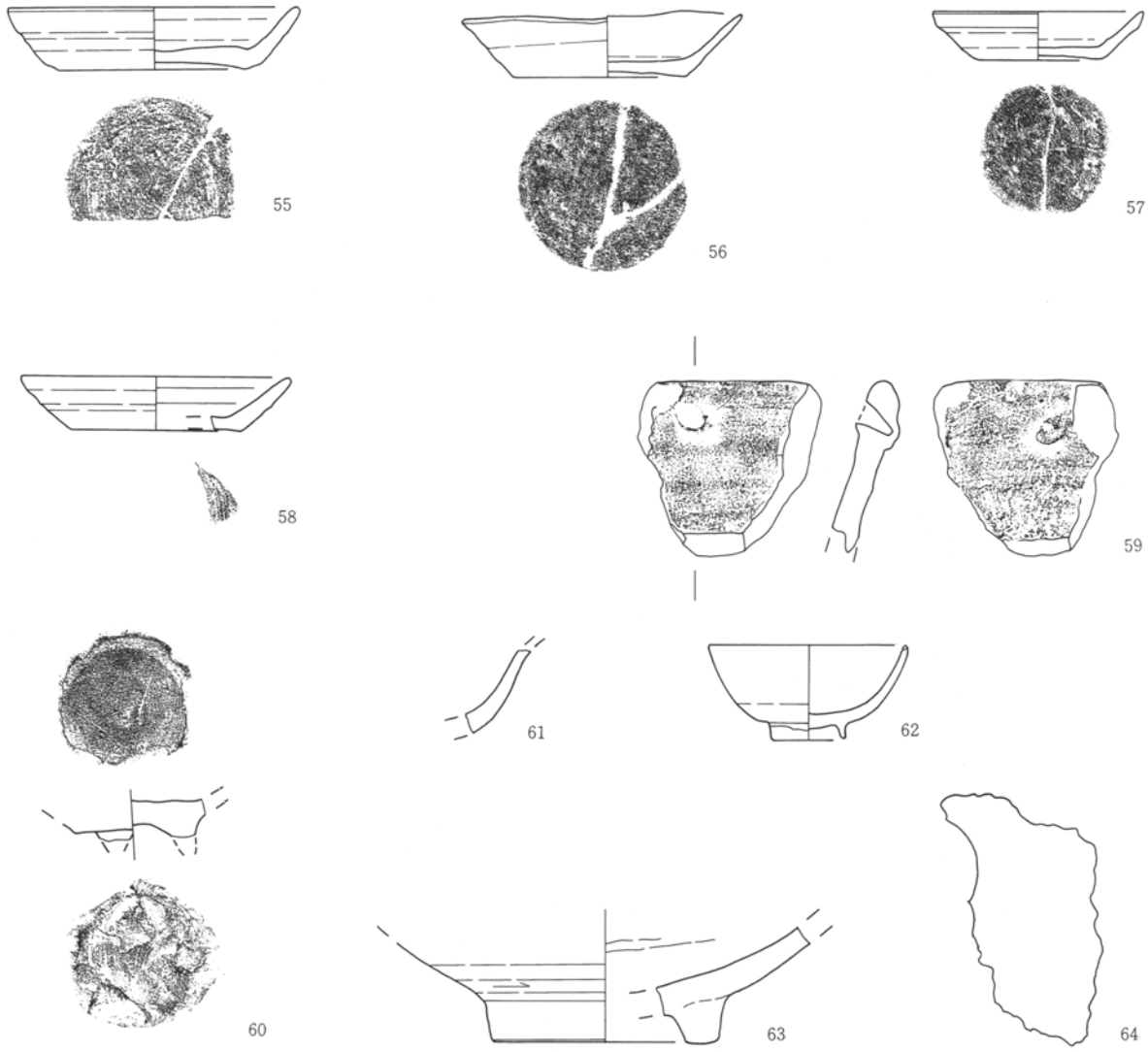


第14図　1号溝出土遺物（7）

第15図　1号溝出土遺物（8）



第16図　1号溝出土遺物（9）



第17図　1号溝出土遺物（10）

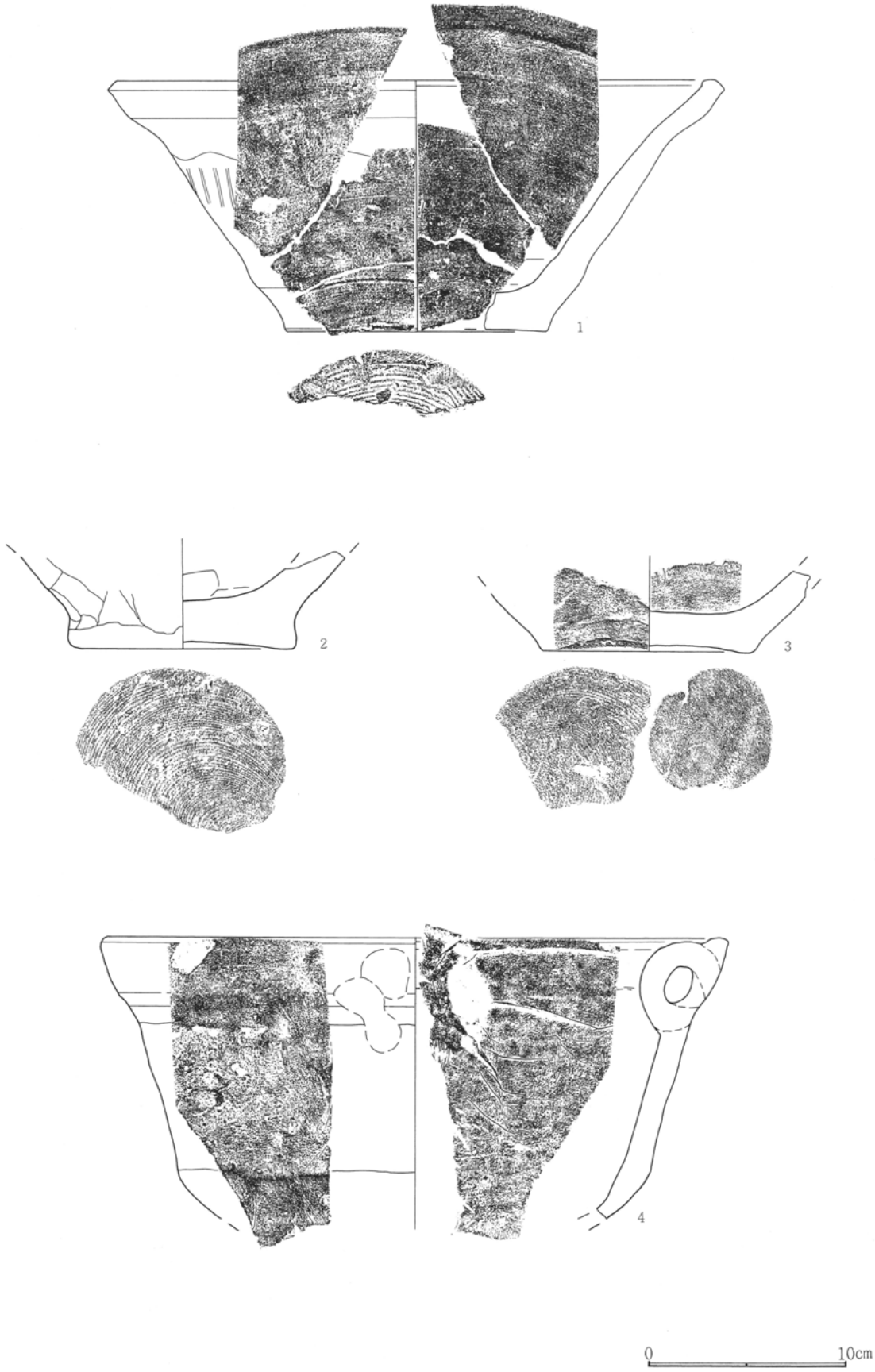
1号溝出土遺物観察表（第８～17図　ＰＬ６～９）

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
1	軟質陶器 鉢	上　層	１／５個体 口径（31.0） 底径（11.0） 器高　11.5	鉱物少。重。弱酸化。並。	底面静止糸切状。外面上方掻撫。内面横撫。底面粘土板接合。内面未使用。全体消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
2	軟質陶器 鉢	上　層	１／５個体 口径（29.3） 底径（12.0） 器高　12.1	鉱物少。重。還元。硬。	底面糸切。外面上方横撫、中位擦痕、下方掻撫。内面轆轤目と横撫。内面未使用。全体消耗少	観音山丘陵製 15Ｃ前半
3	軟質陶器 鉢	下層～中層 （４点接合）	１／５個体 口径（31.0） 底径（13.0） 器高　11.5	鉱物少。重。弱酸化。並。	底面右回転糸切。外面上方横撫、中位撫、下方撫、内面回転横撫、下方に使用摩耗あり。全体半消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前
4	軟質陶器 鉢	中　層	１／５個体 口径（31.0） 底径（11.4） 器高　11.5	鉱物少。重。還元。硬。	底面糸切。外面上方回転横撫、中位指圧痕、下方掻撫。内面斜方向掻撫。片口あり。内面近未使用。全体消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
5	軟質陶器 鉢	上　層	１／５個体 口径（31.2） 底径（11.1） 器高　11.1	鉱物少。重。弱酸化→弱燻。並。	外面上方横撫、中位擦痕、下方掻撫。内面横撫。口縁部内面に浅いかえりあり。内面未使用。全体消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
6	軟質陶器 鉢	下層～中層 （２点）	口縁～底部片 （不接合）	鉱物少。並。弱酸化→燻。並。	口縁部の内外面横撫。体部外面指圧痕。底面糸切痕。内面近未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
7	軟質陶器 鉢	中層～上層 （３点接合）	１／３個体 口径（29.0）	鉱物少。重。弱酸化～弱燻。硬。	外面口縁付近回転横撫。中位に指圧痕。内面回転撫後、下方に一方向撫。内面未使用。全体消耗微。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
8	軟質陶器 鉢	上　層	口縁部片 口径（30.0）	白色粒含む。並。還元。軟。	口縁部の内外面に横撫あり。内面の摩耗は近未使用。割れ口消耗少ない。口作りは特徴的に古様。	観音山丘陵製 14Ｃ
9	軟質陶器 鉢	上　層	口縁部片	鉱物少。並。微酸化→燻。並。	外面下方指圧痕あり。片口部あり。内・外面横撫。内面近未使用。割れ口消耗少あり。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
10	軟質陶器 鉢	中　層	口縁部片	鉱物少。やや重。弱酸化→燻。並。	内・外面横撫。口縁部内側かえりあり。端部使用摩耗。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
11	軟質陶器 鉢	中　層	口縁部片	鉱物少。やや重。弱酸化→燻。硬。	内・外面横撫。口縁部内側にかえりあり。内外面近未使用。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
12	軟質陶器 鉢	上　層	口縁部片	鉱物少。やや重。酸化→燻。硬。	外面下方指圧痕あり。表面から見て右下・左側部に割れ後の研鉢磨痕があり再利用される。内面・器面消耗あり。薄作り。	観音山丘陵製 15Ｃ 近未使用
13	軟質陶器 鉢	覆　土	口縁部片	鉱物少。重。酸化→燻。硬。	外面片口際に指圧痕。内外面片口出し前に回転横撫。内面未使用。割れ口消耗あり。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
14	軟質陶器 鉢	覆　土	口縁部片	鉱物少。重。酸化→燻。硬。	外面上方横撫、下方撫。内面横撫と轆轤目あり。内面近未使用。割れ口消耗少あり。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
15	軟質陶器 鉢	覆　土	口縁部片	鉱物少。並。弱酸化→還元燻。並。	外面上方回転横撫、下方擦痕。内面回転撫痕、未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
16	軟質陶器 鉢	覆　土	口縁部片	鉱物少。並。還元→弱酸化。並。	内外面横撫あり。内面近未使用。割れ口消耗あり。	観音山丘陵製 15Ｃ中頃
17	軟質陶器 鉢	覆　土	口縁部片	鉱物含。軽。酸化→還元強燻。並。	口縁部の内外面に横撫。轆轤目あり。内面近未使用。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15Ｃ
18	軟質陶器 鉢	上　層	体部片	鉱物少。重。還元～弱酸化。硬。	体部外面に指圧痕、上方横撫。内面乾燥ハゼと横撫。内面近未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15Ｃ前半
19	軟質陶器 鉢	覆　土	体部片	鉱物含。軽。弱酸化→弱燻。並。	外面上方指圧痕、下方横撫。内面に３＋α条の卸目、浅い摩耗あり。割れ口少消耗あり。	観音山丘陵と その付近 15Ｃ前～中

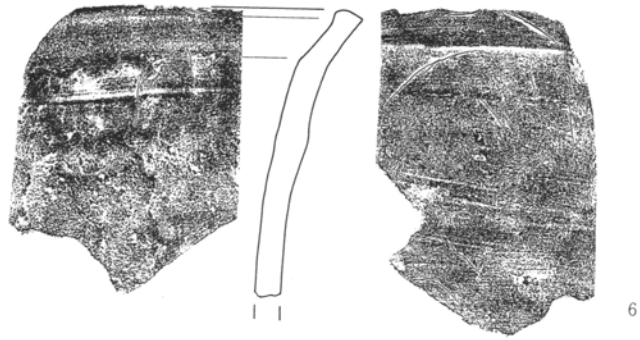
番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
20	軟質陶器 鉢	下層～中層 （3点接合）	1／5個体 底径（13.0）	鉱物少。重。弱酸化。硬。	外面上方上下の掻撫、下半回転掻撫。内面轆轤目と撫。底面左回転糸切痕。割れ口底部粘土板接合。内面近未使用。消耗少。	観音山丘陵製 15C前半
21	軟質陶器 鉢	上　層	胴下部～底部破片 底径（11.6）	鉱物含む。重。酸化～弱燻。硬。	底面轆轤右回転糸切痕。外面下部に回転の擦痕。内面下方に轆轤目、体部際に幅広の圏界状凹み。内面未使用。消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
22	軟質陶器 鉢	溝　底	胴下部～底部破片 底径（13.0）	鉱物少。重。酸化～弱燻。硬。	底面轆轤右回転糸切痕。外面下部に回転の擦痕。内面下方に轆轤目、内面未使用。消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
23	軟質陶器 鉢	中　層	胴下部～底部破片 底径（14.0）	鉱物少。重。弱酸化～弱燻。硬。	底面糸切。外面に回転擦痕。内面に轆轤目と放射状撫。内面未使用。全体消耗少ない。	観音山丘陵製 15C前半
24	軟質陶器 鉢	下　層	底部片 底径（8.8）	鉱物含。並。酸化。硬。	底面に糸切痕。内面に撫痕、未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
25	軟質陶器 鉢	覆　土	底部片 底径（13.0）	鉱物含。重。還元→弱酸化。硬。	外面上方は撫、下半は掻撫。内観面に轆轤目と横撫、乾燥ヒビ。底面糸切痕。内面近未使用。割れ口摩耗微。	音山丘陵製 15C前半
26	軟質陶器 鉢	覆　土	底部片 底径（12.0）	鉱物少。並。還元～弱燻。硬。	底面糸切痕。外面下部に回転の擦痕。内面下方に轆轤目。内面未使用。消耗微。割れ口に底面粘土板見える。	観音山丘陵製 15C前半
27	軟質陶器 鉢	覆　土	底部片 底径（11.6）	鉱物含。並。還元。並。	底面糸切痕。外面撫と指圧痕。内面撫痕、浅く使用摩耗あり。割れ口に消耗少しあり。	観音山丘陵製 15C中頃
28	軟質陶器 鉢	覆　土	底部片 底径（11.0）	鉱物含。重。弱酸化→弱燻。並。	底面に轆轤右回転糸切痕あり。内面、浅く使用摩耗あり。割れ口消耗あり。	観音山丘陵製 15Cか
29	軟質陶器 内耳堝	中　層	口縁部片 口径（25.0）	鉱物少。重。弱酸化→弱燻。硬。	割れ口に内耳出枘接着見え。外面上方横撫、中位指圧痕、下方斜方向の削。内面回転横撫。近未使用。底面丸底気味。	観音山丘陵製 15C前半
30	軟質陶器 内耳堝	中　層	口縁部片 口径（26.7）	鉱物少。重。弱酸化→弱燻。硬。	内耳出枘接着。外面上方横撫、中位擦痕、削、下方斜方向の削。内面下方弱摩耗あり。使用物。割れ口の消耗少。	観音山丘陵製 15C前半
31	軟質陶器 内耳堝	下　層	1／5個体 口径（33.4）	鉱物少。重。還元。硬。	外面口縁付近回転横撫。中位に、指圧痕、下半擦撫、下端回転削。内面中位に接合痕、全体に撫近未使用。全体消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
32	軟質陶器 内耳堝 （大型）	上　層	口縁部片 口径（37.5）	鉱物少。やや重。弱酸化→硬。	内・外面横撫。内面稜部に使用摩耗あり。割れ口消耗少あり。2片接合。	観音山丘陵製 15C前半
33	軟質陶器 内耳堝	覆　土	内耳付口縁部片	鉱物含。並。酸化→燻。並。	内耳は出枘接着らしい。割れ口少消耗あり。	観音山丘陵製 15C前半
34	軟質陶器 内耳堝	溝　底	口縁部片	鉱物少。軽。弱酸化→燻。並。	口縁の内側にかえりあり。内外面横撫。外煤気のきらいあり。内面使用摩耗あり。特に口縁下2cm付近。	観音山丘陵製 15C前半
35	軟質陶器 内耳堝	上　層	口縁部片	鉱物少。やや重。弱酸化→燻。硬。	口縁の内側にかえりあり。内外面横撫。内面・器面消耗微。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15C前半
36	軟質陶器 内耳堝	覆　土	口縁部片	鉱物含。軽。弱酸化→弱還元。並。	内外面横撫あり。内面少摩耗。割れ口消耗あり。	観音山丘陵製 15C中頃
37	軟質陶器 内耳堝	覆　土	口縁部片	鉱物含。軽。酸化→弱燻。並。	口縁部の内外面に横撫。轆轤目あり。内面摩耗あり。割れ口消耗。	観音山丘陵製 15C中頃
38	軟質陶器 内耳堝	下層～上層 （4点接合）	底部片	鉱物含。やや重。弱酸化→弱燻。並。	浅丸底気味。外面細砂付着。外面体部側吸炭。底外面酸化色。内面燻。割れ口消耗。内面摩耗あり。	観音山丘陵製 15C
39	軟質陶器 内耳堝	中　層	底部片 底径（18.0）	鉱物含。やや重。酸化→燻。硬。	底面丸底気味で細砂付着。外面立ち上がりに横撫。内面指撫、近未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15C前半

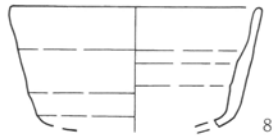
番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
40	軟質陶器 内耳堝	上　層	底部片 底径（13.0）	鉱物含。重。還元・弱燻。硬。	底面丸底気味で細砂付着。内面撫。わずか摩耗。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
41	軟質陶器 内耳堝	中　層	底部片	鉱物含。並。酸化→弱燻。並。	底面に細砂付着。丸底気味。外面撫で。内面使用摩耗少あり。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15C前半
42	軟質陶器 内耳堝 （大状型）	溝　壁	体部片	鉱物少。やや重。酸化→燻。並。	内面轆轤目、横撫。外面上方指圧痕、撫、下方幅広工具の研磨撫。底部に至る丸みあり。内面消耗微。割れ口消耗少。	観音山丘陵製 15C前半
43	軟質陶器 堝	上　層	1／6個体 口径（28.8）	鉱物少。重。弱酸化→還元→弱燻。硬。	口縁外に返す。底面丸底気味。外面上方横撫、中位指浅い圧痕、下方削りと撫。内面回転横撫。内面未使用。消耗微。	観音山丘陵製か 15C前半
44	軟質陶器 浅堝	溝底～上層 （2点接合）	1／5個体 口径（34.6） 底径（26.8） 器高　5.5	鉱物少。重。酸化～強燻。並。	外面回転撫、下方擦痕。底面離れ砂細砂付着。内面近未使用程度の使用。全体消耗少ない。	観音山丘陵製 15C前半～ 16C中頃か
45	軟質陶器 堝か	A-A'4層	底部片	鉱物含。重。還元。少し締まる。	底面際に削条痕。外面上方に撫痕。内面横撫痕。内面未使用。割れ口消耗微。	製作地不明 製作時期不明
46	土師質土器 皿	溝　底	完存 口径　11.8 底径　7.4 器高　2.4	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物やや多く含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
47	土師質土器 皿	溝　底	近完存 口径　12.0 底径　7.2 器高　2.6	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅い轆轤目の撫消。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
48	土師質土器 皿	下　層	近完存 口径　11.3 底径　6.6 器高　2.3	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅い轆轤目の撫消。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
49	土師質土器 皿	溝　底	旧欠あり。近完存 口径　9.3 底径　5.6 器高　2.3	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅い轆轤目の撫消。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
50	土師質土器 皿	下　層	旧欠あり。近完存 口径　11.6 底径　6.9 器高　2.5	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅い轆轤目の撫消。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
51	土師質土器 皿	下　層	旧欠あり。近完存 口径　9.1 底径　5.2 器高　1.9	砂含み並。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。少し重く、硬。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
52	土師質土器 皿	溝　底	旧欠あり。3／4個体 口径　9.1 底径　5.3 器高　1.8	砂含み密。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。少し重く、硬。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗あり。外面煤付着。	市外以南製 16C後
53	土師質土器 皿	下層～中層 （3点接合）	中破あり。4／5個体 口径　11.6 底径　7.0 器高　2.7	砂少なく少し密、褐色円粒、雲母粒他鉱物粒含む。少し重く、硬。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に大きな圏界状の凹み、浅い轆轤目の撫消あり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
54	土師質土器 皿	溝底～中層 （3点接合）	中破あり。4／5個体 口径　11.9 底径　7.4 器高　2.6	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
55	土師質土器 皿	下　層	旧欠あり。3／5個体 口径（11.9） 底径（7.6） 器高　2.5	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面糸切。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅い轆轤目を一方向から指撫。器面消耗あり。	市外以南製 16C後

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
56	土師質土器 皿	下　層	旧欠あり。3／4個体 口径　11.4 底径　6.6 器高　2.6	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面轆轤左回転糸切痕。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
57	土師質土器 皿	下　層	旧欠あり。2／3個体 口径（8.6） 底径（5.0） 器高　2.0	砂含み粗。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。軽。軟。	底面糸切。方向消耗不明瞭。内面は体部と底面との間に圏界状の凹み。底中央に浅く不明瞭な轆轤目あり。器面消耗大。	市外以南製 16C後
58	土師質土器 皿	溝底～下層 （2点接合）	旧欠破片 口径（12.0） 底径（7.0） 器高　2.2	砂含み並。褐色円粒、雲母粒他鉱物含む。少し重く、硬。	底面糸切痕。内面の体部際に圏界状の凹みあり。器面消耗あり。	市外以南製 16C後
59	軟質陶器 火鉢	上　層	口縁部片	鉱物少。やや重。弱酸化。硬。	内・外面横撫。内面側から未完通の持手元あり。内外面近未使用。割れ口消耗少。火鉢としては薄作り。	観音山丘陵製 15C
60	土師質土器 香炉	覆　土	底部片	鉱物含。軽。還元。並。	底面糸切後、三ツ足付着。内面端に浅い円形凹みあり。全体に消耗、足端部も消耗。	市附近 15・16C
61	磁器 皿	溝　底	体部片	磁胎淡灰色。釉オリーブ	内・外面厚く施釉。色調は暗く、下手。器面擦痕微。	龍泉窯系 14C
62	陶器 碗か	覆　土	口縁～底部破片 口径（8.0） 底径　3.0 器高　3.8	鉱物微。陶器としては軽。酸化。締。	内面に飴釉～黒褐釉の施文一条あり。高台端部と同内面を除き、淡い酸化土の化粧あり。高台貼付。唐津写し。	九州地方窯か。 18～19C
63	磁器 小碗 白磁	A-A'4層	胴下部～底部破片 底径（9.0）	鉱物見えず。重。還元→弱酸化。締。	高台端部は無釉で鉄足状に酸化。白磁釉は少し暗い灰色。釉表面は鈍光沢のため18世紀か。	肥前系 18～19C前
64	壁体か	覆　土		スサ多く、他鉱物微。極軽。酸化。	シルトより細かい粘土で、一方向気味に短めのスサが入る。一部の面に隅丸方形柱状の圧痕あり。	



第18図　２号溝出土遺物（１）



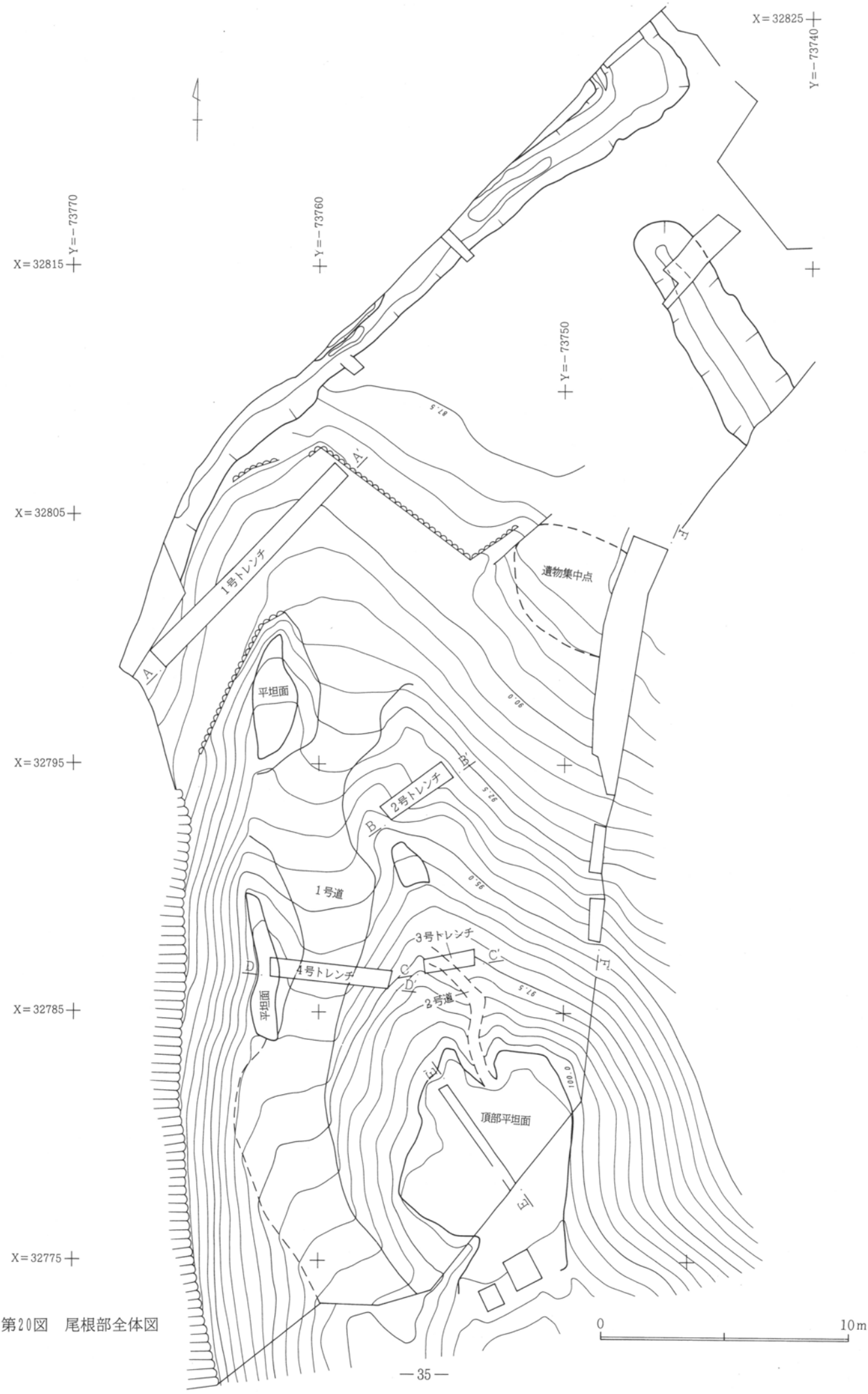


0 10cm

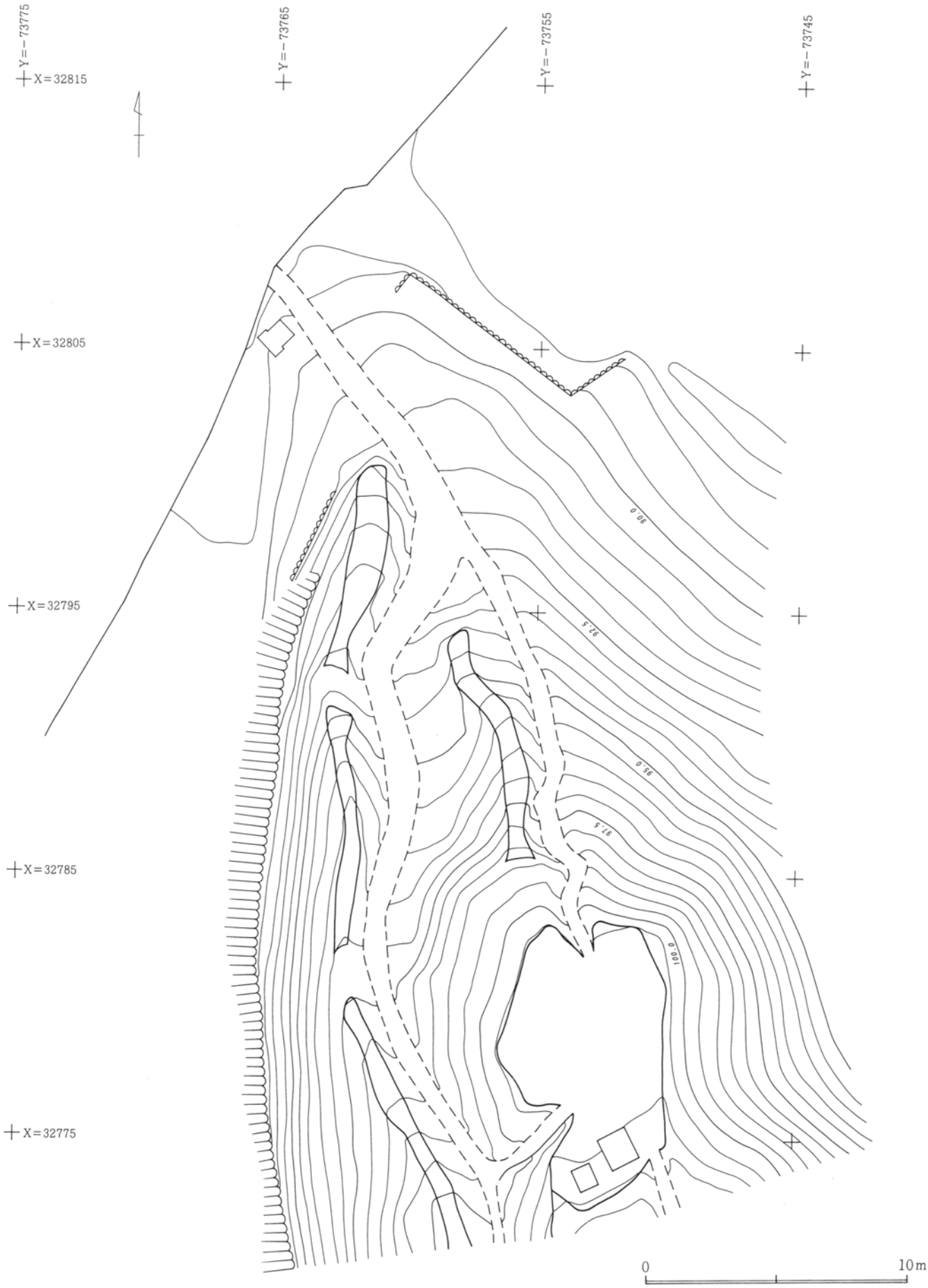
第19図　２号溝出土遺物（２）

2号溝出土土器観察表（第18、19図　ＰＬ10）

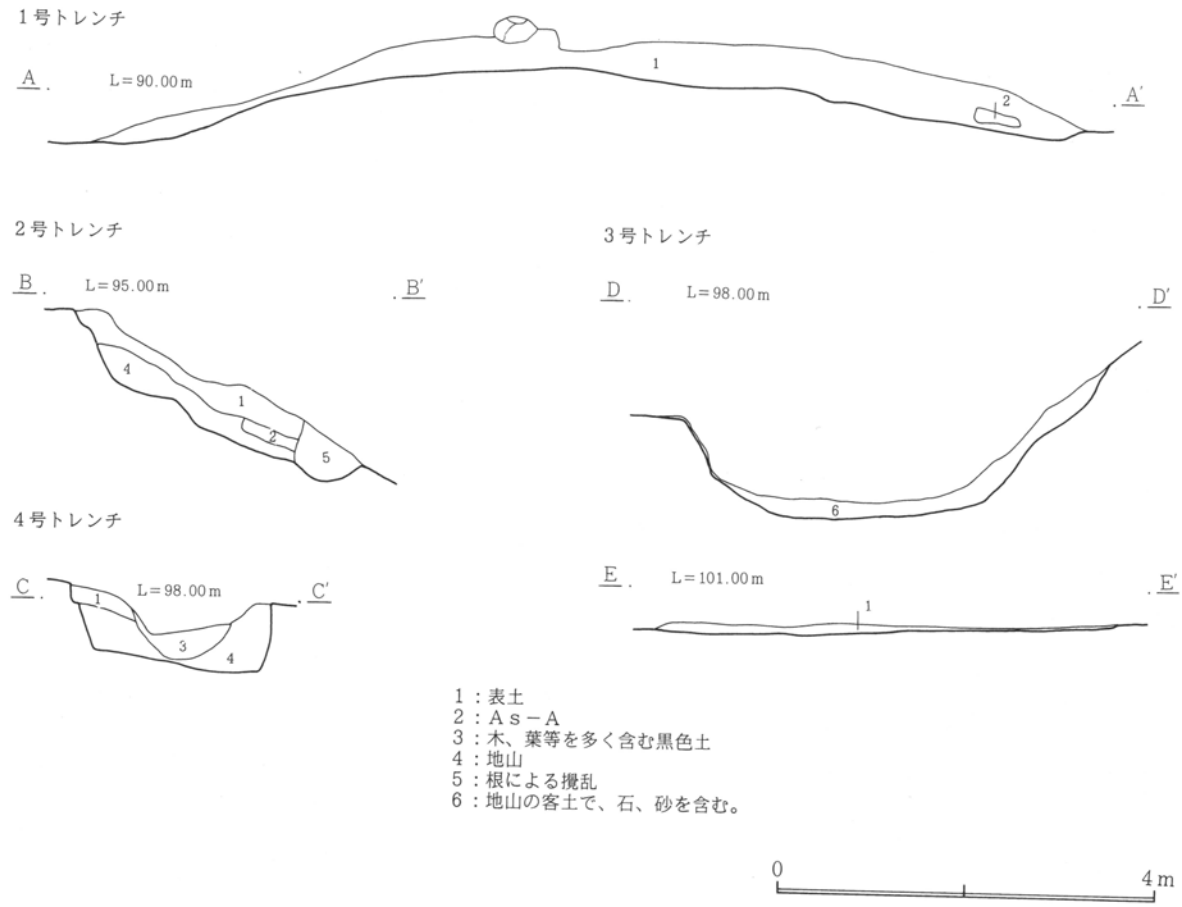
番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
1	軟質陶器 鉢	溝底	1／3個体 口径（30.0） 底径（13.0） 器高　12.5	鉱物少。重。弱酸化～弱燻。並。	底面糸切。外面口縁付近回転横撫、下方回転掻撫、中位に工具痕。内面轆轤目。内面近未使用の擦れ。全体消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
2	軟質陶器 鉢	覆土	胴下部～底部破片 底径（11.0）	白色粒、褐色粒含み全体少。重。酸化・部分燻、軟。	底面轆轤左回転糸切。内面に一方向指撫。外面下部に回転の掻撫あり。割れ口に底面と体部の接合面あり。	観音山丘陵製 15C前
3	軟質陶器 鉢	溝底	底部片 底径（10.6）	砂含み並。黒褐色粒他鉱物含む。やや重。酸化、軟。	底面轆轤左回転糸切痕。外面部指の回転掻撫あり。割れ口に底面と体部の接合面あり。内面近未使用。器面	下市附近 15C前
4	軟質陶器 内耳堝	溝底	口縁部片 口径（30.2）	鉱物含。並。酸化→燻。並。	口縁部外面横撫あり。外面中位指圧痕と撫、下方削後撫。内面回転撫と摩耗。内耳は出？接着か。割れ口消耗。	観音山丘陵と その付近 15C前
5	軟質陶器 内耳堝	溝底	1／6個体 口径（30.0）	鉱物少。重。弱酸化→還元燻。硬。	底面丸底気味。外面上方横撫、中位弱く浅い幅広のおおまか研磨、下方篦削。内面撫、未使用。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
6	軟質陶器 内耳堝 （大型）	溝底	口縁～体部片	鉱物少。重。弱酸化→還元。硬。	口縁部の内外面横撫。口縁部内側にかえりあり。下方陵部に使用摩耗あり。割れ口消耗微。	観音山丘陵製 15C前半
7	軟質陶器 盤	覆土	口縁部片 口径（31.4）	鉱物含。重。弱酸化→弱燻。並。	口縁内外面横撫。外面下方手持篦削。器面消耗あり。割れ口消耗あり。	観音山丘陵製 15～16C
8	陶器 向付	覆土	口縁～体部 口径（10.0）	鉱物見えず。磁胎。内・外鉄釉。焼締。	内外面轆轤目。鉄釉は柿釉調～黒釉。割れ口シャープ。	国産 18Cか

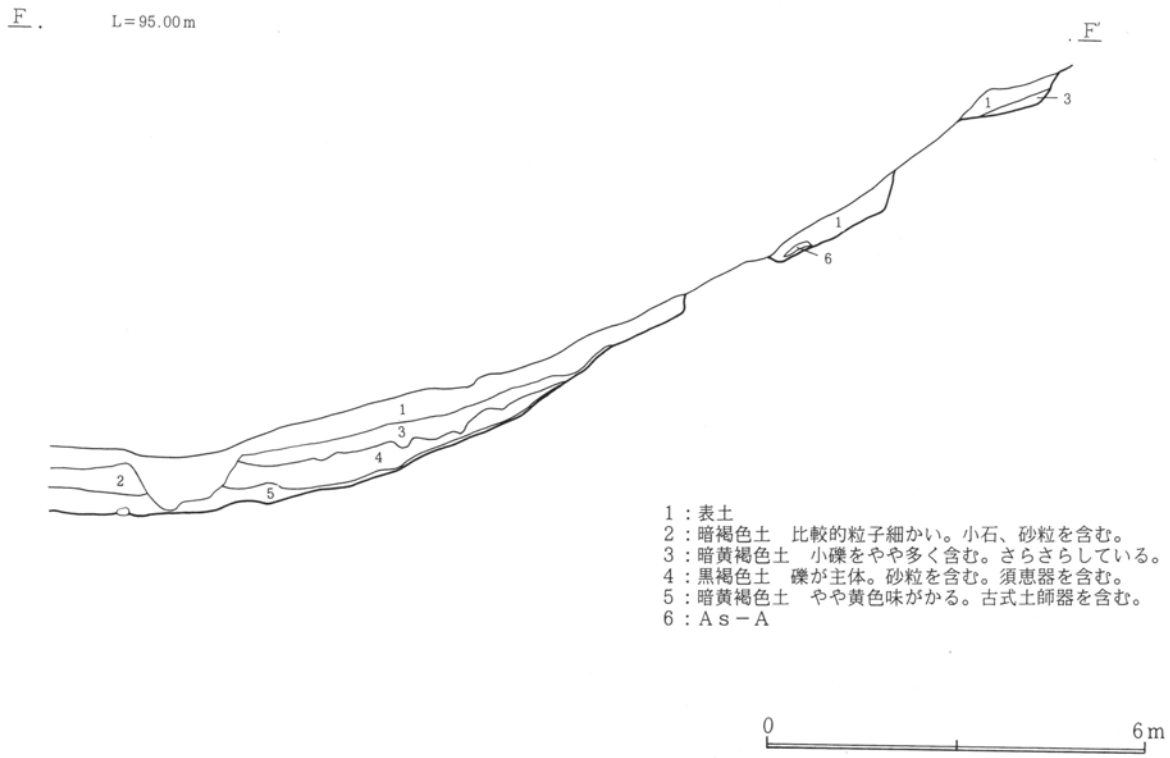

X=32825
Y=−73740
Y=−73770
Y=−73760
Y=−73750
X=32815
X=32805
X=32795
X=32785
X=32775
1号トレンチ
2号トレンチ
3号トレンチ
4号トレンチ
遺物集中点
平坦面
平坦面
1号道
2号道
頂部平坦面
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
87.5
90.0
92.5
95.0
97.5
100.0
0
10m

第20図　尾根部全体図



第21図　調査前の尾根部地形実測図





第22図　尾根部トレンチ土層断面図

第３節　尾根部の調査

１　１号道

位置　尾根の北端から頂部へ向かって延びている。地形に沿って緩やかに蛇行する。

規模　断面観察部での上幅は約4.5ｍ、下幅は約2.4ｍを計る。

考察　断面観察の結果、下面ではＡｓ－Ａの堆積が確認できなかった。従って、Ａｓ－Ａ降下以降に開削されたものと思われる。

２　２号道

位置　尾根頂部の平坦面から下に向かって約６ｍ確認できた。かなり急な斜面に造られている。

規模　断面観察部で下幅約80㎝を計る。

考察　１号道と同様、下面ではＡｓ－Ａの堆積は確認できなかった。１号道と２号道に挟まれた尾根上ではＡｓ－Ａの堆積は確認されている。

３　平坦面

１号道の西側で２カ所、東側で１カ所の平坦面が検出されている。柱穴等の施設の痕跡は検出できなかった。

４　頂部平坦面

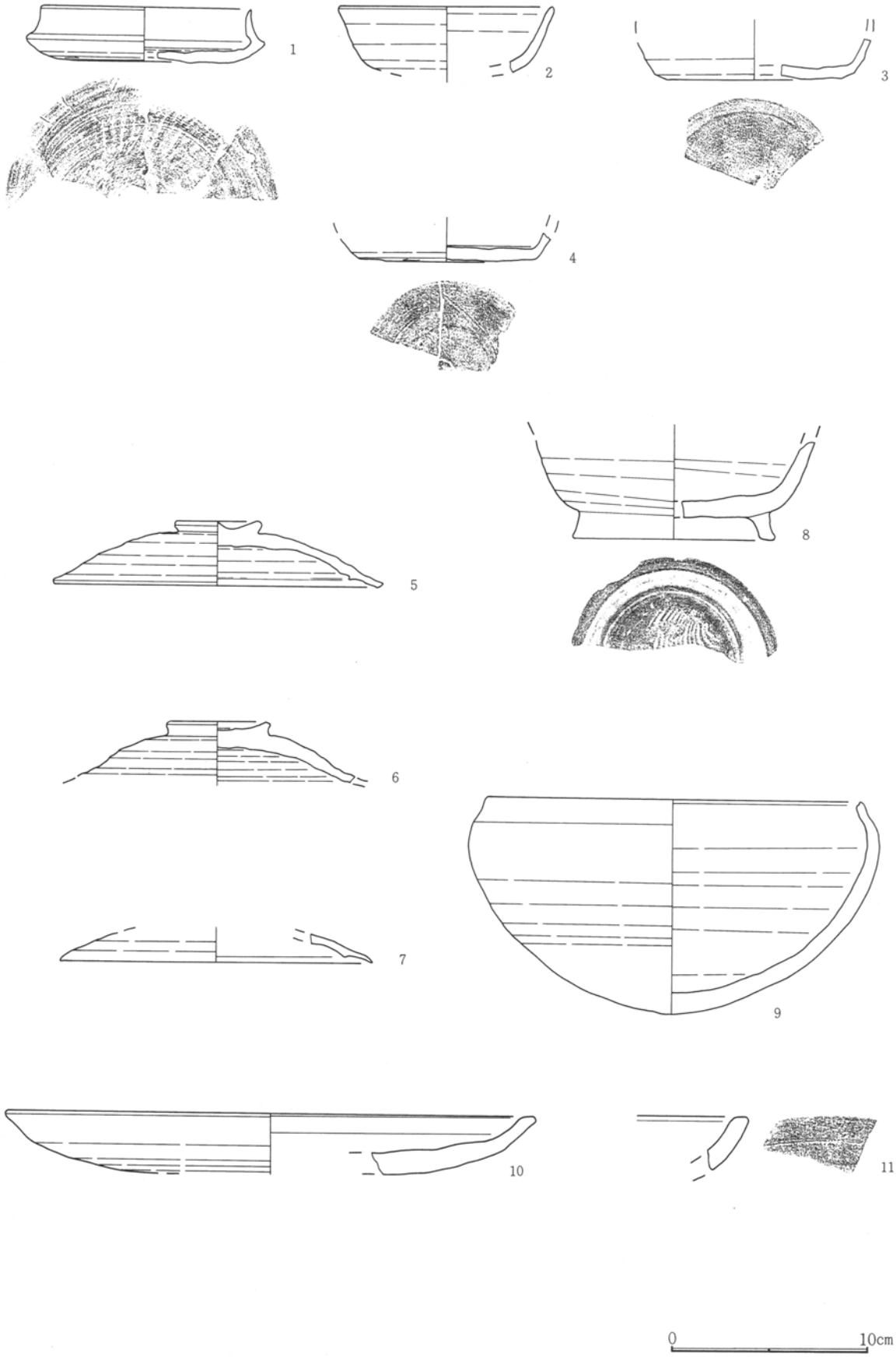
調査区の南端に平坦面が存在していたため、遺構確認を行い、断面観察を行ったが遺構は検出できなかった。この平坦面には２基の堂宇がたっていたが、工事に伴い調査区外へ移設されている。この堂宇の中には鎌倉時代のものと思われる板碑が納められている。

５　遺物集中点

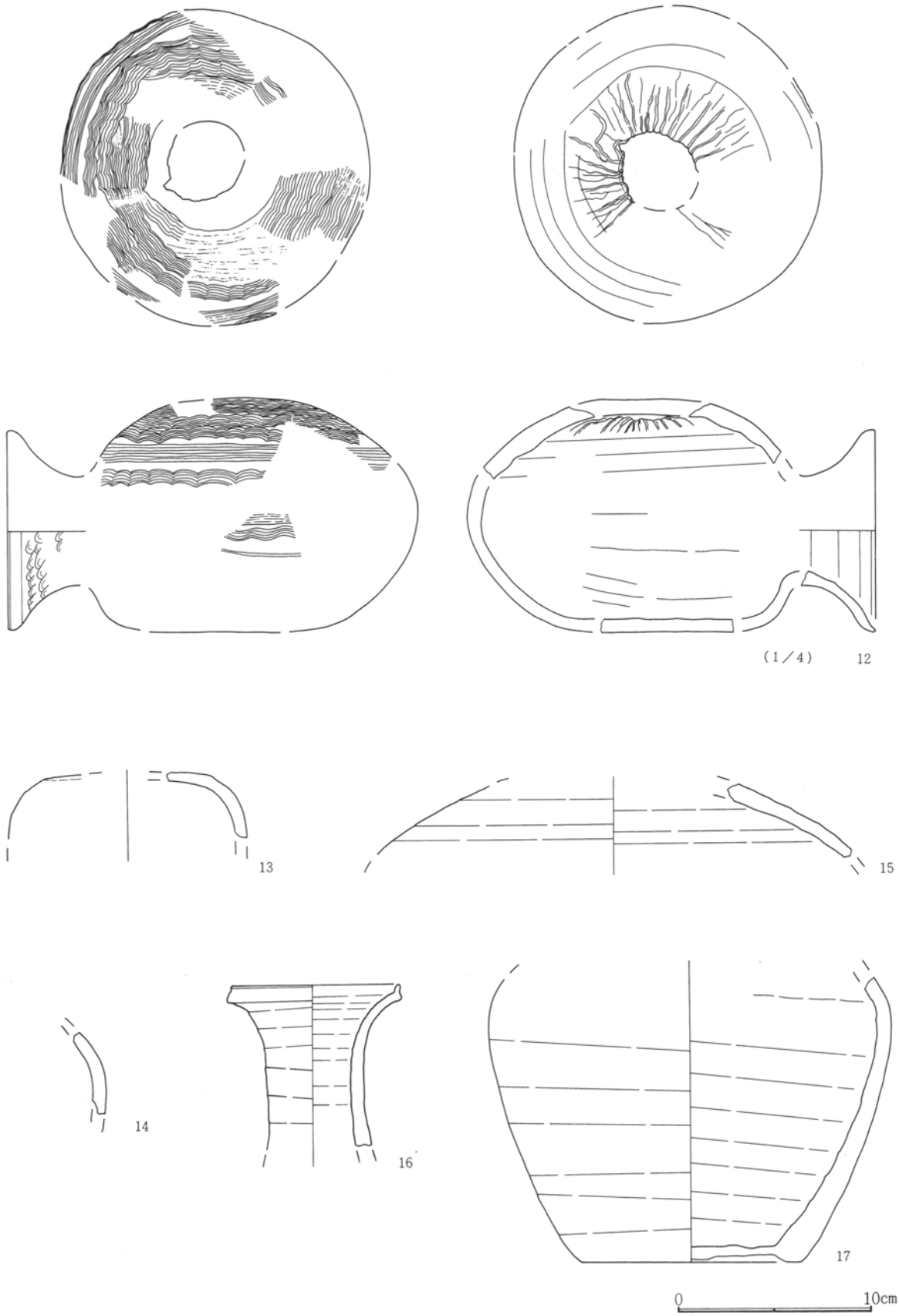
尾根から平坦面への変換点で調査区東壁に近い地点で土器の集中が確認された。変換点ではあるが、斜面からの出土が多く、平坦面へはあまりのびていない。上下２面の出土が確認されている。上面からは７世紀代と思われる須恵器が中心に出土しており、図示した遺物の他に240片の須恵器片が出土している。下面からは古墳時代初頭の古式土師器を中心としての出土が確認できた。遺物の中には畿内地域の土器である布留式土器が含まれており、図示した遺物の他に2272片の遺物が出土している。上面の須恵器は土層断面図の４層中から、古式土師器は同じく５層中から出土している。遺構の検出につとめたが、検出には至らなかった。時間的な制約が多く、遺物を取り上げることが精一杯の調査になってしまった。

６　石垣

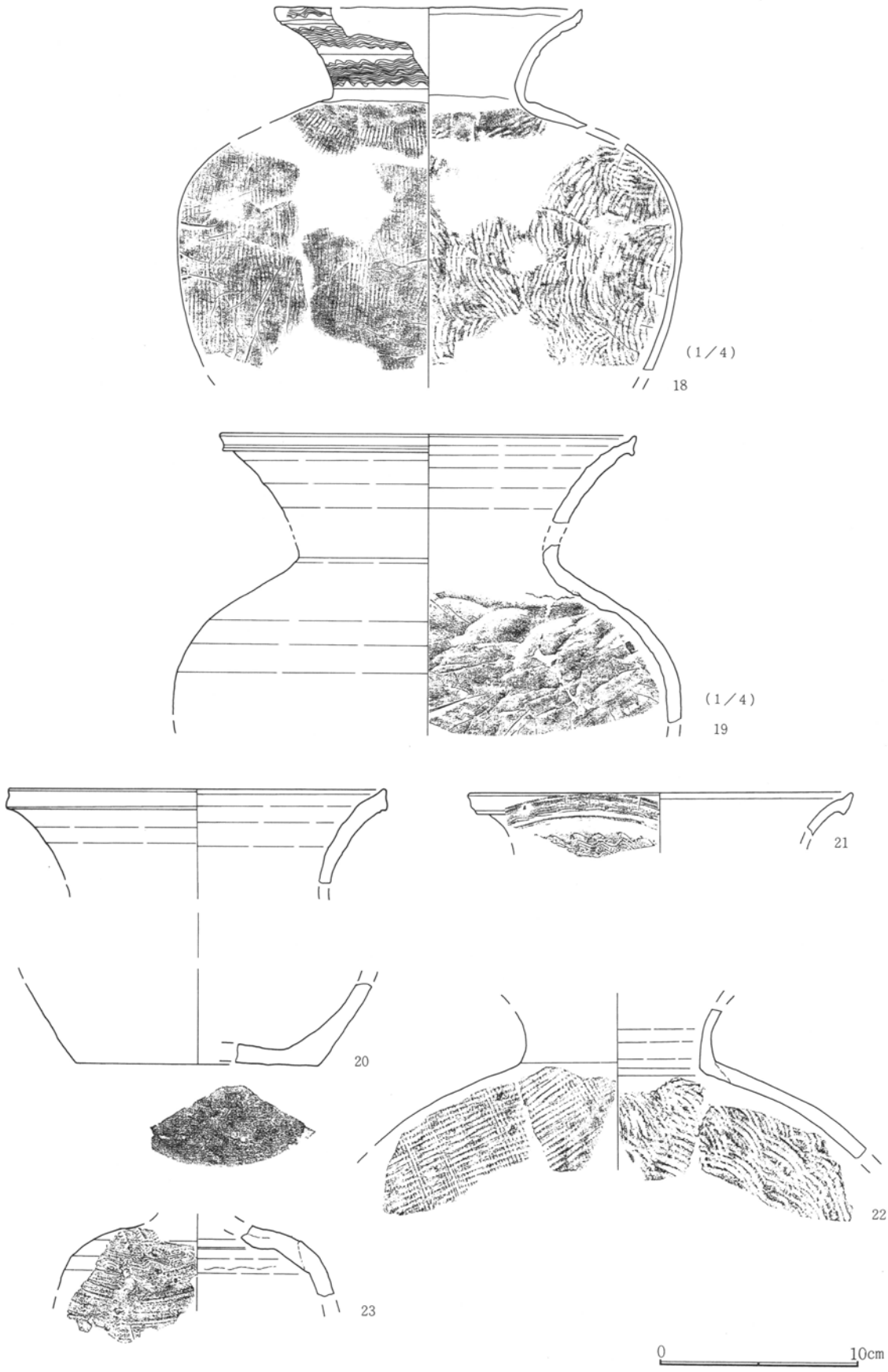
この尾根の北端、および北西側斜面で石垣が検出されている。いずれも近世以降の所産と思われる。中でも北端の石垣では煉瓦が用いられていた。



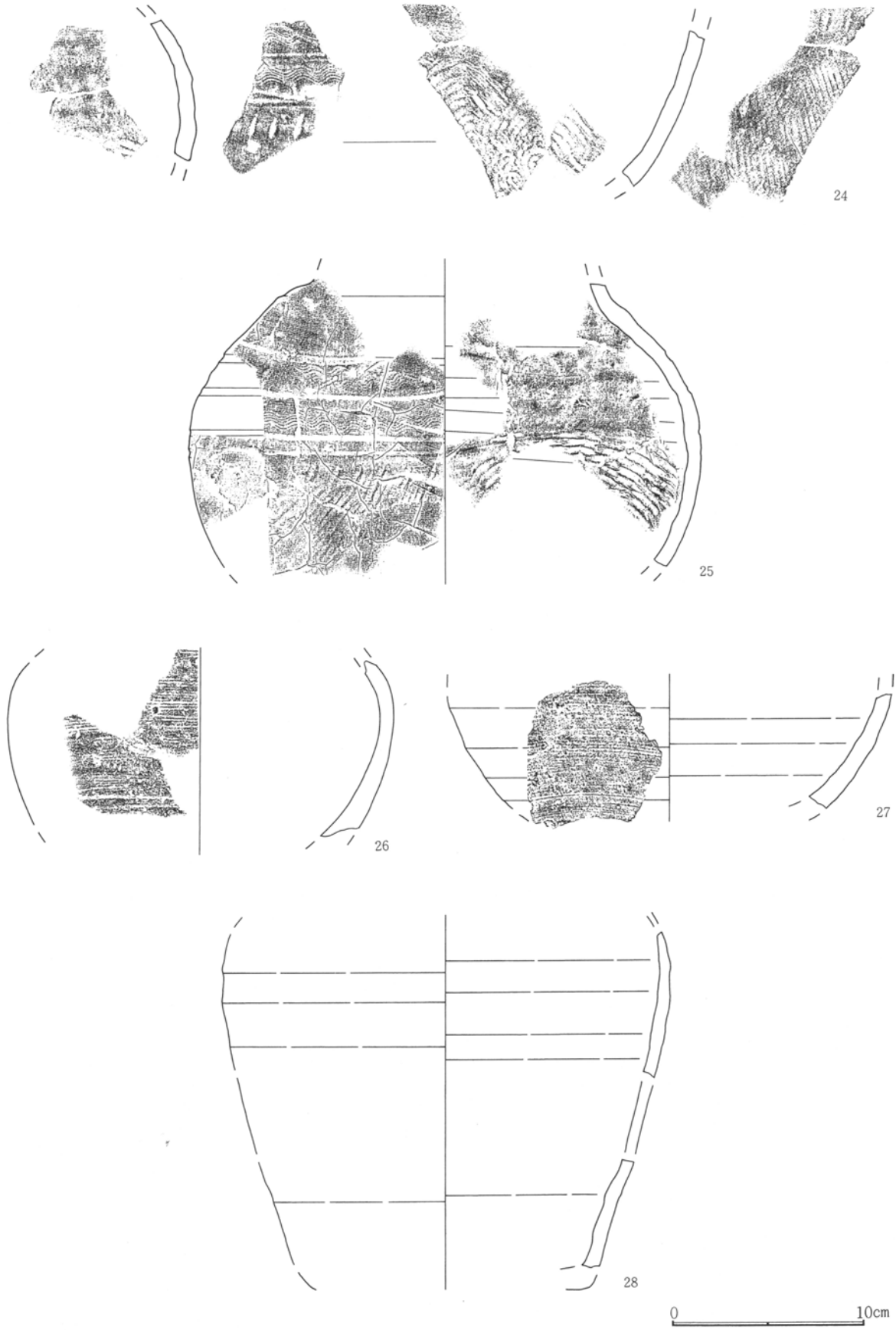
第23図　遺物集中点上面出土遺物（1）



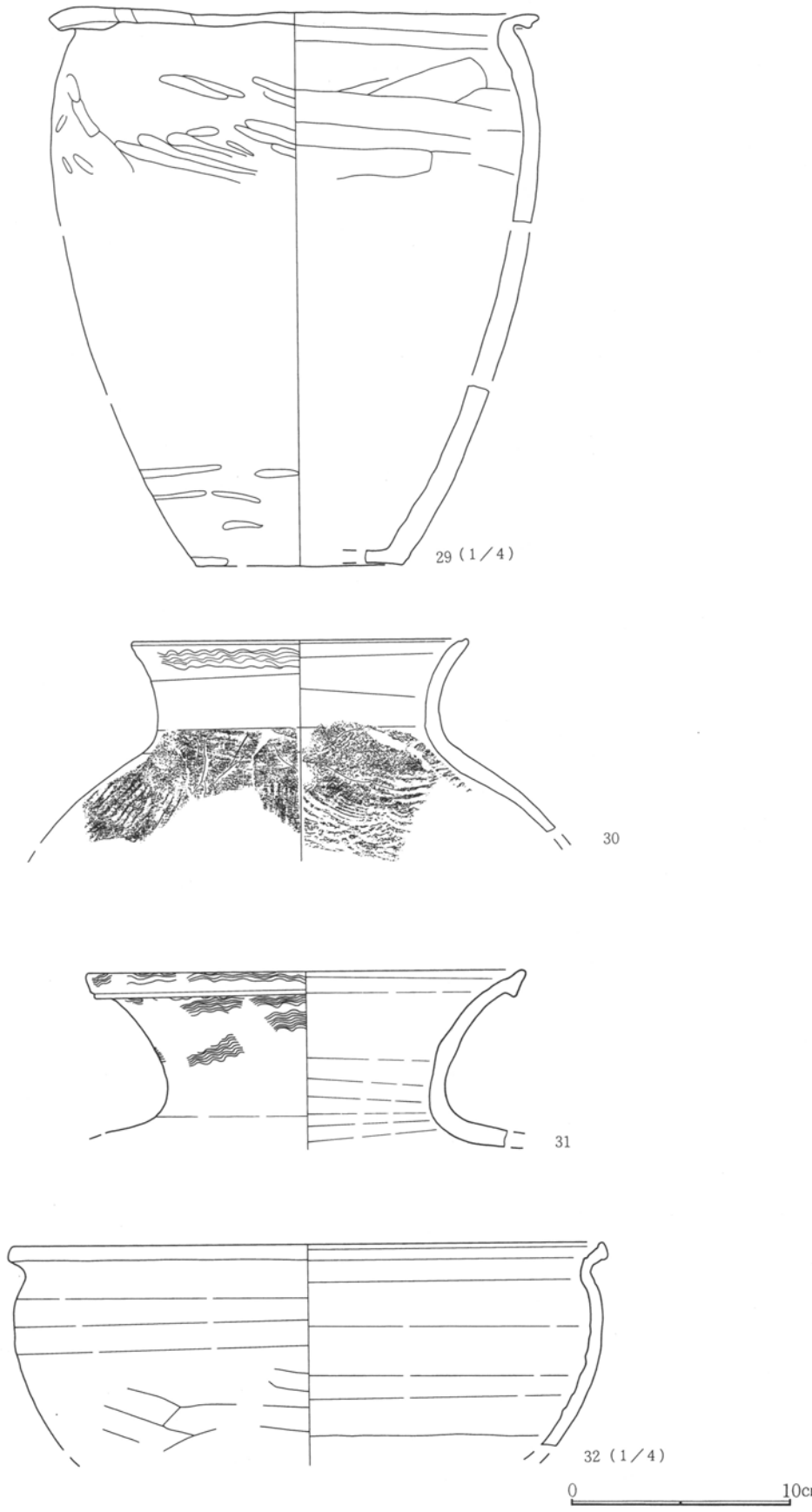
第24図　遺物集中点上面出土遺物（2）



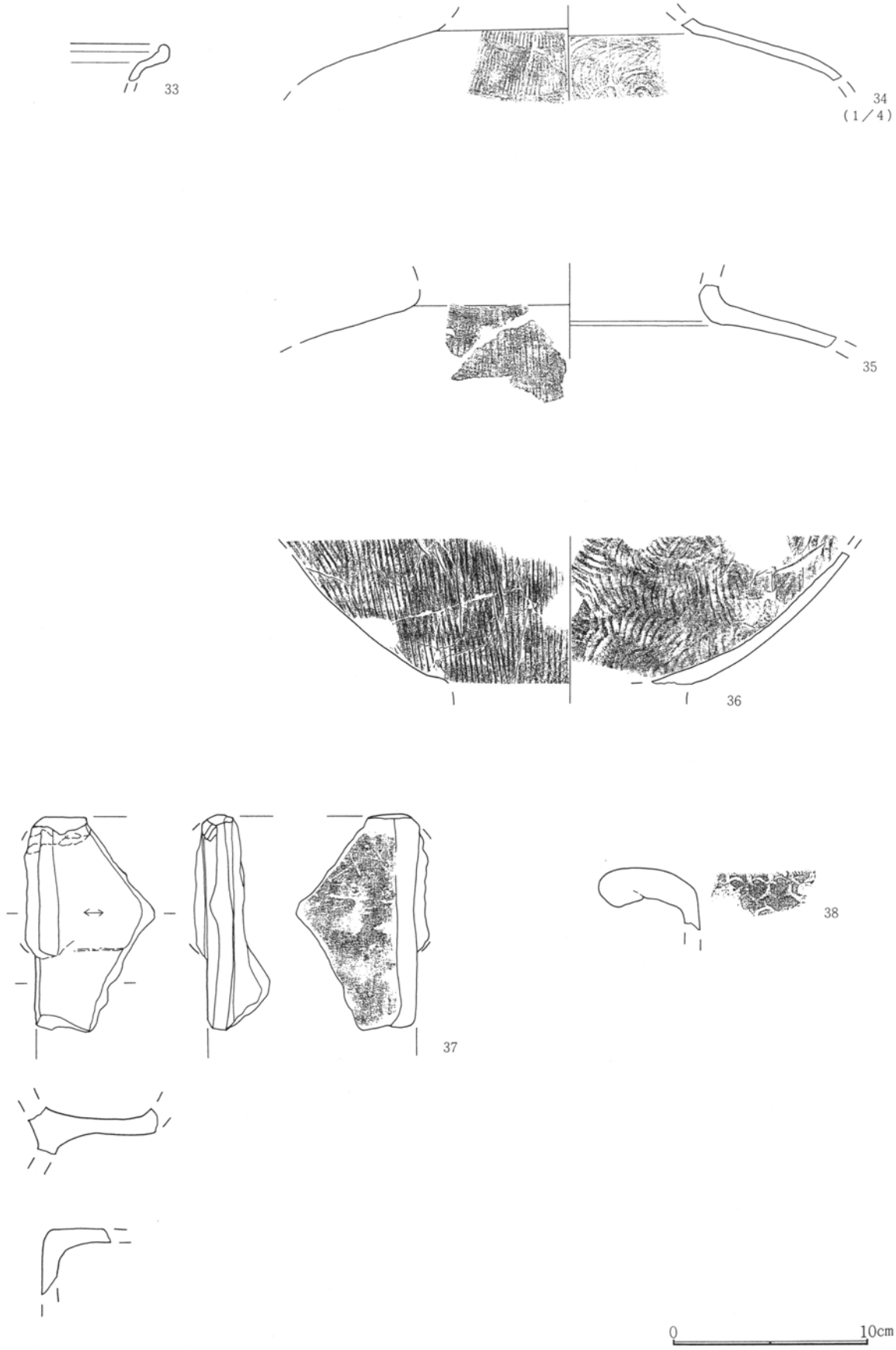
第25図　遺物集中点上面出土遺物（3）



第26図　遺物集中点上面出土遺物（4）



第27図　遺物集中点上面出土遺物（5）

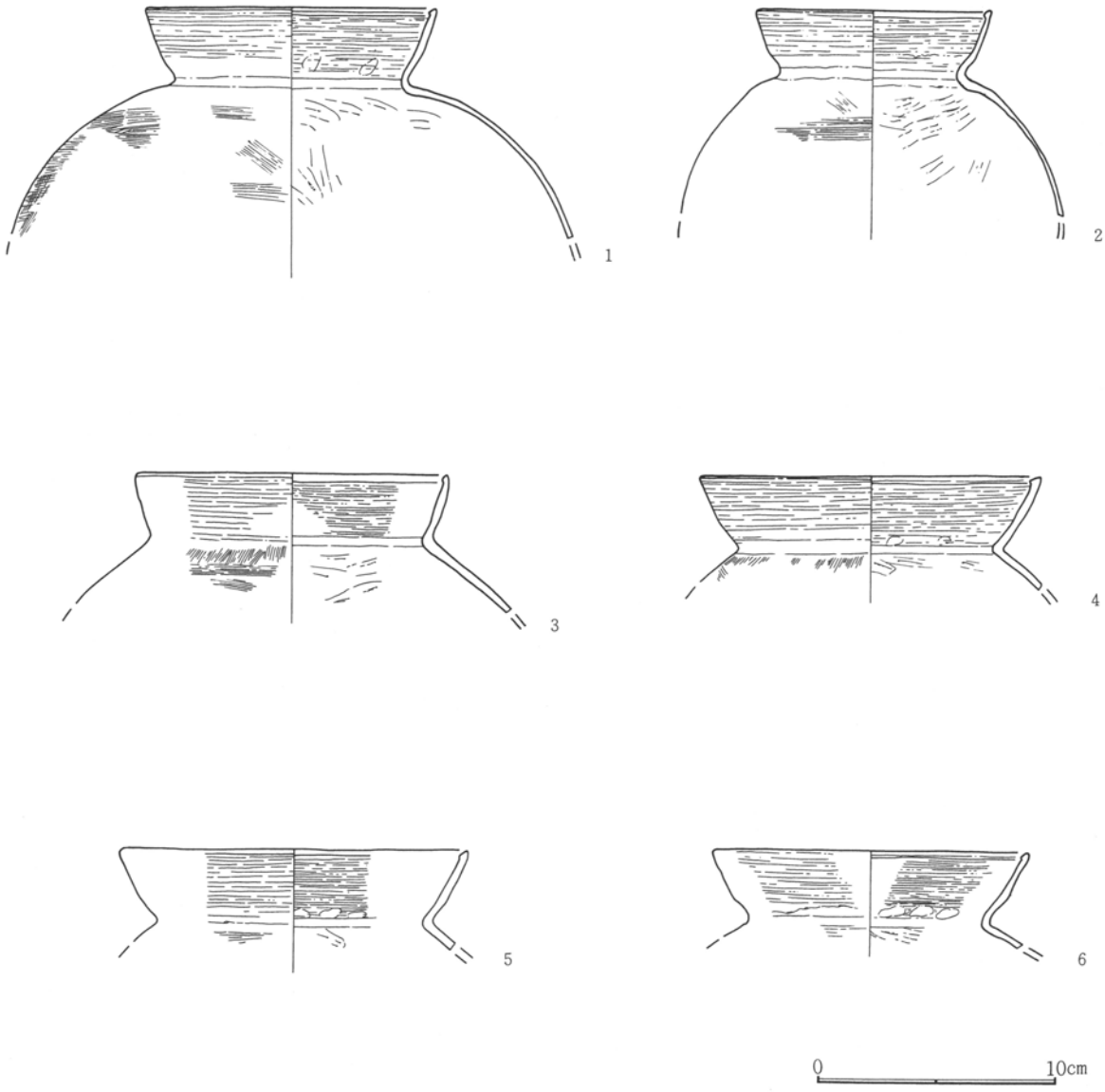


第28図　遺物集中点上面出土遺物（6）

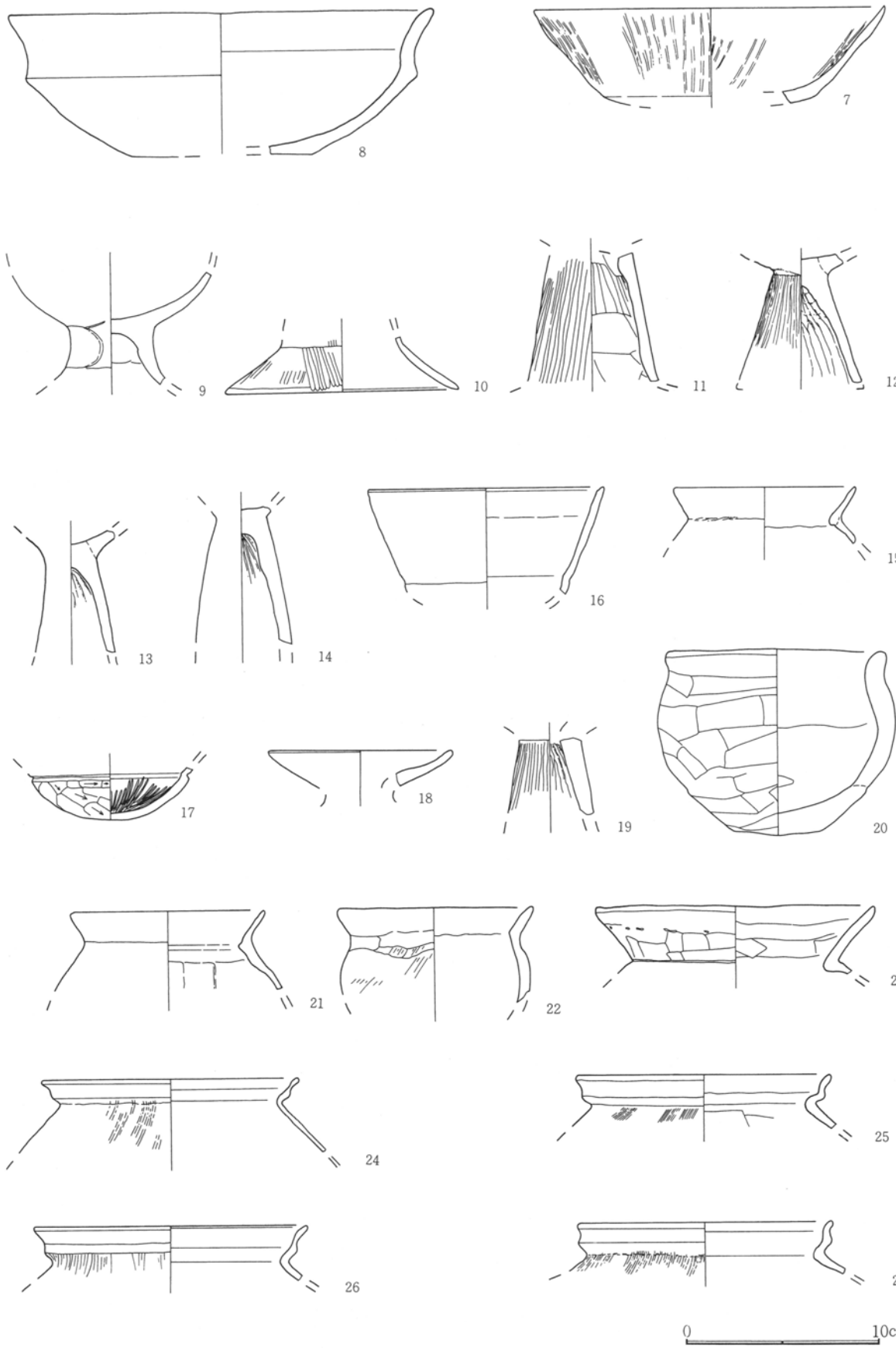
遺物集中点上面出土遺物観察表（第23～28図　ＰＬ10～13）

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
1	須恵器 坏身	上　面	口縁～底部１／３ 口径（10.7）	白色鉱物粒、還元焔。明オリーブ灰色（5GY7／1）	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
2	須恵器 杯	上　面	口縁～胴部破片 口径（11.0）	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。明オリーブ灰色（5GY7／1）	ロクロ整形、回転右回り。有高台か。	
3	須恵器 坏	上　面	胴～底部破片 底径（9.0）	白色鉱物粒、酸火焔。灰白色（5Y7／1）	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
4	須恵器 坏	上　面	底部破片 底径（9.0）	粗砂粒、還元焔。灰白色（7.5Y7／1）	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
5	須恵器 杯蓋	上　面	１／３個体 径（16.8）	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N7／）	ロクロ整形、回転右回り。天井部中央部は回転ヘラ削り。摘みは貼付。内面にカエリが存在。	
6	須恵器 杯蓋	上　面	上部破片	微砂粒、還元焔。灰白色（N7／）	ロクロ整形、回転右回り。天井部中程は回転ヘラ削り。摘みは貼付。	
7	土師質 杯蓋	上　面	口縁部片 口径（16.0）	細砂粒、還元焔。灰白色（5Y8／2）	ロクロ整形、回転方向不明。内面にカエリあり。	
8	須恵器 高台付碗	上　面	胴～底部１／２ 底径（10.2）	白色鉱物粒、酸火焔。灰白色（7.5Y7／1）	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台貼付。	
9	須恵器 鉢（鉄鉢）	上　面	口縁～底部１／３ 口径（19.0） 高さ　10.8	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰色（N7／）	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位から底部にかけては回転ヘラ削り。	
10	須恵器 盤	上　面	口縁～底部１／４ 口径（27.0）	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。明赤灰色（10R7／1）	ロクロ整形、回転右回りか。高盤の可能性もあり。	
11	須恵器 盤か	上　面	口縁部片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形。	
12	須恵器 堤瓶	上　面	口縁～底部１／２ 口径13.5	粗砂粒、酸火焔。褐灰色（7.5YR5／1）	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部、胴部表面は波状文、裏面はカキ目。	
13	須恵器 瓶	上　面	胴部破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（7.5Y6／1）	ロクロ整形、回転方向不明。	
14	須恵器 瓶	上　面	胴部破片	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形、回転右回りか。胴部回転ヘラ削り。	
15	須恵器 瓶か	上　面	胴部破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形、回転右回りか。中程は回転ヘラ削り。	
16	須恵器 長頸壷	上　面	口縁部 口径8.7	粗砂粒、還元焔。灰色（5Y6／1）	ロクロ整形、回転右回り。	
17	須恵器 長頸壷	上　面	胴～底部１／５ 底径（11.3）	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰白色（2.5GY8／1）	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位は回転ヘラ削り。	
18	須恵器 壷	上　面	口縁～頸部１／４ 口径（20.7）	白色鉱物粒、還元焔。赤灰色（2.5YR5／1）	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部に波状文と１条の沈線、口縁部は２段の波状文。胴部外面は平行叩き、内面にアテ具痕。	
19	須恵器 壷	上　面	口縁～胴上位破片 口径（28.0）	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。オリーブ灰色（2.5GY6／1）	ロクロ整形、胴部内面に輪積痕が残る。胴部外面ナデ、内面にアテ具痕か。	
20	須恵器 壷	上　面	口縁部片 口径（19.0）	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰白色（7.5Y7／1）	ロクロ整形、回転右回りか。底部、胴部下位は回転ヘラ削り。口縁部外面に自然釉。	
21	須恵器 壷	上　面	口縁部片 口径（19.4）	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N5／）	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部波状文。	
22	須恵器 壷	上　面	頸部～胴上位破片	白色鉱物粒、還元焔。明青灰色（5BG7／1）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部外面平行叩き、内面同心円状アテ具痕。	
23	須恵器 壷	上　面	肩部破片	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。青灰色（5B5／1）	ロクロ整形、回転右回りか。頸部付近に刺突文と波状文。	
24	須恵器 壷	上　面	肩部破片	微砂粒、還元焔。灰白色（5Y8／1）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部沈線区画内に波状文、その下位に刺突文。	
25	須恵器 壷か	上　面	胴部１／３	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰色（7.5Y6／1）	ロクロ整形、回転右回り。胴部中位は沈線区画内に２段の波状文、その下位に刺突文。胴部下位は外面叩き、内面にアテ具痕。	

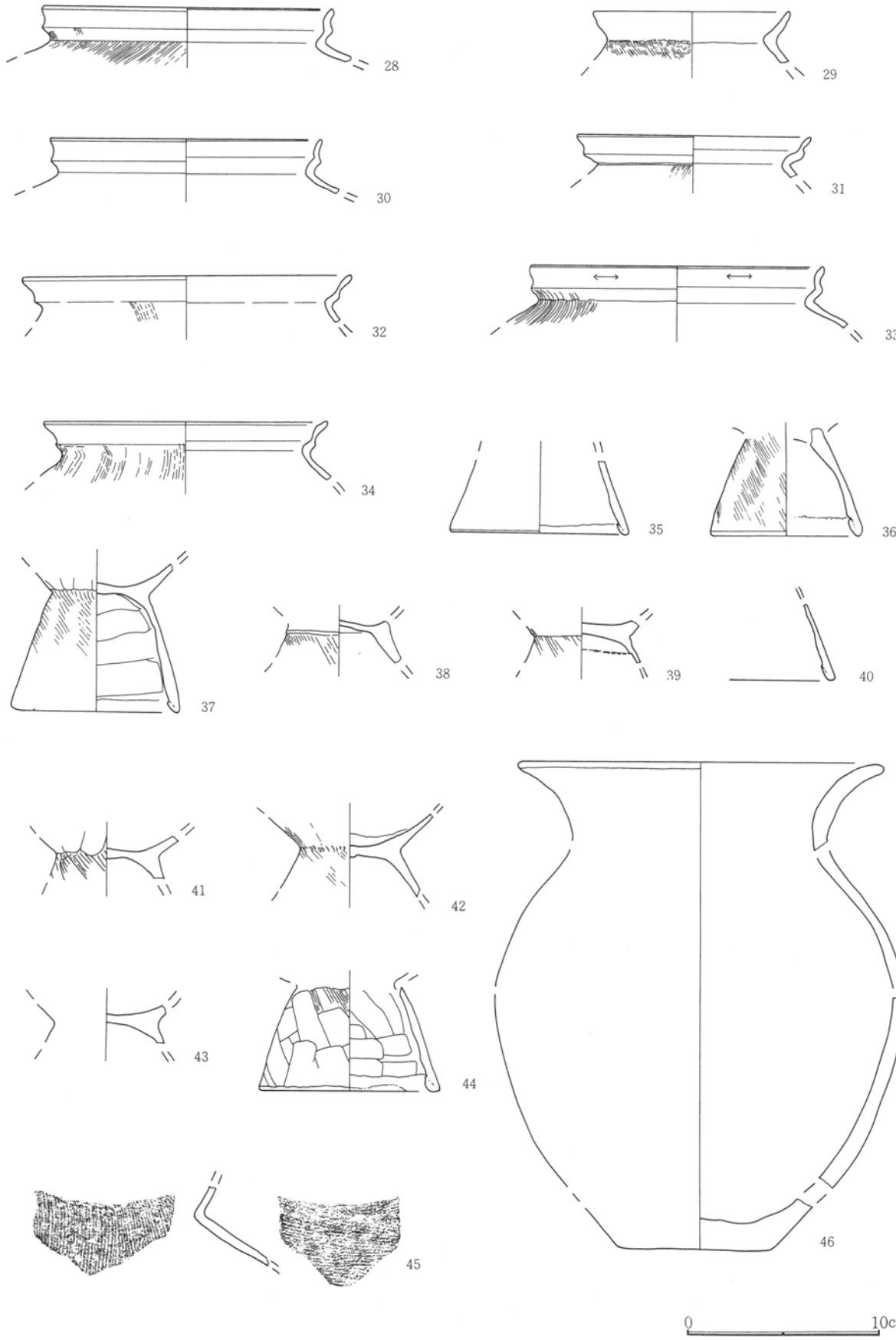
番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
26	土師質 壷か	上　面	胴部破片	粗砂粒、還元焔（やや酸火焔ぎみ）。灰黄褐色（10YR6／2）	ロクロ整形、回転方向不明。外面カキ目。	
27	須恵器 壷か	上　面	胴部破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N7／）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部外面カキ目。	
28	須恵器 壷か	上　面	胴部破片還元焔。灰色（N7／）	白色鉱物粒、細砂粒、	ロクロ整形、回転右回り。胴部下半は雑な回転ヘラ削り。	
29	須恵器 甕	上　面	口縁～底部１／５ 口径（29.8） 底径（12.6）	白色鉱物粒、還元焔。灰白色（2.5Y7／1）	ロクロ整形、回転右回りか。胴部はヘラ削り後ナデ整形か。底部周囲にヘラ削りが残る。	
30	須恵器 甕	上　面	口縁～頸部１／４ 口径（15.3）	白色鉱物粒、還元焔。にぶい橙色（5YR6／4）	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部上位に波状文、胴部外面平行叩き、内面にがアテ具痕。	
31	須恵器 甕	上　面	口縁～胴上位１／４ 口径（20.0）	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部に１段、口縁部に２～３段の波状文。	
32	須恵器 甕	上　面	口縁～胴部１／５ 口径（36.0）	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N7／）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部はヘラ削り。	
33	須恵器 甕	上　面	口縁部破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N7／）	口縁部外反し、口唇部は上へ立ち上がる。	
34	須恵器 甕	上　面	頸部～胴上位破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部外面平行叩き、内面同心円状アテ具痕。	
35	須恵器 甕	上　面	頸部～胴上位破片	白色鉱物粒、還元焔。灰色（N6／）	ロクロ整形、回転方向不明。胴部外面平行叩き。	
36	須恵器 甕	上　面	胴下位破片	白色鉱物粒、細砂粒、還元焔。灰色（N6／）	外面平行叩き、内面同心円状アテ具痕。	
37	瓦塔　軸部	上　面	最長10.6＋α	雲母粒、黒褐色粒他鉱物少。軽。酸化→弱燻。軟。	隅部上方片で先手、斗栱らしき、桁、梁らしき貼付と貼付痕、沈線一条。表面撫。内面縦撫あり。割れ口消耗あり。	県南以南製 ９Ｃか
38	火鉢	上　面	口縁部片	細砂粒、酸化焔。	口縁部内側は横ナデ。胴部外面に亀甲文。	



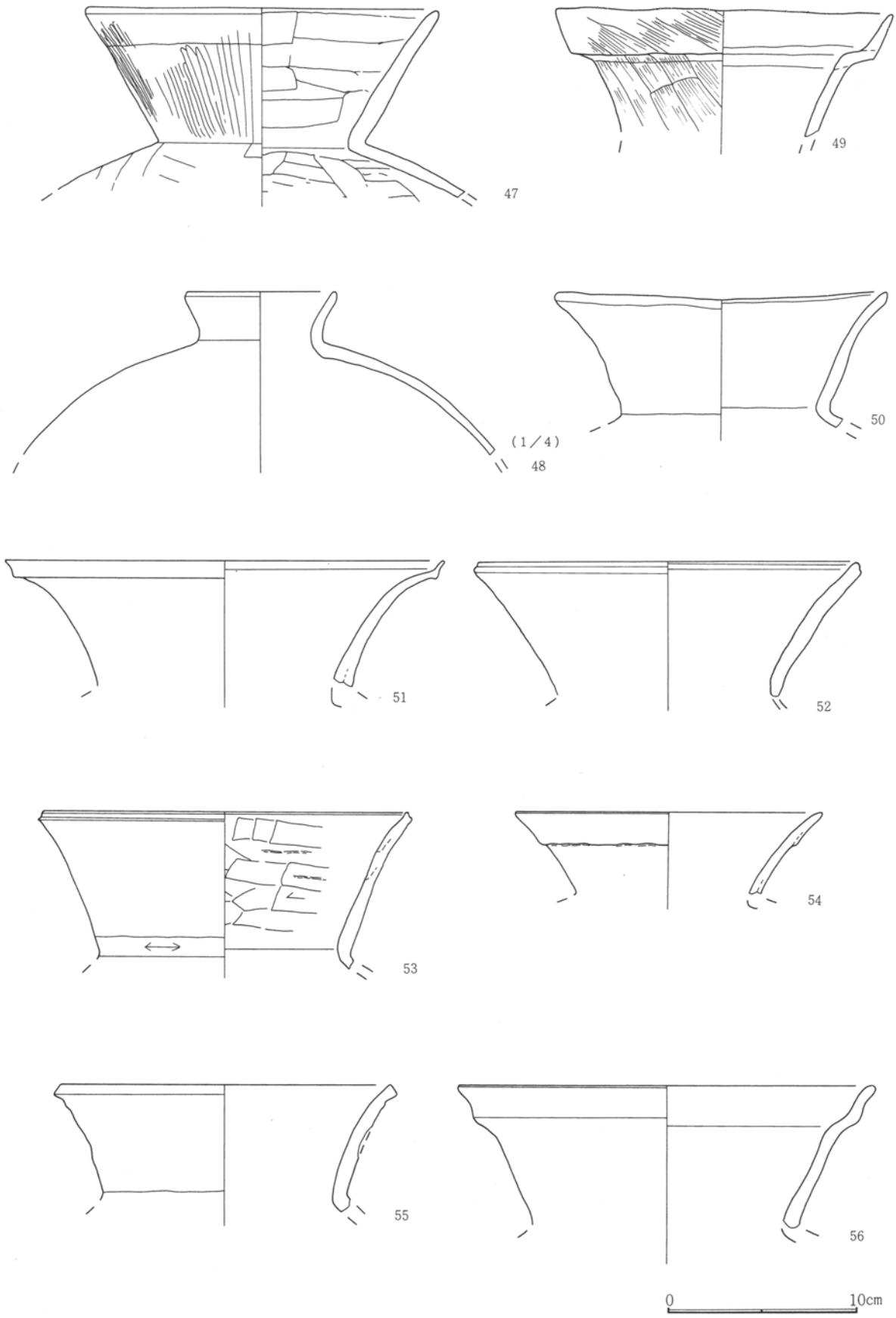
第29図　遺物集中点下面出土遺物（1）



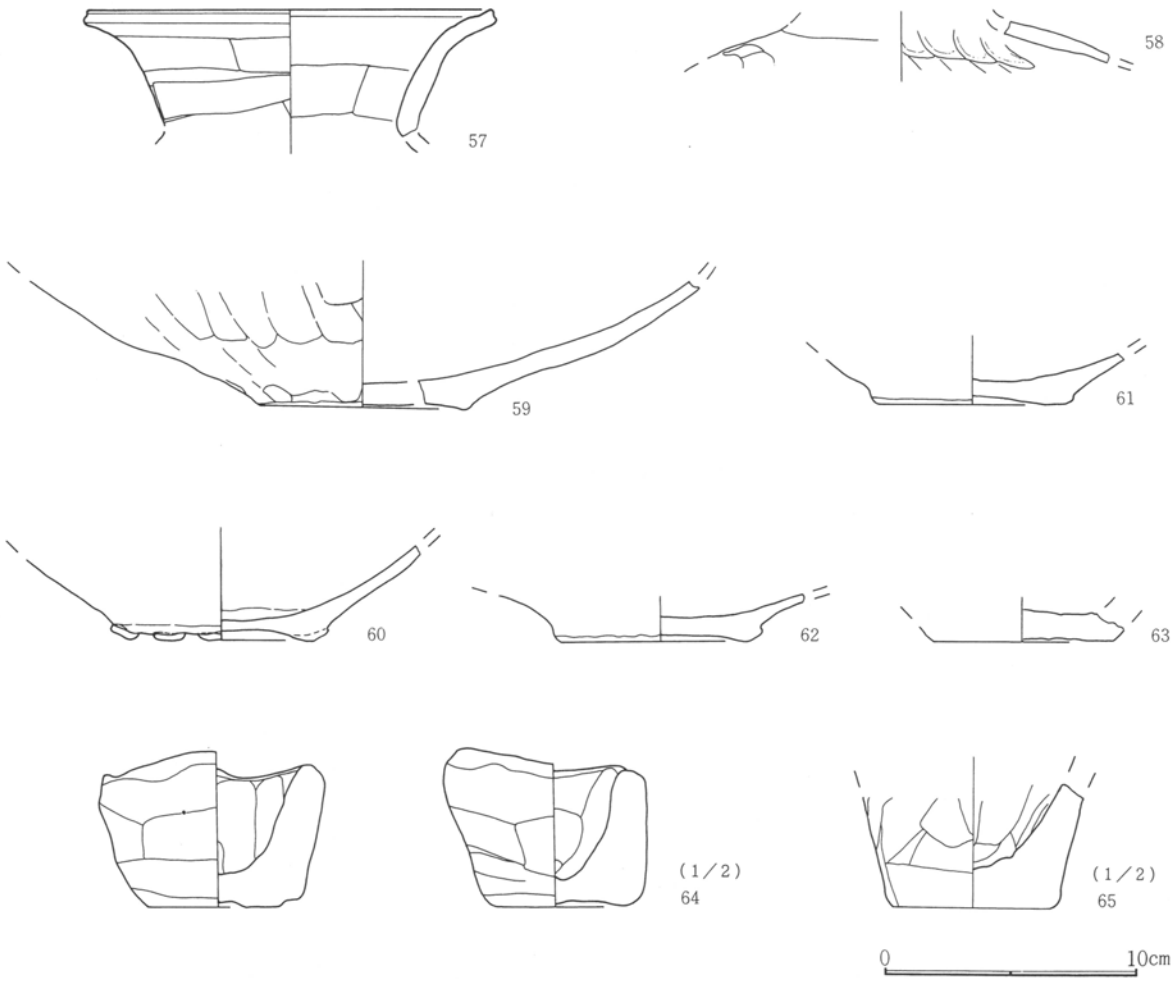
第30図　遺物集中点下面出土遺物（2）



第31図　遺物集中点下面出土遺物（３）



第32図　遺物集中点下面出土遺物（4）



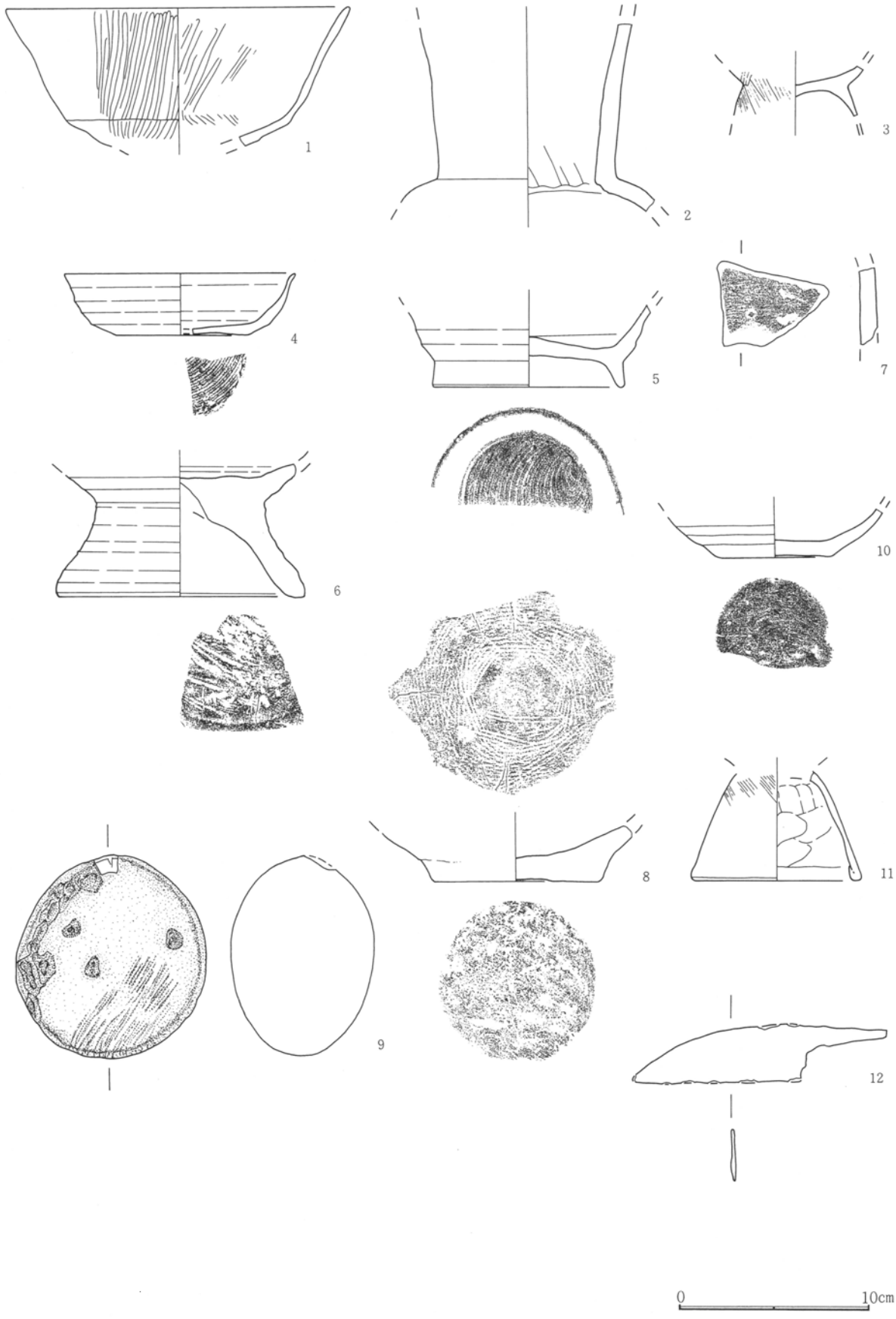
第33図　遺物集中点下面出土遺物（5）

遺物集中点下面出土土器観察表（第29～33図　ＰＬ14～17）

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
1	土師器 甕	下　面	口縁～体部上半 口縁径　12.1	雲母・石英・輝石を含む。良好。浅黄色（2.5Y7／4）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は縦及び横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
2	土師器 甕	下　面	口縁～体部上半 口縁径　9.8	雲母・石英・輝石を含む。良好。にぶい黄橙色（10YR6／3）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は縦及び横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
3	土師器 甕	下　面	口縁～体部上半 口縁径　14.2	雲母・石英・輝石を含む。やや良好。にぶい黄橙色（10YR6／4）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は縦及び横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
4	土師器 甕	下　面	口縁～頸部 口縁径（14.6）	雲母・石英・輝石を含む。やや良好。にぶい橙色（7.5YR6／4）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
5	土師器 甕	下　面	口縁～頸部 口縁径（13.2）	雲母・石英・輝石を含む。良好。浅黄橙色（10YR8／4）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
6	土師器 甕	下　面	口縁～頸部 口縁径（13.1）	雲母・石英・輝石・チャート含む。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	口縁…内外面とも横方向のスリナデ 体部…外面は横方向のスリナデ 内面はケズリ	布留形甕
7	土師器 高坏か	下　面	口縁～坏身底部破片 口径（21.7）	砂礫含む。酸化。良好。浅黄橙色（7.5YR8／6）	内外面とも横ナデ。体部は緩やかに湾曲し、やや強い稜を経て口縁はやや外湾する。	
8	土師器 高坏	下　面	坏部片 口径（18.0）	細砂含む。酸化。良好。橙色（2.5YR6／6）	外面は横ナデの後、縦位のヘラミガキ。内面は横ナデの後、斜位のヘラミガキ。	
9	土師器 高坏	下　面	坏部～脚部	砂礫含む。酸化。良好。橙色（7.5YR6／6）	やや直立気味の頸部から脚部は開くと思われる。器面が荒れるため成整形技法は不明。	
10	土師器 高坏	下　面	脚部破片 底径（12.0）	細砂含む。酸化。良好。橙色（5YR6／6）	外面は斜位および縦位のヘラ磨き。内面は横ナデ。	
11	土師器 高坏	下　面	脚部片 底径（7.0）	細砂含む。酸化。良好。褐灰色。（5YR5／1）	直線的に開き、裾部は欠損する。外面は縦位のヘラミガキ。内面は上位は縦ナデ、下位は横ナデ。絞り見られる。	
12	土師器 高坏	下　面	脚部破片	細砂含む。酸化。良好。明赤褐色。（2.5YR5／6）	脚部外面は縦方向のヘラミガキ。内面は指ナデ。絞りの痕跡が認められる。坏部内面はヘラミガキ。脚部を差し込み接合。	
13	土師器 高坏	下　面	脚部破片	細砂含む。酸化。良好。橙色（5YR6／6）	器面荒れて成整形技法は不明。内面に絞りが認められる。脚部を差し込み接合。	
14	土師器 高坏	下　面	脚部片	細砂含む。酸化。良好。淡赤橙色（2.5YR7／4）	器面荒れて成整形技法は不明。内面に絞り。	
15	土師器 小型坩	下　面	口縁部片 口径（12.0）	砂礫少量含む。酸化。良好。褐灰色（5YR5／1）	直線的に開く口縁。口縁部内外面は横ナデ。口唇部にごく弱い沈線が１条巡る。	
16	土師器 小型坩	下　面	口縁部片 口径（9.2）	細砂含む。酸化。良好。にぶい黄橙色（10YR7／3）	単口縁。口縁部内外面とも横ナデ。	
17	土師器 坩	下　面	底部片	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（5YR6／4）	丸底。底部外縁には沈線が巡る。外面は横位、斜位のヘラケズリ。内面は横ナデの後、放射状のヘラミガキ。	
18	土師器 器台	下　面	器受部片 口径（9.4）	細砂粒多い。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	内外面ナデ。	
19	土師器 器台か	下　面	脚台部片	細砂含む。酸化。良好。橙色（2.5YR6／6）	脚台部から受部へ長径８㎜の孔が貫通する。外面は縦方向のヘラミガキ。内面に絞り。	
20	土師器 小型甕	下　面	口縁～底部１／２ 口径（11.2） 丸底 高さ　9.3	砂礫含む。酸化。良好。明赤褐色（5YR5／8）	丸底気味の底部から体部は緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁は小さく外反する。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は横位のヘラケズリ。内面はナデ。	
21	土師器 小型甕	下　面	口縁部片 口径（10.0）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	口縁は直線的に外反する。口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は横ナデ。内面はヘラナデ。	

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
22	土師器 小型甕か	下　面	口縁部片 口径（10.0）	細砂粒含む。酸化。良好。にぶい黄橙色。(10YR7／3)	口縁部内外面横ナデ。頸部ヘラケズリ。胴部内面ヘラケズリ。	
23	土師器 甕	下　面	口縁部片 口縁（14.3）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	胴部から強い屈曲で外反する口縁。内外面とも横位のヘラナデ。頸部に沈線あり。口縁外面に輪積痕がわずかに見える。	
24	土師器 台付甕	下　面	口縁～胴上位破片 口径（13.2）	砂礫含む。酸化。良好。にぶい褐色（7.5YR5／3）	Ｓ字状口縁。器面荒れるが、口縁部内外面は横ナデ、胴部は斜めハケ。	
25	土師器 台付甕	下　面	口縁部１／２ 口径（13.0）	砂礫含む。酸化。良好。灰黄褐色（10YR5／2）	Ｓ字状口縁。口縁部内外面は横ナデ。胴部はケズリの後斜めハケ。	
26	土師器 台付甕	下　面	口縁部１／３ 口径（14.0）	砂礫含む。酸化。良好。橙色（7.5YR7／6）	Ｓ字状口縁。口縁部内外面は横ナデ。胴部は縦ハケ。	
27	土師器 台付甕	下　面	口縁部１／４ 口径（13.0）	砂礫含む。酸化。良好。橙色（7.5YR6／6）	Ｓ字状口縁。口縁部内外面は横ナデ。胴部は斜めハケ。	
28	土師器 台付甕	下　面	口縁部片 口径（15.0）	細砂含む。酸化。良好。灰褐色（7.5YR4／2）	Ｓ字状口縁。口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は斜めハケ、内面はナデ。	
29	土師器 台付甕か	下　面	口縁部片 口径（10.0）	砂粒多い。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／3）	Ｓ字状口縁か。口縁部内外面横ナデ。胴部に斜めハケ。	
30	土師器 台付甕	下　面	口縁部片 口径（14.0）	細砂含む。酸化。良好。橙色（7.5YR6／6）	Ｓ字状口縁。器面荒れて成整形技法は不明。内面は横ナデか。	
31	土師器 台付甕	下　面	口縁部片 口径（12.0）	細砂含む。酸化。良好。にぶい褐色（7.5YR5／4）	Ｓ字状口縁。内外面横ナデ。頸部外面に沈線が１条巡る。	
32	土師器 台付甕	下　面	口縁部片 口径（17.0）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	Ｓ字状口縁。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜めハケ、内面はナデ。	
33	土師器 台付甕	下　面	口縁部片 口径（15.0）	細砂含む。酸化。良好。浅黄橙色（10YR8／3）	Ｓ字状口縁。口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は斜めハケ。口唇部内側に弱い沈線が１条巡る。	
34	土師器 台付甕	下　面	口縁部片	細砂多い。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	Ｓ字状口縁。胴部外面は縦ハケ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。口唇部内側に弱い沈線が巡る。	
35	土師器 台付甕	下　面	台部片 底径（7.0）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR6／4）	下端は内側に折り返し。器面が荒れて成整形技法は不明。内外面ともナデか。	
36	土師器 台付甕	下　面	台部片 底径（7.8）	細砂少量含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR6／4）	下端は内側に折り返し。外面は斜めハケ、内面は指ナデ。	
37	土師器 台付甕	下　面	脚台部 底径　8.5	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／3）	端部は内側に折り返す。外面は縦ハケ。内面は横ナデ。甕部はケズリの後ハケ。	
38	土師器 台付甕	下　面	台部片	細砂含む。酸化。良好。にぶい赤褐色（5YR5／4）	脚部外面は斜めハケ。内面はナデ。	
39	土師器 台付甕	下　面	台部片	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／3）	脚部外面は斜めハケ。内面はナデ。胴部との接合に砂礫の多い粘土を使用している。	
40	土師器 台付甕	下　面	台部片	細砂含む。酸化。良好。灰褐色（5YR5／2）	下端は内側に折り返し。外面は右斜め縦ハケの後ナデ。内面は横ナデ。	
41	土師器 台付甕	下　面	台部片	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	台部外面は斜めハケ。内面はナデ。甕部外面はヘラケズリ、内面はナデ。	
42	土師器 台付甕	下　面	台部片	砂礫含む。酸化。良好。淡赤橙色(2.5YR7／4)	台部外面は斜めハケ。甕部外面はケズリの後斜めハケ。内面はヘラナデ。胴部との接合に砂礫の多い粘土を使用している。	
43	土師器 台付甕	下　面	台部片	砂礫含む。酸化。良好。橙色（5YR6／6）	台部外面は斜めハケ。胴部との接合に砂礫の多い粘土を使用している。	
44	土師器 台付甕	下　面	脚部１／２ 底径（9.4）	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（5YR7／4）	端部は内側に折り返す。外面は斜位のヘラケズリ。内面は斜位及び横位のヘラナデ。	
45	土師器 台付甕	下　面	頸部～胴部破片	砂礫含む。酸化。良好。灰褐色（7.5YR5／2）	胴部外面は縦ハケ。内面は横ハケ。	
46	土師器壺	下　面	口縁～底部破片 口径（18.9） 底径　7.8 高さ（24.9）	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	口縁部内外面は横ナデ。胴外面は斜位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
47	土師器 壷	下　面	口縁～胴上位1／2 口径　18.4	砂礫含む。酸化。普通。にぶい橙色（7.5YR7／4）	口縁は直線的に外反する。口縁外面は横ナデの後、縦位のヘラミガキ。内面は横位のヘラケズリ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面はケズリ、接合部に指押さえ。	
48	土師器 壷	下　面	口縁～胴上位 口径（10.5）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	球形の胴部から口縁は短く直線的に外反する。口縁部内外面は横ナデ。胴部は器面が荒れて成整形技法は不明。	
49	土師器 壷	下　面	口縁～頸部 口径　17.6	砂礫多く含む。酸化。良好。にぶい赤褐色（5YR5／3）	外面は右斜め縦ハケ。内面は横ナデ。	
50	土師器 壷	下　面	口縁部1／2 口径　17.4	細砂含む。酸化。良好。にぶい黄褐色（10YR5／3）	端部は弱い面取り。口唇部内側に弱い沈線が1条巡る。内外面とも横ナデ。	
51	土師器 壷	下　面	口縁部1／3 口径（23.0）	細砂含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	口唇部外面は横ナデ。口縁部外面は縦ナデ。内面は横ナデ。	
52	土師器 壷	下　面	口縁部1／4 口径（20.3）	細砂含む。酸化。良好。浅黄橙色（10YR8／3）	僅かに湾曲して外反する口縁。端部は強い面取りの後、沈線を1条巡らす。口唇部外面は横ナデ。下位は縦ナデ。	
53	土師器 壷	下　面	口縁部片 口径（19.0）	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（5YR7／4）	僅かに湾曲して外反する口縁。口唇部は強い面取り。口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデ。	
54	土師器 壷	下　面	口縁部片 口径（16.0）	砂礫含む。酸化。良好。灰褐色（5YR5／2）	口縁端部は外側に折り返す。内外面とも横ナデ。	
55	土師器 壷	下　面	口縁部片 口径（17.2）	砂礫多く含む。酸化。良好。明赤褐色（5YR5／6）	やや湾曲して外反する口縁。口唇部は強い面取り。内外面とも横ナデ。	
56	土師器 壷	下　面	口縁部片口径（22.0）	砂礫含む。酸化。良好。橙色（7.5YR7／6）	器面が荒れるが、内外面とも横ナデと思われる。	
57	土師器 壷	下　面	口縁部片 口径（16.0）	細砂含む。酸化。良好。浅黄橙色（7.5YR8／4）	湾曲して外反する口縁。端部は強い面取り。内外面とも横ナデ。	
58	土師器 壷	下　面	頸部	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（5YR7／4）	大きく開く胴部。外面は斜位のヘラケズリか。内面は接合部に指押さえの痕跡。	
59	土師器 壷	下　面	胴下半～底部片 底径（8.2）	砂礫含む。酸化。良好。にぶい橙色（7.5YR7／4）	ごく僅かに上げ底を呈する底部から体部は大きく開いて立ち上がる。胴部外面は斜縦位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	
60	土師器 壷	下　面	底部1／2 底径　8.6	砂礫含む。酸化。良好。橙色（7.5YR7／6）	器面が荒れて成整形技法は不明。底部に粘土をすりつけて上げ底状を呈する。	
61	土師器 壷	下　面	底部 底径　7.9	砂礫含む。酸化。良好。浅黄橙色（10YR8／4）内面は灰黄色（2.5Y6／2）	わずかに上げ底を呈する底部から緩やかに開く体部。外面は縦位のヘラナデ。	
62	土師器 壷	下　面	底部 底径　8.3	砂礫含む。酸化。良好。にぶい褐色（7.5YR5／3）	わずかに上げ底を呈する底部から緩やかに開く体部。内外面ともヘラナデ。	
63	土師器 壷	下　面	底部 底径　7.0	砂礫含む。酸化。良好。褐灰色（7.5YR4／1）	底面ヘラケズリか。	
64	手捏土器	下　面	完形 口径　5.5～6.0 底径　3.8～4.3 高さ　4.1～4.2	砂礫多く含む。酸化。普通。にぶい橙色（5YR6／4）	外面は横ナデ。内面は斜位のナデ。	
65	手捏土器	下　面	口縁～底部 口径（5.0） 底径　4.2	砂礫多く含む。酸化。普通。明赤褐色（5YR5／6）	内外面ともナデ。	



第34図　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表（第34図　ＰＬ18）

番号	種類　器種	出土位置	残存状態　計測値	胎土・焼成・色調	器形・成整形の特徴等	備考
1	土師器 高坏	1溝	坏部1／4 口径（18.0）	砂礫含む。酸化。良好。 にぶい橙色（7.5YR7／4）	ゆるい稜を持ち、直線的に外斜する。外面は横ナデの後、縦ミガキ。内面はナデの後、斜位のミガキ。	
2	土師器 直口壺	1号溝覆土	頸部破片	砂礫含む。酸化。良好。 橙色（5YR7／6）	球形と思われる体部から口縁は直立する。口縁部外面は横ナデの後縦ミガキ。内面は横ナデ。	
3	土師器 台付甕	1号溝覆土	台部片	細砂含む。酸化。良好。 橙色（2.5YR7／6）	台部は外面にハケの痕跡が残る。胴部との接合に砂礫の多い粘土を使用。	
4	須恵器 坏	1溝覆土	口縁～底部1／5 口径（11.0）	粗砂粒、還元焔。灰色（N8／）	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
5	須恵器 高台付椀	2溝覆土	胴下部～底部1／2 底径10.0	微砂粒、還元焔。明青灰色（5BG7／1）	ロクロ整形、回転左回り。底部回転糸切り、高台貼付。	
6	土師質土器 脚付盤	1号溝付近	脚～盤部破片 底径（13.0）	鉱物含。軽。酸化。軟。	内面撫。脚外面回転横撫。脚内面工具による掻ならし。脚端部は特徴的に平ら。割れ口消耗あり。	藤岡・西毛製。 10C末～11C前
7	須恵器 甕か	1溝覆土	胴部破片	微砂粒、還元焔。灰白色（5Y8／2）	ロクロ整形、回転方向不明。	
8	土師器 壺か	1溝	底部片 底径　8.7	砂礫含む。還元。良好。 にぶい橙色（7.5YR7／4）	内面にハケ状工具による調整痕。	
9	石器 敲き石	表採	完形 重量　695ｇ		石材は粗粒輝石安山岩。在地の石材ではなく、搬入品と思われる。	
10	須恵器 碗	グリッド X＝32810 Y＝-73750	胴～底部破片 底径　6.0	粗砂粒含む。還元？。にぶい黄橙色（10YR6／3）	黒色土器が2次焼成を受けたものか。器面が荒れて成整形技法は明らかではないが、ロクロ整形、底部は左回転糸切と思われる。	
11	土師器 台付甕	表採	脚部 底径（9.0）	細砂含む。還元。良好。 にぶい橙色（7.5YR7／4）	端部は内側に折り返す。外面は斜めハケ。内面は指ナデ。	
12	鉄器 包丁か	表採	ほぼ完形 長さ　13.4 厚さ　1.5㎜			

第４章　調査の成果とまとめ

第１節　１号溝出土土器について

１　土師質土器皿について

１号溝からは13個体の土師質土器皿が出土している。直線に延びる１号溝がほぼ直角に屈曲する部分の溝底から中層にかけて、1.6ｍ×1.2ｍの範囲で出土している。他の軟質陶器類がこの地点ではあまり出土していないことから、人為的な廃棄、あるいは投棄を窺わせる出土状況である。この中世土師質土器皿については、志田登氏が高崎市域で出土した403例を分析、分類している*[1]のでこれを参考に本遺跡の例を概観してみたい。まず、それによると中世土師質土器皿の特徴は、底部が左回転糸切となっていることがあげられ、右回転糸切の出現は約７％にすぎないということである。本遺跡の13例のうち、55と57が不明である他はすべて左回転糸切となっているので、この例に合致しているといえよう。また、大きさは口径が6.2㎝から15.8㎝の範囲に収まっているということであるが、本遺跡の13例の最小は8.6㎝、最大が12.0㎝であるので、これもこの範囲に収まっている。

志田氏は土師質土器皿の編年を試みておられるが、その方法として口径／器高、底径／器高の比率をグラフ化して器形の特徴を取り上げている。それによってⅠ期からⅦ期の編年を提唱している。第35図は志田氏の作成された器形比率グラフに本遺跡の13例をプロットしたものである。それによると、本遺跡の例は１点を除き、ほぼⅦ期の範囲に収まることがわかる。また、志田氏はⅦ期の特徴として形状が薄手になることと口径が12㎝前後、底径は７㎝前後、器高は2.5㎝前後ということをあげているが、本遺跡の例も薄手の形状を呈しており、計測値も志田氏のあげた範囲に収まっているものが多いことから、Ⅶ期に属すると考えることができる。志田氏はⅦ期に16世紀という時期を与えており、これらの遺物は16世紀の所産といえるであろう。

２　鉢について

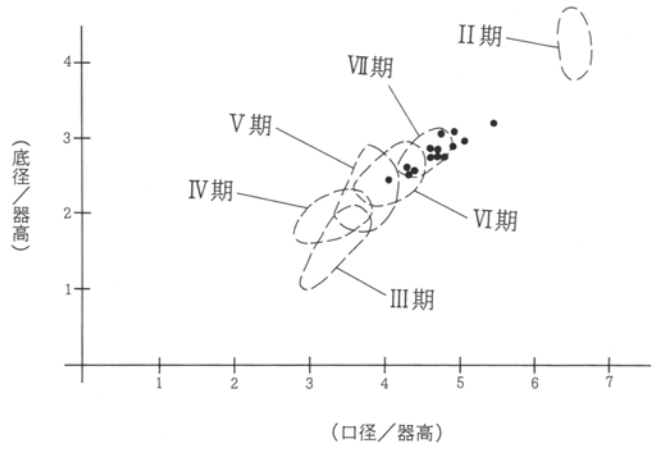
１号溝では18個体の鉢を今回報告した。中世陶器の鉢には基本的には片口がつくとのことであるが、今回報告した中で片口が認められたのは１号溝－４、９、13の３個体にすぎなかった。また、卸目のあるものとないものに分類されるが、この卸目の有無にかかわらず、擂り鉢としての機能を果たしていたと考えられている。卸目については19に確認できただけであった。

これらの鉢の時期であるが、星野守弘氏は鉢をⅠ期からⅥ期に分類されている*[2]。これによると軟質陶器鉢は14世紀前半に出現を見て16世紀まで用いられ、その後は瀬戸美濃を中心とした製品に代わっていくことを述べておられる。また、卸目の出現は15世紀後半頃のⅤ期に当てていることから、19はⅤ期、すなわち15世紀後半の所産といえよう。それ以外の鉢は卸目の見られないことからそれよりも時期が上ることが考えられるが、器形から見ると口縁部のやや下位からわずかに外反する個体が見られること、器肉がやや薄手であることなどからⅥ期に相当するのではないかと思われる。鉢についても土師質土器皿と同様に、口径、底径、器高の器形比率グラフに本遺跡の例をプロットしたのが第36図である。星野氏によると時期が下るにつれて、口径／器高に対して底径／器高が相対的に小さくなり、特に卸目が出現する時期にこの傾向が顕著であるという。ただし、高崎市域で出土した鉢で計測できたものは34個体にすぎないとのことであるので、この傾向に普遍性があるかどうかについては星野氏も今後の資料の増加を待ちたいとしている。本遺跡では18個体のうち口径、底径、器高が計測できたのは５個体である。約15％の資料の増加である。第36図を見ると本遺跡の５例は全体のほぼ中央からやや下の範囲に入っている。星野氏の指摘のように時期が下ると底径が小さくなる傾向が見られることから、グラフ中の点は全体に下に下がる傾向が見られるはずである。Ⅰ、Ⅱ期では底径が大きいことから点は上位に集まるであろう。したがって本遺跡の例はⅠ期からⅥ期のほぼ

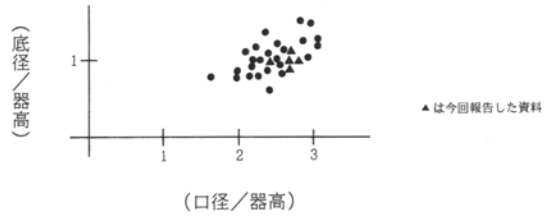
中程の時期がこのグラフからは推定される。

前に鉢は卸目の有無にかかわらず、擂り鉢としての機能を果たしているとしたが、今回報告した鉢の中では観察によると未使用、あるいは近未使用と思われる個体が多い。大江正行氏は本遺跡の周辺の分布調査を実施して、1号溝出土例と同様に未使用に近い個体が多く得られたことから、本遺跡の周辺に窯址の存在を推定している*3。今回の調査でも窯址の存在を窺わせる資料は発見できなかったが、未使用あるいはそれに近い資料が得られたことは大江氏の推定を裏付けるものといえよう。大江氏が「推定石神社窯址」として名称を与えた石神社は本遺跡の東南東300mの位置である。(第37図参照)

本遺構は窯址と直接関連を持つものとは思われず、窯址を実際に想起させるような遺物は得られなかったが、本遺跡の周辺に窯址が存在することがさらに強く推定されると思われる。今後の調査、研究に期待をしたい。

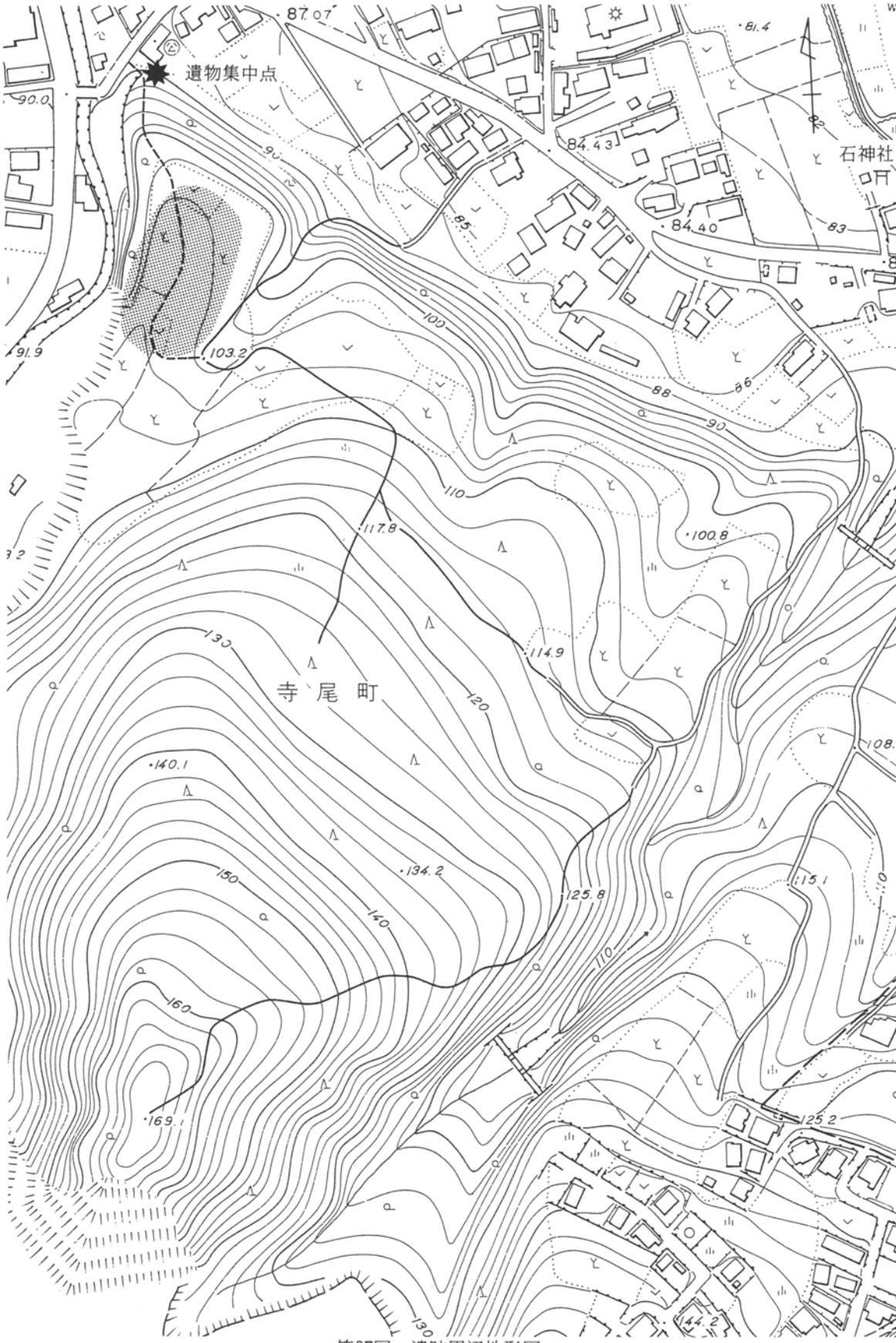


第35図　土師質土器皿器形比率グラフ



第36図　軟質陶器鉢器形比率グラフ

＊1　「新編高崎市史」資料編3　1996
＊2　注1に同じ
＊3　注1に同じ



第37図　遺跡周辺地形図

第2節　遺物集中点について

本遺跡の中央付近で、尾根から平坦部への変換点付近で確認された遺物集中地点は、ほぼ4m四方の範囲で確認されている。東端が調査区外にかかるためさらに東へ延びる可能性は大きい。西側は近世以降に築かれた石垣によって破壊されているため、西側への広がりは不明である。尾根の表土除去の際、須恵器の出土が確認されたのであるが、傾斜地であることから遺物包含層として、出土層位の確認と出土状況の写真撮影を行って遺物は取り上げていった。その後も遺物の出土が続いたため遺構を確認しつつ調査を進めたが、須恵器が出土する面では遺構の検出には至らなかった。その後、須恵器に代わって古式土師器が出土するようになり、さらに遺構を念頭におきつつ調査を続行した。しかし、調査期間の終了時期が迫っており、遺物の取り上げが忙しく、出土位置の記録を行うことができなかった。遺物の取り上げがほぼ終了したと思われたため、調査区の埋め戻し作業に入ったのであるが、その際、同地点を確認のため薄く掘削してみたところ、さらに遺物が出土したため、埋め戻し作業を中断して遺物の取り上げを行った。こうした状況であったため、後述する布留式土器の出土位置や出土状況を記録できなかったことは残念でならない。今回の報告では、遺物集中地点上面、下面ということで報告を行っているが、須恵器と古式土師器は層位的にはっきりと分層できたわけではなく、古式土師器の中には須恵器とともに取り上げられたものも相当数含まれている。

上面から出土した須恵器はその多くが7世紀代に属すると思われる。この時期にこれだけの須恵器が出土していることから、近くに古墳の存在が推定されるが、尾根の斜面からの出土状況から考えるとその可能性はあまり高くないように思われる。また、第37図のトーン部では同時期であるかは不明だが、土師器須恵器片が採集できており、やや広い平坦面であることから、ここに集落が存在し、そこからの転落の遺物であると考えることもできる。しかし、今回報告した遺物には酸化気味の焼成と認められる個体が見られることから周辺に須恵器窯の存在の可能性も否定できないといえよう。

下面から出土した古式土師器は4世紀中葉から5世紀前半の範囲に収まるものと思われる。この中で特筆すべきは畿内系の土器である布留式甕の出土であろう。いわゆる布留甕は関東圏でも18遺跡からの出土を数えるのみであり、県内では熊野堂遺跡（高崎市）、行幸田山遺跡（渋川市）御正作遺跡（大泉町）、富沢古墳群、磯之宮遺跡、脇屋深町遺跡（太田市）で確認されているにすぎない*1。このほとんどが1点のみの出土であるのに対し、本遺跡では、少なくとも6個体が確認できていることから、この性格が問題となろう。本遺跡の平坦部は1、2号溝の確認面ではこれ以外の遺構は確認できなかった。また、同地点の遺物の出土は地形的な変換点ではあるが、写真からも捉えられるようにかなり斜面部にかかっており、平坦部への広がりは少ない。従って遺構に伴う遺物と考えるよりも、始めからこの位置に据えられていたか、尾根上部からの転落ということが考えられる。関東への布留系土器の波及は祭祀的な性格が強いと考えられている*2ので、ここが何らかの祭祀を執り行う場所であった可能性は捨てきれないであろう。また、上部からの転落であるが、この地点の直上の尾根は幅が10～15m程の細い尾根であるので、祭祀場所の可能性はあるが、集落が営まれていた可能性は低い。また、尾根頂部ではこれらの土器は検出されていない。しかし、前に述べたように上部の平坦面での集落の存在は否定できないことから、これらの土器が転落したものであるか、そうでないかについては結論を出すことはできない。貴重な資料を時間的な制約と担当者の力量不足によって詳細な記録がとれなかったことは残念なことであるが、S字状口縁台付甕との共伴関係とも併せて今後の研究に資することができれば幸いである。

＊1・＊2 「関東における布留系土器について」西川修一『庄内式土器研究』Ⅳ　庄内式土器研究会1993

第３節　寺尾茶臼山城と寺尾町下遺跡の中世遺構　　－まとめに代えて－

１　はじめに

寺尾町下遺跡からは中世の遺構として未周知の１・２号溝が見付かっている。また、頂部平坦面付近や斜面にも木戸や坂戸口が想定されている。以下これらの性格について若干の考察を試みたいと思う。

２　寺尾茶臼山城

寺尾町下遺跡は寺尾茶臼山城（以下「茶臼山城」とする）の北西隅、一の木戸から城下にかけて位置する。茶臼山城は別称を鷹ノ巣城といい、東西を険しい谷に挟まれた尾根上に立地し、南側の尾根筋は堀切で閉じているが、北側は緩斜面が扇状に開き、はっきりした防御施設もなく、その先端は烏川構造線による10ｍ程の高さの段差となっている。主郭は尾根先端頂部に在って低土居、横堀が設けられ、堀の土を外に盛り上げた周帯も残る。虎口は東に開く坂虎口で、腰郭が２段付いている。

第38図　寺尾茶臼山城縄張図
（山崎図に一の木戸先部石守加筆）

茶臼山城の築城は南北朝頃とされ、寺尾上城（乗附城）・中城・下城（山名城）と共に地域城である寺尾城の一部となっている。

その後の変遷は不明だが、『甲陽軍鑑』に永禄８年（1565）の記事として「山名、鷹ノ巣の間に新城（根小屋城）を築き」とあるので、この頃までには整備し直されていたようである。現状の遺構は主郭周囲を除くと、特段の防御施設は認められず、のろし台跡に多い『鷹巣』の別称があるので現在残る遺構はのろし台であった可能性が考えられている。

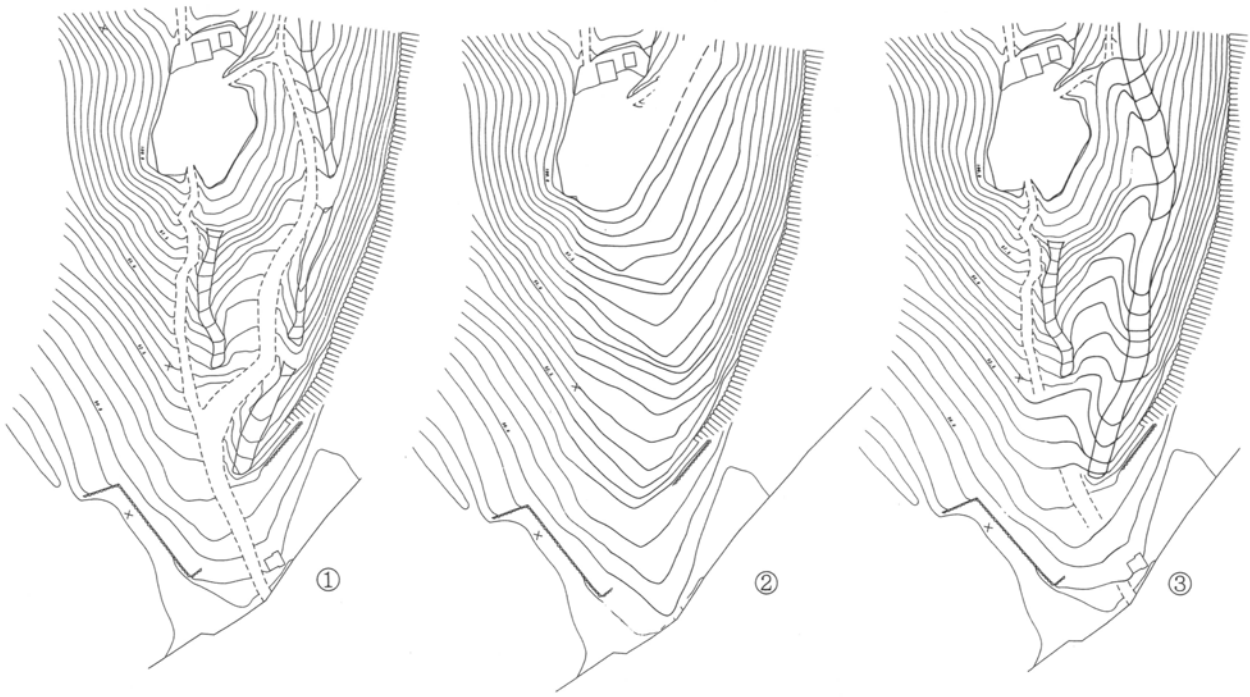
３　１号溝

規模の大きくない薬研堀である１号溝は、南は中山川に達すると想定され、北は茶臼山城の坂戸口裾部を切って調査区北西で走行を西に転じるが、現道撤去工事の立会いで、走行を転じてから数ｍで止まることが確認された。その西側の状況は不明だが、堀が外側に飛び出して止まるのは不自然なので、切れた箇所を戸口として対応する堀が在ったものと想定される。この堀が西に延びれば中山川に達し、三角形の郭面が作られることとなる。

想定される郭面の存在によって茶臼山城の木戸口への進入が制御できることから、１号溝は戸口の防御といった役割を持っていたものと考えたい。しかし１号溝の堀幅は狭く、遺物から与えられる16世紀という時期から推して戦時対応の堀ではなかったものと思われる。

４　２号溝

２号溝も規模の大きくない薬研堀であるが、その西端は調査区西部で止まり、１号溝を考慮しないと完結しない。出土遺物から得られる年代は15世紀前半で１溝と時期差があるが、１号溝が掘り直しである可能性や、２号溝の出土遺物が破片のため１号溝と同時期であった可能性が考えられる。一方、東側



第39図　斜面部平面図（①発掘調査時現況　②当初形状復元図　③戦国期形状復元図）

端部は確認できなかったが、茶臼山城北側の平坦面を画すものであったと思われる。尚、1号溝と併せれば北西隅が戸口になり、両溝が同時期ならば順の食違戸口となる。

2号溝は推定鎌倉街道のルートの一つである県道寺尾藤岡線の南に並行している。正安3年（1301）成立の鎌倉―善光寺間の地名を歌い込んだ「宴曲抄」に「嵐も寒衣沢」という一節がある。河川としての衣沢は本遺跡の北を流れるが、本遺跡付近が「衣沢」地名であった可能性があり、2号溝の内側（南側）に柱穴等は確認されなかったものの、街道沿いの衣沢集落或いは屋敷を囲っていたものと考えたい。

5　坂戸口と頂部平坦面

茶臼山城の北西部には60×25m程の東西に長い平坦面があり、西端に2段程の段差があってその最西端部が調査を行った頂部平坦面であった。

頂部平坦面の斜面部には茶臼山城主郭に至る道路がある。調査時の道路は戦後土木機械で掘削したということであるが、等高線から元の地形を推定する（第39図－②）と尾根筋は現状より西に寄っていたと推定され、かなりの土量を削ったことになる。しかし崖際には土塁状の掘り残しがあり、作業効率を考えれば疑問が残る。寺尾中城でも小規模な堀切の覆土を一部削って作業道を造り、堀切は戦後掘ったものと証言していた事例もあったので、上記の状況と合わせて戦後の掘削は旧道を拡幅したものではなかったかと考えている。

こうした前提に立って旧状を想定復元したのが、第39図－③である。崖際に土塁状の帯を伴う堀底道のような形状となったが、こうした通路形態は（在地の縄か武田氏の縄かは不明だが）武田氏改修の木部要害と推定される山名城にも見られる。

尚、頂部平坦面の中世に於ける形態は不明だが、坂戸口を見張る郭であったと推定する。

6　おわりに

屋上屋を重ねる考察となったが、本遺跡で確認された遺構のうち1号溝は茶臼山城の木戸口を押える郭の堀、2号溝は茶臼山城を背にした鎌倉街道沿い「衣沢」の屋敷遺構に伴うものと推定した。また、調査区南側の斜面通路は崖側に掘り残しを伴う堀底道状のものであった可能性を示してまとめとしたい。

〔参考文献〕
高崎市市史編さん委員会『新編　高崎市史　資料編3　中世Ⅰ』1996
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『寺尾中城遺跡』2000
高崎市市史編さん委員会『新編　高崎市史　通史編2　中世』2000

発掘調査報告書抄録

ふりがな	てらおまちしもいせき
書名	寺尾町下遺跡
副書名	住宅宅地関連公共施設整備促進事業（主要地方道　高崎万場秩父線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第297集
編集者	池田政志
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2　　TEL　0279-52-2511
発行年月日	2002年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
寺尾町下（てらおまちしも）	群馬県高崎市寺尾町大字下	102020	10005-00721	36°17′30″ 139°00′45″	20000615 20000915	1050㎡	道路建設に伴う調査

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	城郭	中世	堀2条	軟質陶器鉢・内耳堝 土師質土器皿	
	その他	古墳	包含層2面	土師器・須恵器	畿内系土器の布留式土器が出土

写　真　図　版

寺尾町下遺跡周辺（南東上空から）
矢印が寺尾町下遺跡

寺尾町下遺跡周辺（写真上が北西）

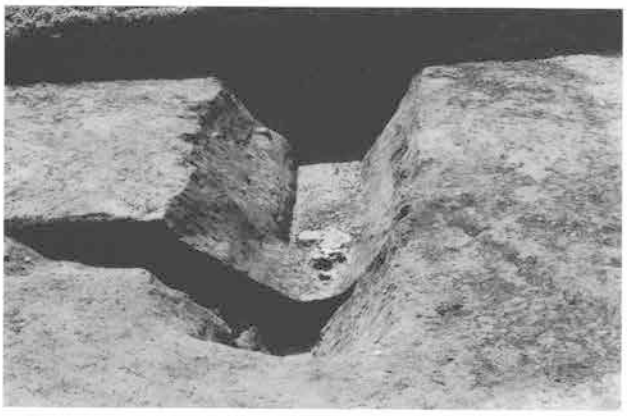
遺跡全景（北東上空から）

1号溝全景（北東から）

1号溝遺物出土状況（北東から）

1号溝全景（南西から）

1号溝土層断面A－A′（南東から）



2号溝全景（北西から）

2号溝遺物出土状況（南西から）

平坦部全景（南西から）

調査前尾根部全景（北から）

1号道近撮（北から）

2号道全景（南から）

尾根部全景（北から）

尾根部全景（北西から）

尾根上の平坦面全景（南東から）

尾根部全景（北東から）

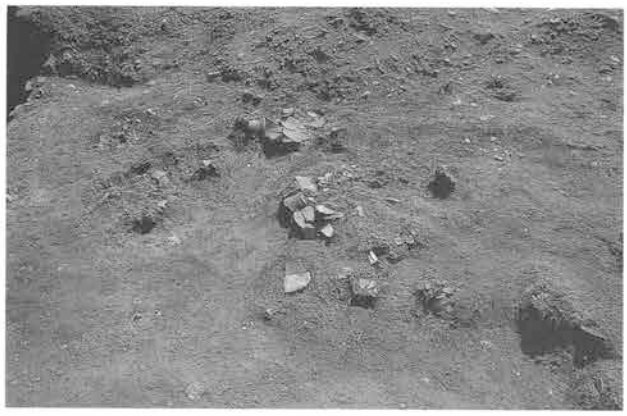
尾根部全景（北東上空から）

尾根部全景（北西上空から）

遺物集中点上面出土状況（北東から）

遺物集中点下面出土状況（北東から）

遺物集中点下面出土状況（北東から）



遺物集中点下面出土状況（北東から）

尾根北端の石垣（北から）

尾根北西側の石垣（北西から）

頂部平坦面から南東に延びる溝（南西から）

頂部平坦面から北東方向を望む

頂部平坦面から北方向を望む

1溝－1

1溝－3

1溝－4

1溝－2

1溝－5

1溝－7

1溝－6

1溝－9

1溝－9

1溝－10

1溝－11

1溝－12

1溝－15

1溝－13

1溝－14

1溝－16

1溝－17

1溝－18

1溝－19

1溝－20

1溝－21

1溝－22

1溝－24

1溝－23

1溝－25

1溝－26

1溝－27

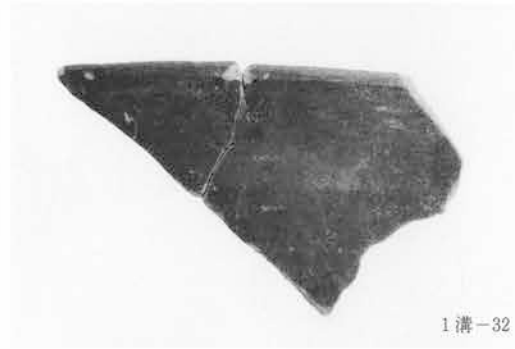
1溝－29

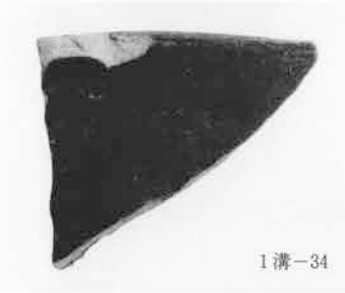
1溝－28

1溝－33

1溝－30

1溝－31


1溝－32


1溝－34

1溝－35

1溝－36

1溝－37

1溝－39

1溝－38

1溝－40

1溝－41

1溝－43

1溝－42

1溝－45

1溝－44

1溝－46

1溝－47

1溝－48

1溝－49

1溝－50

1溝－51

1溝－52

1溝－53

1溝－54

1溝－55

1溝－56

1溝－57

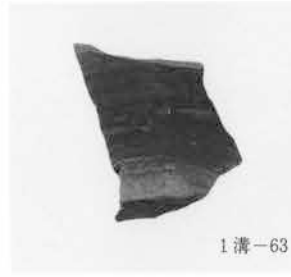
1溝－58

1溝－60

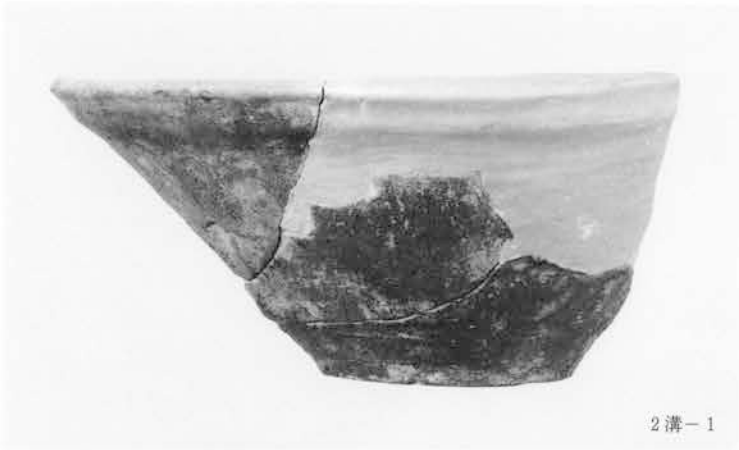
1溝－61

1溝－62

1溝－59


1溝－63

1溝－64


2溝－1

2溝－2

2溝－3

2溝－4

2溝－7

2溝－8

2溝－5

2溝－6

上面－1

上面－2

上面－3

上面－5

上面－6

上面－7

上面－8

上面－10

上面－9

上面－11

上面－13

上面－14

上面－15

上面－16

上面－12

上面－17

上面－18

上面－19

上面－20

上面－21

上面－23

上面－22

上面－24

上面－26

上面－26

上面－25

上面－27

上面－28

上面－29

上面－30

上面－31

上面－32

上面－33

上面－35

上面－34

上面－37

上面－38

上面－36

下面－1

下面－3

下面－4

下面－5

下面－2

下面－6

下面－7

下面－8

下面－9

下面－10

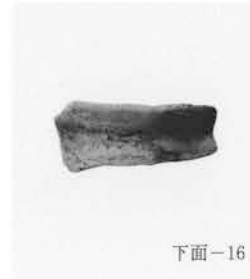
下面－11

下面－12

下面－13

下面－14

下面－15


下面－16

下面－17

下面－18

下面－19

下面－21

下面－22

下面－20

下面－23

下面－24

下面－25

下面－26

下面－27

下面－28

下面－29

下面－30

下面－31

下面－32

下面－33

下面－34

下面－35

下面－36

下面－37

下面－38

下面－39

下面－40

下面－41

下面－42

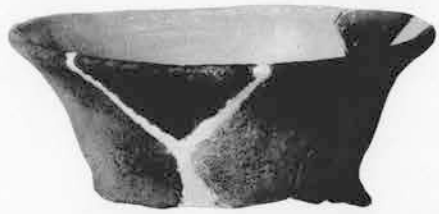
下面－43

下面－44

下面－45

下面－49

下面－47



下面－50

下面－48

下面－52

下面－54

下面－55

下面－51

下面－57

下面－53

下面－58

下面－56

下面－59

下面－60

下面－61

下面－62

下面－63

下面－64

下面－65

下面－46

外－1

外－3

外－5

外－2

外－4

外－6

外－7

外－8

外－10

外－11

外－9

外－12

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第297集

寺尾町下遺跡　住宅宅地関連公共施設整備促進事業（主要地方道高崎万場秩父線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年（2002年）3月25日　印　刷
平成14年（2002年）3月26日　発　行

編集／発行　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電　話　0279（52）2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/
印　刷／　松本印刷工業株式会社